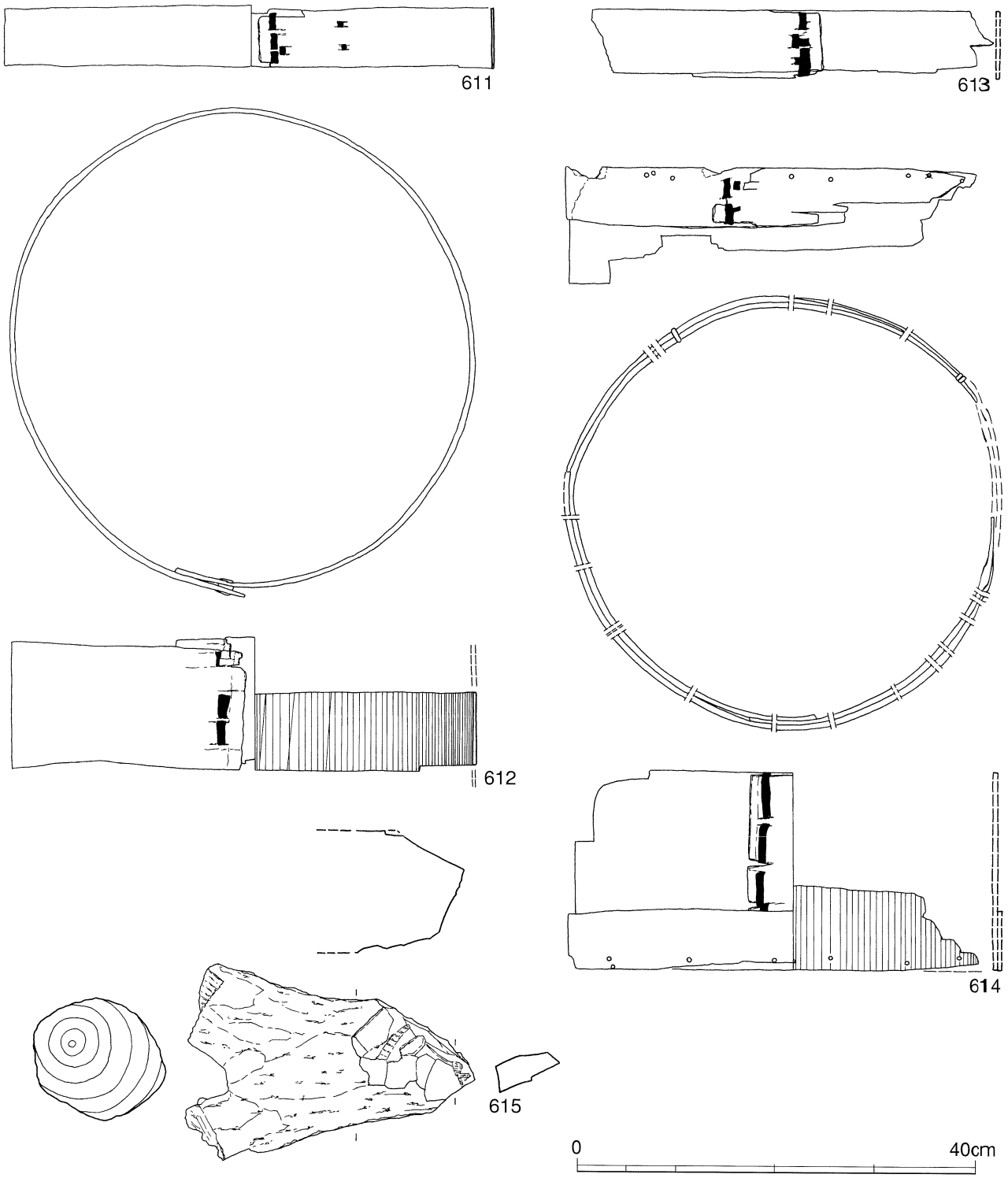


図98　SX02出土の木製品

ＳＸ14　　５区東部で確認した水溜め遺構で、ＳＢ04－Ｐ１を切っている。直径0.66m、深さ0.26mの正円形の掘形内で、やや北西に偏して円形曲物が北東方向に傾いた状態で据えられている。曲物側板が天地ともにもともと欠損していることから、再利用品が据えられたものと考えられる。

曲物側板（617）は直径36.0cm、残存高21.0cm、厚さ0.4cmで、内面には上下縁に直交すると推定できるケビキが入れられている。かろうじて遺存する綴じ部分には樺皮が残存していないものの、少なくとも３段以上で綴じられていたようである。また、綴じ目とは別に樺皮の遺存する部位があり、２段内綴じの高さ4.0cmの曲物帯板（616）にも中位に樺皮の綴じ目と木釘孔が遺存することから、本来は一体のものであったと考えられる。

なお、出土土器には土師器・須恵器の小片がわずかにある程度で、詳細な時期は不明である。ＳＸ02と同様の時期と考えている。

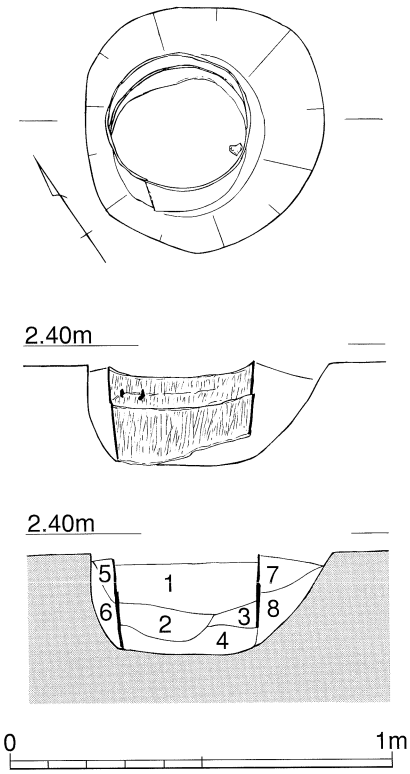


図99　SX14実測図

1 暗灰色細砂質シルト
2 暗灰色シルト混極細砂～細砂
3 乳色シルト混細砂～細礫
4 灰色シルト質極細砂
5 暗灰色シルト質細砂
6 暗灰色シルト質極細砂～細砂
7 淡黒灰色シルト質極細砂～細砂
8 淡乳灰色シルト混細砂～中砂

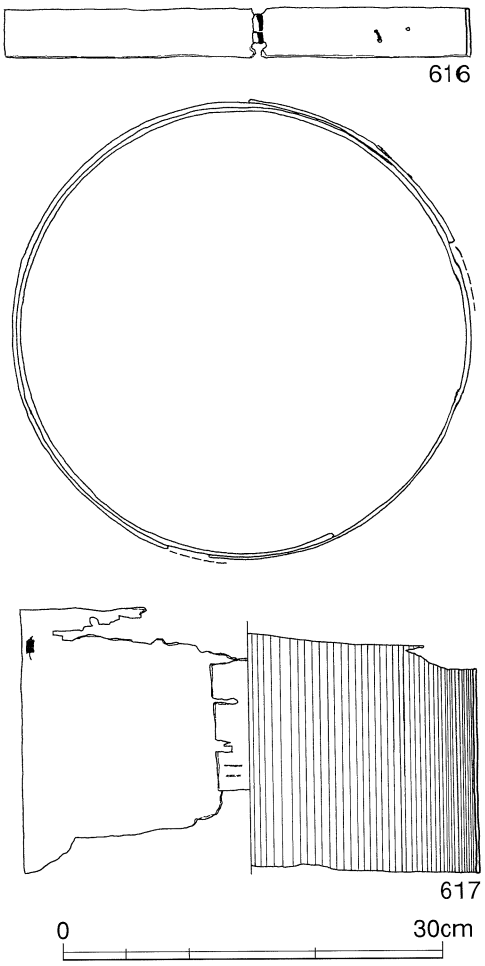


図100　SX14出土の木製品

第１遺構面の遺構に伴わない遺物

１区を中心として出土した遺物で、土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器がある。

土師器　　（618・619）は口縁部が強く曲げられた「て」の字状口縁に近い形態の土師器皿。

須恵器　　（621）は精良な胎土をもつ須恵器坏Ｂで、底部外面端部に端面全体で接地する貼り付け高台をもつ。

（622）は須恵器坏Ｂとも椀とも捉えられる個体で、焼き歪みが顕著である。高台は貼り付けで、丸みをもつ。

（623）は体部中位に段をもつ大型椀の底部。底部外面は回転ヘラ切りの後下外方へ踏ん張る高台が貼り付けられる。

（624）は底部外面糸切り未調整の椀の平高台底部。体部外面下位に段をもつ。

（625）は須恵器壷の上半で、丸みをもった筒形の体部と平底をもつ形態と考えられる。（626）は須恵器小型壷の口頸部。

灰釉陶器　（627）は灰釉陶器の瓶あるいは壷の底部で、外面にヘラ記号がある。高台は丸みをもつしっかりしたもので、体部外面のヘラ削りが顕著である。

瓦器　（628）はＳＢ08の上面で出土した瓦器皿で、内面はやや疎らな横方向の暗文が施される。（629）は瓦器椀で、内湾しながらたちあがる体部とわずかに外反する口縁部をもつ。口縁部内面は凹状に仕上げる。内面見込みは直交する疎らな暗文、体部内面は横方向の密で細かい暗文。貼り付け高台は丸みをもち、そう高くはない。

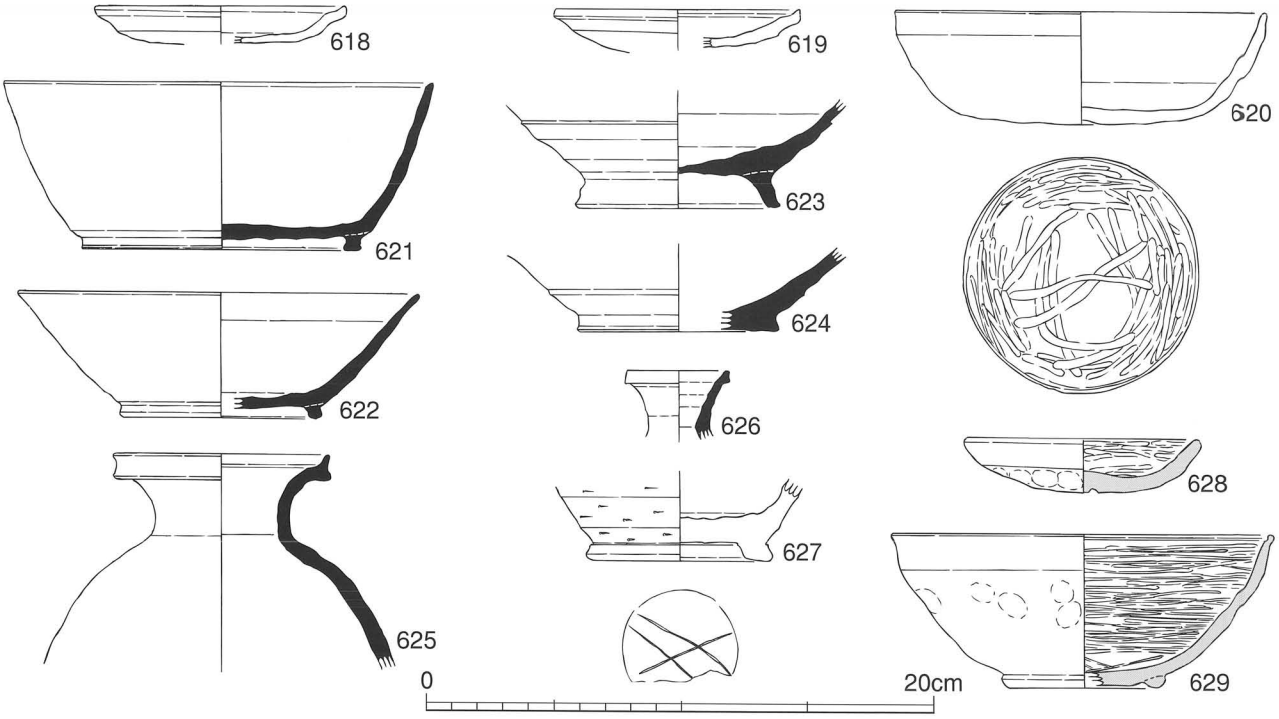


図101　第１遺構面の遺構に伴わない遺物

表22　第１遺構面の遺構に伴わない遺物　観察表

No.	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎　土	焼成	色調
618	土師器	皿	9.8	1.5		90	微砂粒をわずかに含む	良好	淡乳色
619	土師器	皿	9.5	1.7		60	0.5～1.0㎜のチャート・石英わずか	良好	乳色
620	土師器	坏	14.6	4.5		20	1～2㎜大のチャート・石英・クサリレキ	良好	明乳色
621	須恵器	坏Ｂ	16.8	6.7	10.8	15	1～2㎜大の白・灰色砂粒をわずかに含む	良好	灰白色
622	須恵器	坏Ｂ	15.6	5.0	7.5	25	1㎜大の白色砂粒をわずかに含む	良好	暗緑灰色
623	須恵器	稜椀	—	4.4	7.6	50	1㎜前後の白色砂粒を含む	良好	淡緑灰色
624	須恵器	椀	—	3.3	7.8	25	1㎜前後の灰・褐色砂粒をわずかに含む	良好	灰色
625	須恵器	壷	8.4	8.5		30	1㎜前後の灰色砂粒をわずかに含む	良好	灰色
626	須恵器	壷	4.0	2.8		100	1㎜前後の灰色砂粒をわずかに含む	良好	明灰色
627	灰釉陶器	壷	—	3.3	6.7	100	1～2㎜大の石英・チャートを含む	良好	淡白灰色
628	瓦器	皿	9.1	2.1		100	0.5～1.0㎜のチャート・石英を含む	良好	黒～淡乳色
629	瓦器	椀	15.0	6.1	4.9	35	1㎜大の石英わずかに含む	不良	淡黒灰色

滑石製品　（630）は滑石製の用途不明品である。長径10.3cm、短径7.0cm、最大厚さ1.2cmの楕円形の円盤の片面に、高さ1.4cmの突起部を削り出したもので、突起部には「十」字形に幅５mmの溝が刻まれている。縁辺部は明確な面を形成せず、不明瞭な仕上げである。重さ104.9g。突起部が削り出された表面は削痕が明瞭で、一部煤が付着している。一方、裏面は突起部に対する部分が緩やかにくぼんでおり、その他は擦痕が明瞭である。石鍋の転用品かとも考えられる。（山本）

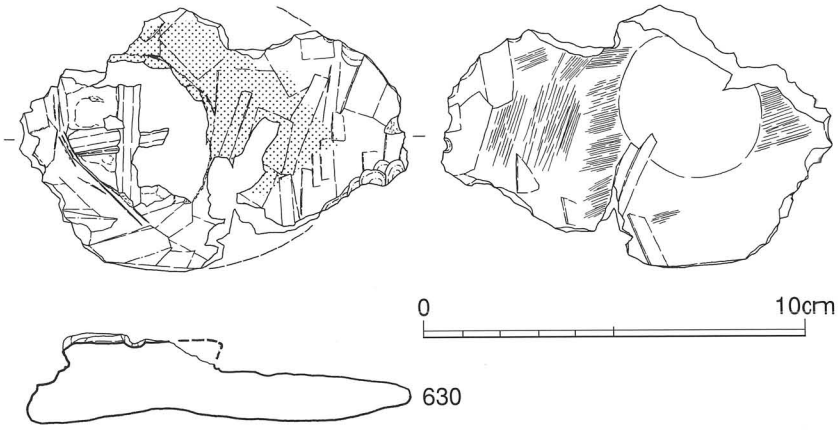


図102　第１遺構面の遺構に伴わない石製品

（6） 遺構に伴わない遺物 （西半区の遺物包含層出土の遺物）

4区西～5区にあたる調査区西半を中心にして良好に遺存していた遺物包含層から出土した遺物群である。出土した遺物には土師器・須恵器・施釉陶器・越州窯系青磁・飯蛸壷・漁網錘・木簡を含む木製品などがある。

土師器　土師器は2点を図化できたのみである。（632）は手づくねのミニチュア土器で、内面は不整方向のナデ仕上げで、外面には粘土紐の接合痕が明瞭である。

須恵器　（633～649）は須恵器で、供膳形態がほとんどである。6世紀後半に比定できる坏蓋（633）から、見込み部が明瞭に窪む形態を採り、12世紀前半に比定できる椀（649）まで、その年代幅はかなり広いものの、土器そのものの遺存状態は比較的良好である。

（638）は平らな底部から斜め上方にまっすぐ延びる口縁部をもつ坏Aで、精良な胎土のためか、シャープな仕上がりである。底部外面はヘラ切り未調整。

（640）は口縁部内面に断面三角形のかえりをもつ坏G蓋で、つまみは欠損する。天井部外面はヘラ削り調整で仕上げられる。

（647）は椀の底部と考えられる。高台はやや外方へ踏ん張り、内端面で接地する。外面の調整は静止糸切りの後回転ナデで、内面は丁寧なナデで平滑に仕上げる。

（648）は卵形の体部をもつ壷Lの口縁部で、端部は強く屈曲した後つまみ上げ、幅広の端面を作り出す。

施釉陶器　（650～652・654～657）は緑釉陶器である。（652）はほぼ水平に延びる体部から短く外反しながら延びる口縁部をもつ皿。高台の形態はほとんど遺存しないため不明である。体部外面に横方向のヘラ磨き調整が施される。（656）は丸みのある高台をもつ椀の底部で、胎土は灰色である。（657）は小型瓶の底部で、外面は回転糸切り未調整である。胎土は灰白色で、淡黄緑色で外面のみ施釉。（653）は灰釉陶器皿で、口縁端部が鋭く外反する。

越州窯系青磁　（658）は斜め上方に延びる口縁部をもつと考えられる越州窯系の青磁碗の底部。施釉は均質で、暗黄緑色。底部外面は中央を円形に抉り、蛇の目高台に削り出す。高台の外縁には焼き台の痕跡が少なくとも3ケ所遺存する。

墨書土器　墨書が確認できる土器片が5点出土している。（669）は「驛ヵ新」と判読でき、土師器坏Aあるいは皿Aの底部外面。（670）は「驛」と判読でき、須恵器坏B蓋内面。（671）は「驛ヵ」と判読でき、須恵器坏A外面か。（672）は「驛ヵ」と判読でき、須恵器皿A外面か。（669～671）の墨書はいずれも比較的小型である。（673）は須恵器坏Bの底部で、外面の高台内側に「卅一」と判読できる墨書がある。

砥　石　（668）は砥石で、2面に横方向の使用痕が認められ、小口面には線刻にも似た条痕が無数に遺存する。

金属器　（674）は長さ8.6cmで、断面が六角形に近い直径7mmの棒材の両端をやや細く仕上げ、丸く巻き込んで輪を作り出したものと、長さ5.5cm以上で、一端を欠く有環の断面円形の直径6mmの棒材が結合した鉄製品である。遊環・鏡板に当たる部材が遺存しないが、轡の一部とも考えられる。（675）は両端を欠損する断面方形の鉄釘。

（676）は青銅製の有環の鋳造飾金具で、長さ5.8cm、最大幅3.3cmである。鞍の飾金具とも考えられる。

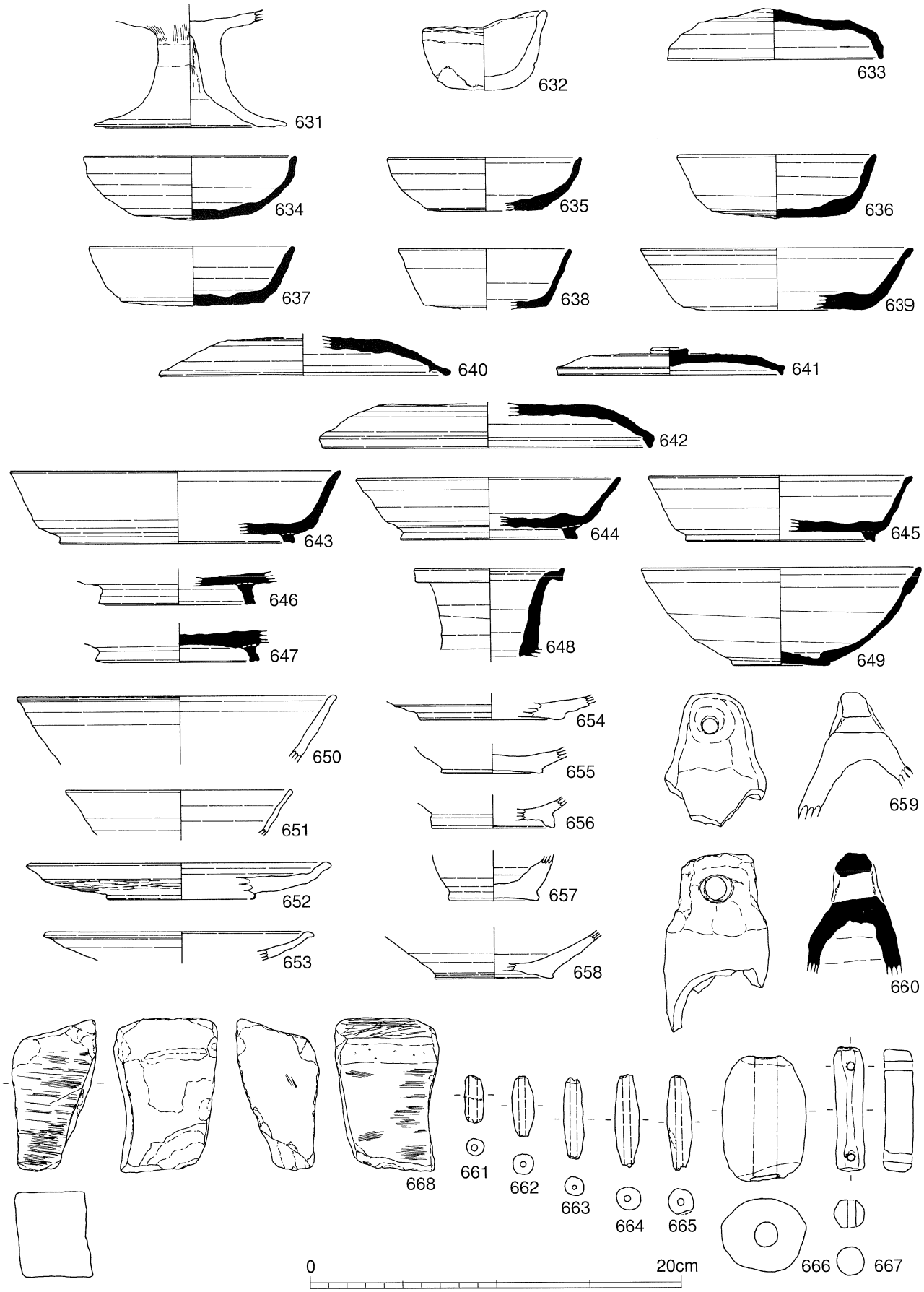


図103　遺構に伴わない遺物（1）

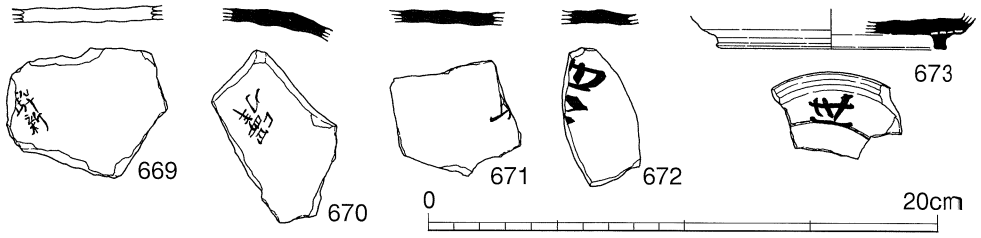


図104
遺構に伴わない遺物
（2）（墨書土器）

表23　遺構に伴わない土器　観察表

No.	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎　土	焼成	色調	その他特徴
631	土師器	高坏	—	6.5	10.4	100	2㎜前後のチャートを含む	良好	乳茶灰色	やや摩滅
632	土師器	ミニチュア	6.5	4.4		95	2～3㎜大のチャートを含む	良好	乳茶灰色	
633	須恵器	坏蓋	11.8	2.9		75	2㎜大の白色砂粒を含む	良好	淡青灰色	自然釉
634	須恵器	坏G	11.4	3.7		30	2～3㎜大の白色砂粒を含む	良好	灰色	
635	須恵器	坏G	10.4	2.9		25	1㎜前後の黒色砂粒を含む	良好	青灰色	
636	須恵器	坏A	10.8	3.6		50	1㎜前後の乳色砂粒を含む	良好	青灰色	焼け歪み
637	須恵器	坏A	11.0	3.3		80	1㎜前後の白色砂粒を含む	良好	青灰色	
638	須恵器	坏A	9.2	3.3		25	1㎜前後の白色砂粒を含む	良好	灰褐色	
639	須恵器	坏A	15.0	3.5		13	2～3㎜大の白色砂粒を含む	良好	灰色	
640	須恵器	坏G蓋	15.6	2.2		33	1～2㎜大の白色砂粒を含む	良好	青灰色	
641	須恵器	坏B蓋	11.4	1.5		35	1㎜以下の白色砂粒を含む	良好	淡青灰色	
642	須恵器	坏B蓋	17.7	2.5		33	2～3㎜大の白色砂粒を含む	良好	淡青灰色	
643	須恵器	坏B蓋	17.8	4.0	12.6	30	1㎜前後の白色砂粒を含む	良好	暗緑灰色	
644	須恵器	坏B	14.2	3.4	9.2	33	2㎜大の白色砂粒を含む	良好	青灰色	
645	須恵器	坏B	14.4	3.6	10.3	50	1㎜大の白色砂粒を含む	良好	灰色	
646	須恵器	坏B	—	1.8	8.5	50	1㎜大の白色砂粒を含む	良好	灰色	
647	須恵器	椀	—	1.8	8.0	50	1㎜大の白色砂粒を含む	良好	青灰色	静止糸切り
648	須恵器	壷	8.0	5.9		15	1㎜大の白色砂粒を含む	良好	灰黒色	
649	須恵器	椀	15.4	5.4	5.4	80	2～3㎜大の灰色砂粒を含む	良好	灰色	
650	緑釉陶器	椀	17.0	3.7		5	微砂粒をわずかに含む	良好	淡黄緑色	軟質
651	緑釉陶器	椀	12.0	2.6		6	0.5㎜大の白色砂粒わずかに含む	良好	明黄緑色	硬質
652	緑釉陶器	Ⅲ	15.6	2.0	7.9	10	0.5㎜大の白色砂粒わずかに含む	良好	深黄緑色	硬質
653	灰釉陶器	Ⅲ	13.9	1.6		12	1㎜前後の乳白色砂粒を含む	良好	明灰色	乳黄緑色釉
654	緑釉陶器	椀	—	1.4	8.6	20	0.5㎜大のチャートを含む	良好	黄緑色	軟質
655	緑釉陶器	椀	—	1.5	5.5	12	0.5㎜大のチャートを含む	良好	濁黄緑色	軟質
656	緑釉陶器	椀	—	1.7	6.4	25	0.5㎜大の灰色砂粒わずかに含む	良好	暗黄緑色	硬質
657	緑釉陶器	瓶	—	2.6	4.7	50	ほとんど砂粒を含まない	やや良	淡黄緑色	硬質
658	青磁	碗	—	2.7	6.2	25	堅緻	良好	暗黄緑色	越州窯系
659	土師器	飯蛸壷	6.3	7.0		30	0.5～1㎜大のチャート・石英・長石	良好	暗乳色	重さ105.2g
660	須恵器	飯蛸壷	5.9	9.8		55	1㎜前後の白・灰色砂粒を含む	良好	暗灰色	重さ122.9g
661	管状土錘		1.1	2.6		100	0.5～1㎜大のチャート・石英	良好	淡乳褐色	重さ 2.9g
662	管状土錘		1.2	3.9		100	0.5～1㎜大のチャート・長石	良好	淡乳褐色	重さ 4.3g
663	管状土錘		1.1	5.5		100	1㎜前後のチャート・石英	良好	淡乳色	重さ 4.7g
664	管状土錘		1.4	6.1		100	1㎜大のチャート・長石・クサリレキ	良好	淡黒灰色	重さ 8.0g
665	管状土錘		1.4	5.3		100	ほとんど砂粒を含まない	良好	暗乳色	重さ 8.2g
666	管状土錘		4.6	7.0		100	1～2㎜大のチャート・長石・石英	良好	暗褐色	重さ135.6g
667	棒状有孔土錘		1.7	6.9		100	1㎜前後のチャート・石英	良好	黒褐色	重さ22.3g

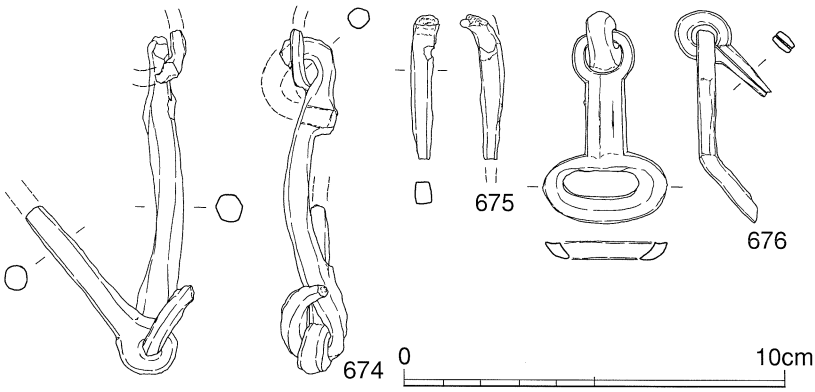


図105　遺構に伴わない遺物（3）（金属器）

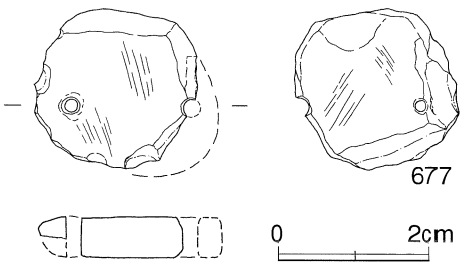


図106
遺構に伴わない遺物（4）
（滑石製品）

滑石製品　(677) は直径2.2cm、厚さ0.55cm、重さ3.7gの滑石製の双孔円盤。古墳時代後期のものであろう。

木製品　木簡のほか、工具あるいは農具の柄、紡織具（糸巻）、容器（蓋板・挽物）、食事具（箸）、祭祀具（人形・刀子形・鳥形）などの製品のほか、加工木や杭材がある。

木簡 3　〔列ヵ郷ヵ〕〔上ヵ〕

「＜嶋□□□□米　(126)×22×8　039型式

図107
遺構に伴わない遺物（5）（木簡）

木簡 3 (678) は頭部に両側からの切り欠きが施された荷札木簡と考えられる。下半は欠損している上、判読できる文字が少ないが、木簡 1 と同様に「米」の文字が判読できる。

(685) はＡⅡ型式とされる中型の糸巻の枠木と考えられる。断面形は蒲鉾形で、平坦な腹面には直径0.8cmの断面円形の横木が折損した状態で、心々距離10.8cmで遺存している。

(686・687) は箸と考えられる。細かい面取りが施された断面がほぼ円形の棒材で、先端がやや尖っている。(688) は短い口縁部をもつ挽物の皿で、復元径は約19cmである。

(691) は蓋板とされるもので、円板の中央に長径約8cm、短径約4cmの大きな楕円形の孔を開け、さらに周囲にも 4 列に平行して円孔を配置する。樺皮が端部に 1 ケ所遺存しており、何かが固定されていたのであろうか。(690) も同様な資料と考えられる。

(692) は人形の頭部か。(693) は立体人形で、柱状の小木片を加工し、目・鼻の表現のない頭部を丸く削り出し、両側から切り込みを入れて、頚部を表現している。下端は尖らせて終わっている。(694) はＡ型式の刀子形で、柄の表現は不明瞭である。(696) は胴・尾を表現した鳥形と考えている。胴部には0.8×1.4cmの長方形のホゾ穴が 2 個穿たれ、尾部の先端にもホゾ穴様の長方形の切り込みがある。先端のホゾ穴に別造りの頭部が取り付けられ、中央のホゾ穴には羽根の部材と支柱が挿入されていたものと考えている。

(697) は面取りが顕著な棒材で、直径 3 mmの円孔が側面に 1 個穿たれる。用途は不明である。(山本)

表24-1　遺構に伴わない木製品の法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹　種	備考	W-No.
678	木簡	暗灰色シルト質細砂	12.6	2.2	0.8	スギ		7296
679	柄	暗灰色シルト質細砂	23.5	2.4	1.3	スギ		6991
680	柄	暗灰色シルト質細砂	22.3	2.4	1.0	ヒノキ		6992
681	半丸柄	暗灰色シルト質細砂	22.9	2.8	1.3	ヒノキ		7036
682	用途不明	暗灰色細砂	14.6	2.4	0.8	ヒノキ		7067
683	角柄	暗灰色シルト質細砂	9.8	1.1	0.9	モミ属		7058
684	角柄	暗灰色シルト質細砂	11.5	1.1	0.5	スギ		7055
685	柄	暗灰色シルト質細砂	24.0	1.9	1.3	ヒノキ属		6984
686	箸？	暗灰色シルト質細砂	21.5	0.6	0.6	針葉樹		6995
687	箸	暗灰色シルト質細砂	12.0	0.5	0.5	ヒノキ		6986
688	木皿	暗灰色シルト質細砂	9.7	5.8	0.6	ヒノキ属		6982
689	板材	暗灰色シルト質細砂	10.0	2.9	0.6	ヒノキ		7048
690	曲物底？	暗灰色シルト質細砂	10.2	2.4	0.6	ヒノキ属		7057
691	曲物底？	暗灰色シルト質細砂	19.4	20.4	0.7	ヒノキ		7053
692	人形	暗灰色シルト質細砂	14.7	6.3	1.2	スギ		7059
693	人形？	暗灰色シルト質細砂	9.0	1.5	1.3	針葉樹		6985
694	刀形	暗灰色細砂	17.0	1.7	0.5	ヒノキ		7066
695	斎串？	暗灰色シルト質細砂	16.0	0.9	0.7	ヒノキ		6981
696	鳥形？	暗灰色シルト質細砂	25.6	6.5	3.5	ヒノキ		7052
697	有孔角材	暗灰色シルト	40.1	3.4	3.4	ヒノキ属		7156

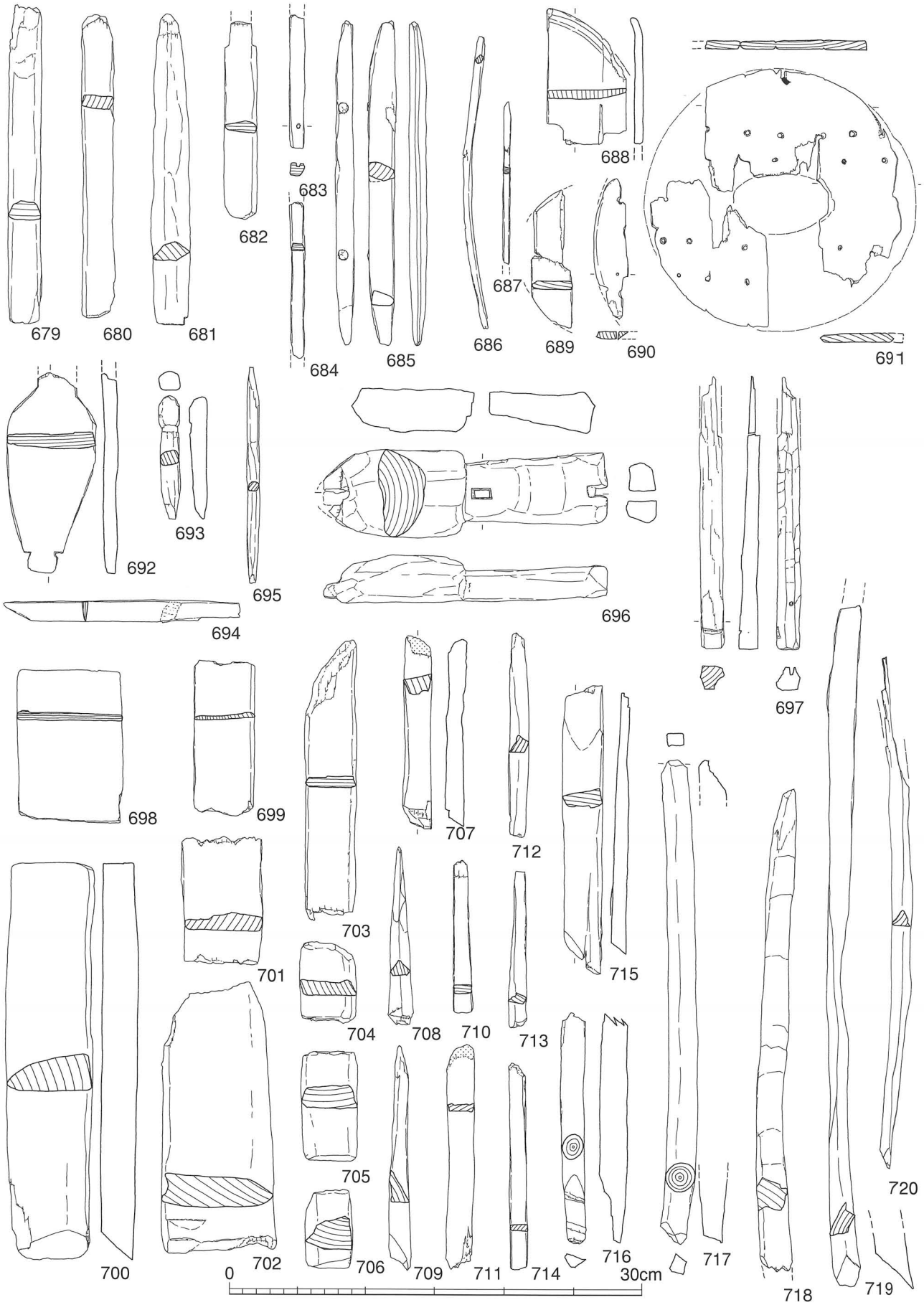


図108　遺構に伴わない遺物（6）（木製品）

表24-2　遺構に伴わない木製品の法量と樹種

No.	種類	遺構・層位	長さcm	幅(直径)cm	厚さcm	樹　種	備考	W-No.
698	板材	暗灰色シルト質細砂	11.2	7.5	0.7	ヒノキ属		6983
699	板材	暗灰色シルト質細砂	29.8	6.2	2.7	ヒノキ		7041
700	板材	暗灰色シルト質細砂	10.3	4.3	0.4	ヒノキ		7007
701	板材	暗灰色シルト質細砂	9.3	5.8	1.3	ヒノキ		7040
702	板材	暗灰色シルト質細砂	19.4	8.3	2.4	ヒノキ		7006
703	板材	暗灰色シルト質細砂	20.0	3.7	0.8	ヒノキ		7038
704	板材	暗灰色シルト質細砂	5.8	4.2	1.1	ヒノキ属		6989
705	切断角材	暗灰色シルト質細砂	8.1	4.1	1.2	コウヤマキ		7011
706	切断角材	暗灰色シルト質細砂	5.8	3.5	2.4	コウヤマキ		7012
707	角材	遺構面上面精査中	13.9	2.1	1.3	アスナロ		7061
708	加工材	暗灰色シルト質細砂	13.0	1.8	1.1	ヒノキ		7046
709	加工片	暗灰色シルト質細砂	15.9	1.6	2.3	ヒノキ		7037
710	箆状	暗灰色シルト質細砂	10.2	1.3	0.6	ヒノキ		7047
711	板材	暗灰色シルト質細砂	11.0	2.0	0.6	ツガ属		6994
712	割材	暗灰色シルト質細砂	15.0	1.4	1.3	ヒノキ		7051
713	加工片	暗灰色シルト質細砂	11.5	1.3	0.7	ヒノキ属		7064
714	割材	暗灰色シルト質細砂	15.1	1.2	0.4	ヒノキ		7002
715	板材	暗灰色シルト質細砂	21.2	3.0	1.2	ヒノキ		6990
716	丸材	暗灰色シルト質細砂	16.9	1.8	—	カヤ		6993
717	丸杭	暗灰色シルト質細砂	35.7	2.2	—	モミ属		6987
718	割角材	暗灰色シルト質細砂	35.5	2.4	2.3	ヒノキ		7009
719	加工片	暗灰色シルト質細砂	50.4	2.1	2.2	ヒノキ		7031
720	加工片	暗灰色シルト質細砂	37.6	1.4	1.2	ヒノキ属		7033
721	丸杭	暗灰色シルト質細砂	31.6	7.2	6.9	マツ属複維管束亜属		7005
722	丸杭	暗灰色シルト質細砂	26.5	3.3	3.7	アカマツ		7013
723	丸杭	暗灰色シルト質細砂	21.6	6.8	3.7	サカキ		7029
724	丸（柄）杭	暗灰色シルト質細砂	18.1	7.1	6.4	アカマツ		7030

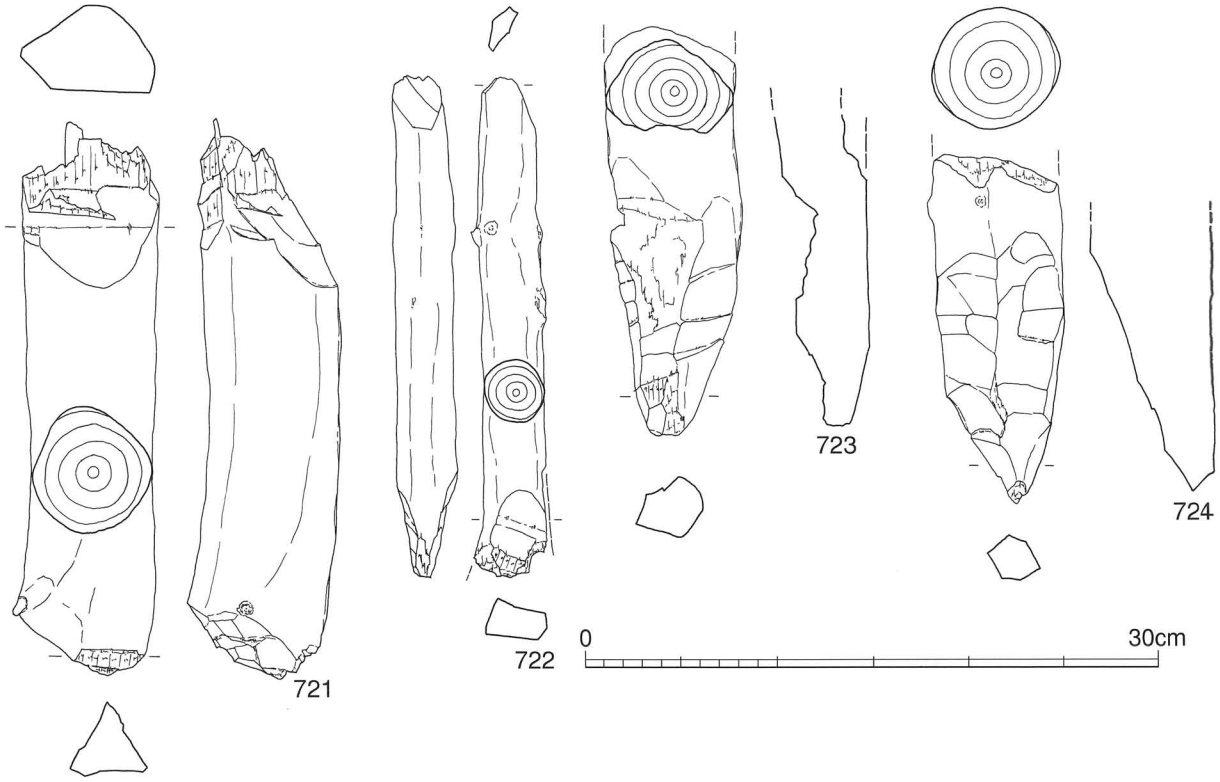


図109　遺構に伴わない遺物（7）（木製品）

（7） 馬歯の観察

動物遺存体　約30点の動物遺存体が出土しているが、表25のとおりすべてウマの歯と確認された[1]。

時期　その時期および出土状況は、8世紀から9世紀前半の溝（ＳＤ06・07）、流路（ＳＲ01）の堆積物として、あるいは12世紀前半以前の包含層からの出土である。12世紀前半を下限とする包含層に含まれているものも、8～9世紀の堆積物が再堆積した可能性が高いことから、これらの遺体はいずれも元来8～9世紀に属したと推定できる。埋没時にはこれらの歯は、上顎および下顎骨共にあったのであろうが、これらの骨の多くは分解し、歯もしくは歯列のみが残存したものと考えられる。しかし、今回の大半の歯は、象牙質とセメント質が分解し、エナメル質だけが残存しているものが多い。

出土状況　出土遺構から見ると、これらの歯が人為的に埋葬されたものではなく、死亡後処分され、川や溝に廃棄、あるいは散乱したものと考えられる。何故ならば、上顎骨と下顎骨、あるいは歯列が揃う例もほとんどなく、臼歯が1ないし2本での出土例が多いことも、すべてが埋葬後に撹乱されたと想定しない限り、丁寧に埋葬されたことを否定している。

体格　確認されたウマの歯は、ほとんどが臼歯であり、前臼歯から後臼歯まで6本全てがそろっていたのは2資料だけであった。Ｂ10は歯槽間の歯列長154mm、Ｂ19は同じく歯列長141㎜を測る。この歯列長から推定するとおおむね小型馬の体格と推定できる。

年齢　一方、歯の高さから推定できる死亡推定年齢を見ると、Ｂ22の第２後臼歯が74.2 ㎜と、4歳馬クラスのものもいるが、老齢馬が目立ち、中には10歳を超えるものもいる。また逆に明確な幼馬も見られない。

遺跡との関係　このような出土状況と、老齢馬が多いことから、これらのウマは、食用目的として人間に利用されていたのではなく、運搬用として飼育されていたと推定できる。さらに、幼馬が見られないことから、当地が牧であった可能性も低い。このことは、当遺跡が、驛家推定地と考えられることと、極めて調和的である。また、他地域の地方官衙遺跡でも、ウマ遺体の出土率が高い傾向にあることとも一致している。

市内の出土ウマ　古い例としては、東灘区住吉宮町遺跡第32次１号墳の周濠に供献された例がある。５世紀中頃に属する、祭祀に伴う犠牲馬である[2]。北区宅原遺跡では、祭祀具とともに7世紀前半の溝から、ウマの下顎骨が出土している。この例も祭祀に伴う犠牲馬である。奈良時代に入ると出土例は増え、長田区の御蔵遺跡、兵庫区の上沢遺跡、須磨区大田町遺跡など官衙的色彩の強い遺物が出土する遺跡から出土している。平安時代の終わりから鎌倉時代にかけて、さらに出土遺跡は増える傾向にあり、馬が普及してきた結果と考えられる[3]。

保存方法　歯列の残るものは、現場から土ごと取り上げ、硬質発泡ウレタン樹脂で出土状態を維持しながらアルコールで洗浄を行った。歯単体のものも同様に洗浄を行った。乾燥後、アクリル系合成樹脂（パラロイドB72）５％溶液を数回塗布し、強化を図っている。歯列の残るものは、シリコーン樹脂、エポキシ系合成樹脂を用いて支持台を作成した。（千種）

表25　馬歯　一覧表

遺物No.	出土地区	出土層位	遺物名（点数）部位	推定死亡年齢	時期	台帳番号
B1	2区西部	SR01〔茶灰色小礫まじり細砂〕	ウマ臼歯(1)		～9世紀前半	099
B2	2区西部	SR01〔灰色～黒灰色小礫まじり細砂〕	ウマ臼歯(2)		～9世紀前半	138
B3	2区中央部	SR01〔暗灰色シルト質細砂〕	ウマ臼歯(2)		～9世紀前半	139
B4	3区中央部	SR01〔暗灰色シルト質細砂～淡褐色砂〕	ウマ臼歯(1)	老齢	～9世紀前半	145
B5	2区西部	SR01〔暗灰色小礫まじり細砂〕	ウマ臼歯(4)		～9世紀前半	151
B6	2区西部	SR01〔灰(茶)色小礫まじり細砂〕	ウマ臼歯右上(4)		～9世紀前半	170
B7	3区西部	SR01〔暗灰色小礫まじり細砂〕	ウマ臼歯(1)	老齢	～9世紀前半	184
B8	3区西部	SR01〔暗灰色小礫まじり細砂〕	ウマ臼歯(1)		～9世紀前半	191
B9	4区東部北張出部	SD03埋土	ウマ臼歯細片		9世紀初め?	257
B10	4区東部	SR01〔暗灰色小礫まじり細砂〕	ウマ臼歯右下(6)P2P3P4M1M2M3	6～7歳	～9世紀前半	265
B11	4区－1	SR01〔暗灰褐色シルト質細砂〕	ウマ臼歯右上(4)P3P4M1M2	老齢	～9世紀前半	344
B12	4区－2	SR01〔暗灰褐色シルト質細砂〕	ウマ臼歯(6)P2P3P4M1M2M3	老齢	～9世紀前半	345
B13	5区南半中央部	遺物包含層〔暗灰色細砂〕	ウマ臼歯(1)		～12世紀前半	389
B14	5区南東部	遺物包含層〔(暗)灰色細砂〕	ウマ臼歯(1)		～12世紀前半	437
B15	5区南西部	遺物包含層〔暗灰色シルト質細砂〕	ウマ臼歯(1)		～12世紀前半	443
B16	4区北西部	遺物包含層〔灰(茶)色細砂〕	ウマ臼歯(1)		～12世紀前半	444
B17	4区南西部	遺物包含層〔灰(茶)色細砂〕	ウマ臼歯細片		～12世紀前半	446
B18	4区西部	遺物包含層〔(暗)灰色細砂〕	ウマ臼歯(2)		～12世紀前半	470
B19	5区南西部	遺物包含層〔暗灰色シルト質細砂〕	ウマ臼歯右上P3P4M1M2M3	10歳以上	～12世紀前半	472
B20	5区南半中央部	遺物包含層〔暗灰色細砂〕	ウマ臼歯(1)		～12世紀前半	473
B21	4区南西部	遺物包含層〔淡灰色細砂〕	ウマ臼歯右上(2)	老齢10歳前後	～12世紀前半	476
B22	4区北西部	遺物包含層〔灰色細砂〕	ウマ臼歯左下(3)M1M2M3	4～5歳	～12世紀前半	477
B23	4区南西部	遺物包含層〔灰(茶)色細砂〕	ウマ臼歯左下(3)M1M2M3?		～12世紀前半	496
B24	4区南西部	遺物包含層〔灰茶色シルト質細砂〕	ウマ臼歯(1)		～12世紀前半	497
B25	5区北西部	SD06－③区	ウマ臼歯右下(1)		8世紀後半	508
B26	4区北西	SD07－⑦区	ウマ臼歯(1)		8世紀前半?	523
B27	4区	SD07－⑥区	ウマ切歯?歯根(1)		8世紀前半?	542
B28	4区北西	SD07	ウマ臼歯左上(2)		8世紀前半?	640
B29	5区	SP169埋土	ウマ臼歯(1)		?	691
B30	5区南西部	遺構精査中SD07－④～⑤区	ウマ臼歯左上(1)M3	老齢10歳前後	8世紀前半?	891

註（1）　奈良文化財研究所　松井章氏のご教示を得て、千種が作成した。
参考文献　西本豊弘・松井章編『考古学と自然科学－②　考古学と動物学』同成社　1999
（2）　中村大介「1号墳出土のウマについて」『住吉宮町遺跡第24次・第32次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　2001
（3）　表26は現在確認し得る資料を集成したものである。これらの資料の記載所見は、千種・中村によるものである。

表26-1　神戸市内出土の馬歯　一覧表

年度	遺跡名	調査次数	遺物番号	出土地区	出土層位	時　期	部位・点数	計測値（mm）
1982	新方遺跡大日地点	1次	R-561	E－2区	暗茶色泥土	不明	臼歯(1)	
1983	湊川遺跡	1次	R-031	3区	2層	中世以降	臼歯(1)	
			R-039	3区	SX01	中世以降	上右P3～M2(1)	B=29.74、H=59.41
			R-118	4区－E	第3層	中世以降	上右P3～M2(1)	L=23.74、B=22.61、H=64.0
1984	神楽遺跡	3次	R-124-2	N1E1区	第Ⅴ層	平安	上左右P3～M2(2)	左側　L=24.18、H=47.67
			R-420	N1E1区	SX02	不明	下臼歯(1)	
			R-543	N1E1区	第Ⅴ層	平安	臼歯(1～)	
			R-987	S1E7区	第Ⅵ層(暗褐粘質土)	古墳～奈良	上右P3～M2(1)	L=25.53、B=23.5、H=71.84
1985	住吉宮町遺跡	1次	R-003		SX01上面	中世	上左・P3～M2(1)	B=24.37、H=46.85
1986	宅原遺跡宮之元地区			10トレンチ	溝10T2Ⅳ層	7世紀前半	下顎全歯	左臼歯列長=160.1
1986	出合遺跡	22次	R-125		SD01下層	中世	上下臼歯(2～)	
			R-127		第Ⅴ層	鎌倉以降	臼歯(1)	
			R-156-1		第2面直上	鎌倉	下右M3(1)	
			R-156-2		第2面直上	鎌倉	上P3～M2(2～)	
			R-167		第2面直上	鎌倉	臼歯(2～)	
			R-181		SD	中世	下左M3～P2(3～)	L=27.57、B=16.26、H=45.78
			R-194		SD	中世	臼歯(1～)	
1988	三番町遺跡	2次	B-7	B－0区	黄灰砂	不明	上左M3(1)	B=20.1
1990	本山遺跡	14次	R-105	4－D区	第8層	弥生～中世	下右M3(1)	L=27.6、B=10.74
			R-420	2－C区	第Ⅷ層	弥生～中世	下左P3～M2(1)	L=27.07、H=60.95
1990	旧三宮駅構内遺跡	1次	R-280		第6層	古墳～室町	上左P3～M2(2)	H=72.22
1991	大田町遺跡	2次	R-129			不明	下右M3(1)	
			R-206-1	南西区	暗灰色砂泥	平安後期～鎌倉	下右P2～M3(6)	前臼歯列長=84.99
			R-206-2	南西区	暗灰色砂泥	平安後期～鎌倉	下右M3(1)	
1991	出合遺跡	27次	R-263	11B区	溝	古墳～奈良	下右P3～M2(4)	後臼歯列長=75.39、
			R-286	12B区	溝	古墳～奈良	下左P3～M3(5)	臼歯列長=146.9、後臼歯列長=88.95

表26-2　神戸市内出土の馬歯　一覧表

年度	遺跡名	調査次数	遺物番号	出土地区	出土層位	時　期	部位・点数	計測値（mm）
1992	楠・荒田町遺跡	11次	R-1631		褐色砂礫	不明	下右臼歯(1)	
1992	垂水日向遺跡	8次	R-069-2		SD03-A中層	平安後期～鎌倉	臼歯(1)	
1992	宅原遺跡宮之元地区	6次	R-112		流路02	奈良～鎌倉	上臼歯(1)	
			DOTE-297		土手	奈良～鎌倉	上右P3～M2(1)	B=23.51、H=50.75
1993	北青木遺跡	3次	R-304	5－A区	SK222	古墳?	下右臼歯(1)	
1993	新方遺跡北方地点	3次	R-462	調査区4	SD101	平安末～鎌倉	臼歯(1)	
			R-805	調査区4	中世面直上	平安末～鎌倉	臼歯(1)	
				調査区4	包含層	平安末～鎌倉	臼歯(1)	
1994	本山中野遺跡			1区		不明	上臼歯(1)	
1994	大田町遺跡	5次	R-084	C区南東	暗灰色細砂	不明	上左P3～M2(1)	L=27.61、B=27.55、H=67.41
1994	新方遺跡北方地点	4次	R-087	第4調査区4	SX302上層	奈良?	臼歯(1)	
				第4調査区4	SX302上層	奈良?	上右P3～M2(1)	B=24.57、H=65.4
1995	神楽遺跡	9次		地下室部分	Ⅴ層上半部	古代～中世	上左P3～M2(1)	
1997	住吉宮町遺跡	30次	R-101		黄褐色砂直上	中世	臼歯(1)	
			R-102		黄褐色砂	中世	上左P2(1)	
			R-103	中～北部	黄褐色砂	中世	上左右P3～M2(5)	
			R-104		灰黄色土包含層下	中世	I2～I3(1)	H=39.71
			R-105		黄褐色砂	中世	上臼歯(1)	
			R-106			中世	上右P3～M2(1)	L=23.94、B=21.46、H=70.31
			R-107		黄褐色砂	中世	臼歯(1)	
			R-108		黄褐色砂	中世	上臼歯(1)	
			R-110		流路	中世	臼歯(1)	
			R-112		黄褐色砂	中世	上右P3～M2(1)	B=25.83、H=22.72
1997	都賀遺跡	9次	R-067		北半獣骨群	近世	下左臼歯(1～)	
			R-096		獣骨群①	近世	下右P2～M3(6)	P2　L=32.63、B=12.92、H=45.79
1998	上沢遺跡	24次	R-066	3区	SX01	奈良初め	下左P3～M3(5)	後臼歯列長=81.83

表26-3　神戸市内出土の馬歯　一覧表

年度	遺跡名	調査次数	遺物番号	出土地区	出土層位	時　期	部位・点数	計測値（mm）
1997	三番町遺跡	8次	R-026			中世	上左P3～M2(1)	L=24.4、B=20.27、H=63.01
			B-109	3区	自然流路埋土	中世	上左右P3～M2(2)	右側　L=22.11、B=21.77、H=61.43
1998	本山遺跡	30次			包含層	不明	下右P3～M2(1)	L=23.3、B=12.45、H=46.3
1998	住吉宮町遺跡	31次	R-055	2-B区	SX03	室町	臼歯(1)	
				1-B区	1号墳北辺周溝底	古墳後期	全臼歯＋切歯(4～)	下顎左側　臼歯列長=170.8、前臼歯列長=91.2、後臼歯列長=77.46
1998	御蔵遺跡	11次	R-014	B区北端	暗渠埋土基底石	近世	下右M3(1)	B=9.45
			R-039	B区北端	SD301下層	近世	上左P3～M2(1)・下右M3(1)	下顎右側M3　L=29.91、B=11.74、H=36.9
1998	御蔵遺跡	12次	R-002		灰色泥砂	中世	上右P3～M2(1)	L=24.39、H=54.14
1998	御蔵遺跡	14次	R-003			古墳～中世	上左P3～M2(1)	L=25.73、B=24.07、H=76.03
1998	御蔵遺跡	17次	R-060			奈良	上右P3～M2(1)	L=23.67、B=23.85、H=56.71
			R-061			奈良	上右M3(1)	L=24.33、B=18.42、H=61.24
1998	御蔵遺跡	18次	R-046			平安後期～鎌倉	上右P3～M2(1)	L=27.22、H=63.53
			R-047			平安後期～鎌倉	上右P3～M2(1)	B=25.74、H=60.03
			R-049		SK01	平安後期～鎌倉	下左P3～4(1)	
1998	出合遺跡	39次	R-022	3tre北端	SD01下層	古墳～中世	下右P3～M2(1)	L=25.81、B=13.76、H=41.51
1999	深江北町遺跡	8次	R-178	4区	乳灰褐色粗砂	平安後半	上左P2～M2(5)	P2　L=38.96、B=23.95、H=56.61
			R-178	4区	乳灰褐色粗砂	平安後半	上右P2～M3(6)	M3　L=24.24、B=18.41
1999	都賀遺跡	16次	R-001	下段北西	暗淡灰色土	不明	上右P3～M2(1)	L=25.17、B=21.67、H=51.92
1999	上沢遺跡	35次	R-040	1－W区	包含層	古墳前期	下左P3～M2(1)	L=25.14、B=15.4、H=39.18
1999	御蔵遺跡	20-2次	R-033	Ⅱ区	SD107	中世	上左P2(1)	L=29.19、B=19.97、H=45.51
1999	御蔵遺跡	20-8次	R-016			中世	臼歯(1)	
1999	御蔵遺跡	20-15次	R-114		表土～旧耕土	不明	下左P3～M2(1)	L=23.72、B=14.96
1999	御蔵遺跡	23-6次	R-002		暗灰褐色シルト	奈良～平安	下左P2(1)	L=30.45、B=13.43、H=49.32
1999	御蔵遺跡	24-2次	R-002		灰色砂質シルト	中世	下右P3～M1(1)	H=75.01
1999	吉田南遺跡	15次	R-002			中世	下左臼歯(1)	
			R-003			中世	上左右P2～M2(2)	上顎左側P2　L=27.43、B=16.95、H=53.7

表26-4　神戸市内出土の馬歯　一覧表

年度	遺跡名	調査次数	遺物番号	出土地区	出土層位	時　期	部位・点数	計測値（mm）
1999	吉田南遺跡	15次	R-012	B-1区	灰色シルト質	中世	臼歯(1)	
			R-070		粘土	中世	下左臼歯(1)	
			R-107			中世	下右P3～M2(1)	B=14.42
			R-125	A~C、5~6区	第1面検出中	中世	上左P2(1)	L=32.26、B=21.34、H=38.65
			R-155			中世	上左P3～M2(1)	L=26.81、B=22.17、H=49.77
2000	御蔵遺跡	31-1次	R-138	4区	SD108	奈良～平安	下右P3～M3(5)	後臼歯列長=90.99 M3　L=25.17、B=21.67、H=51.92
				4区	SD108	奈良～平安	下左(1)	後臼歯列長=82.81 M3　L=30.04、B=12.0、H=67.31
				4区	SD108	奈良～平安	上左P3～M2(1)	L=26.15、B=25.82、H=62.53
2000	御蔵遺跡	36次	R-011	北半	SX01	不明	下左P3～M2(1)	L=23.41、B=13.71、H=37.44
2000	御蔵遺跡	37-4次	R-036		SX201	平安	下右P3～M2(1)	L=23.43、B=12.41、H=45.44
			R-036		SX201	平安	上左P2(2)	L=33.96、H=38.25
2001	大開遺跡	7次	R-001	N12W3区	SX01	不明	上左P3～M2(1)	
2001	上沢遺跡	45-1次	R-021			奈良～平安	下右P3～M3(3)	L=32.89、B=22.44、H=43.59
			R-048			奈良～平安	上右P2～M3(6)	上顎右側P2　L=38.15、B=24.27
			R-049			奈良～平安	下右P3～M2(1)	
2001	御蔵遺跡	44-1次	R-019		灰色シルト	平安中期	下左P2～M3(6)	臼歯列長=約170 P2　L=29.84、B=13.14、H=39.87
					灰色シルト	平安中期	上右P2(1)+破片(1)	L=35.7、H=43.67
2001	御蔵遺跡	45次	R-019	2区南半	黒褐色粘質土	平安前期	上左P3～M2(1)	L=31.6、B=21.0、H=32.4
			R-048	3区北半	黒褐色粘質土上面	平安前期	上左P3～M2(1)	L=25.6、B=20.39、H=70.2
			R-058	3区北半	黒褐色粘質土上層	平安前期	下左P3～M2(1)	
2001	行幸町遺跡	2次	R-063	拡張区	SD12　黒色粘土	奈良	下顎全歯	下顎右側前臼歯列長=90.93　P2 H=57.14

※1999年度以前の調査次数については、旧次数のまま表記している。

※計測部位は、次の文献による。　I:切歯　P:前臼歯　M:後臼歯

Driesch Angela Von Den 1976 *"A Guide to the measurement of animal bones from archaeological sites"* Peabody Museum Bulletins　No.1,Harvard　University.

Ⅲ．出土材と古環境の調査

（1）自然科学的分析試料のサンプリング

深江北町遺跡はこれまでに８回に及ぶ発掘調査が実施されてきているが、自然環境の復元に至るデータの蓄積はそれほど行われている状況ではなく、次節で述べられるように、第１次調査地点での出土木材の樹種同定が行われている程度である。

今回調査を実施した第９次調査地点では、確認された３面の遺構面に対応する各時期の植生ならびに自然環境の復元に寄与できると考えられる資料が得られたため、出土木製品の樹種同定と調査区壁面から採取した土壌の花粉分析および珪藻分析を実施した。それぞれの分析結果については、次節以降で報告する。なお、土壌採取地点は図110に示すとおりで、Ａが２区北壁中央付近、Ｂが５区西壁中央付近、Ｃが４区西部北壁である。また、採取土壌の層位は図111に示すとおりで、時期が限定できる土壌化層を対象としている。

まず、樹種同定の分析試料は、前章で報告したとおり、調査区東半の流路ＳＲ01あるいは西半の遺物包含層からまとまって確認されており、合計464点に及ぶ。そのほとんどが個々の資料について時期比定できないものの、奈良時代前半～平安時代前期のものに限定されている。さらに、製品が含まれることは言うまでもないが、加工痕のみを留めた削り屑あるいは付け木あるいは籌木のような割材が多数含まれており、当時の集落における加工木材の実態が把握できるものと考えられる。

なお、掘立柱建物の柱材が良好に残存していたことも前節で述べた。特にＳＢ03－Ｐ１のヒノキ材と同定された柱材について、年輪年代測定法による伐採年代の算出を試みたが、目視による観察で計測年輪数が100層に満たないことから、絶対条件を満たすには及ばず、断念せざるを得なかった。

次に、花粉および珪藻分析の試料は各壁面から採取した同一土壌としている。花粉分析では自然植生の復元あるいは栽培植物の存在について明らかにできるものと考えられる。また、珪藻分析では、今回の調査地点が現地表の標高約３ｍで、海岸線まで直線距離で約600ｍという地理的な環境と調査地点に堆積した土壌の起源を復元できるものと考えられる。（阿部・山本）

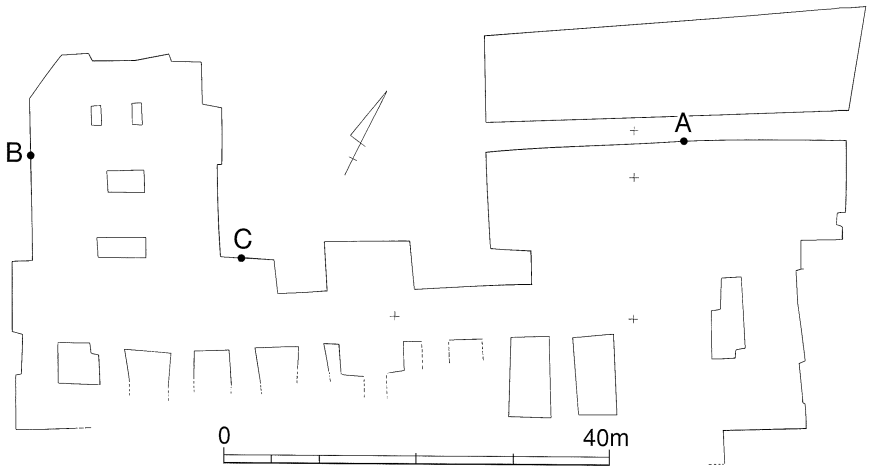
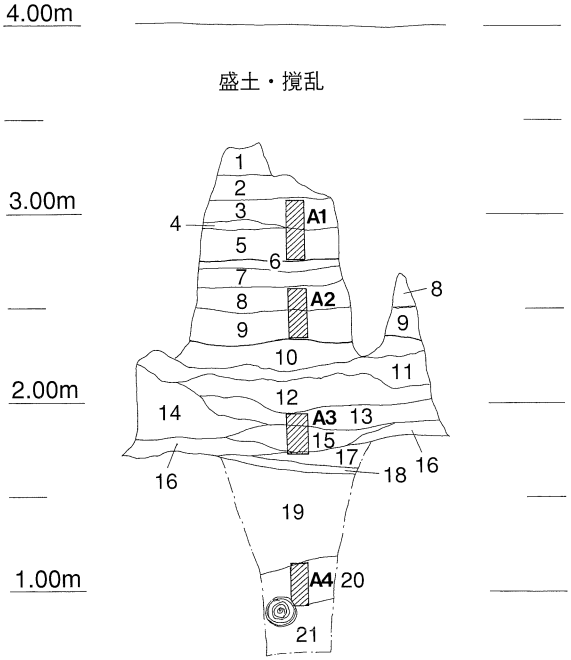
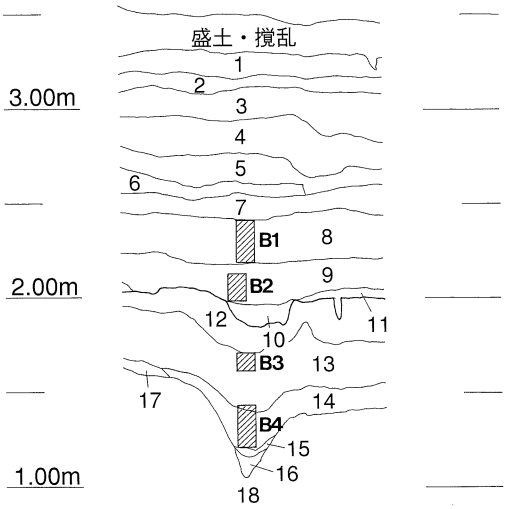


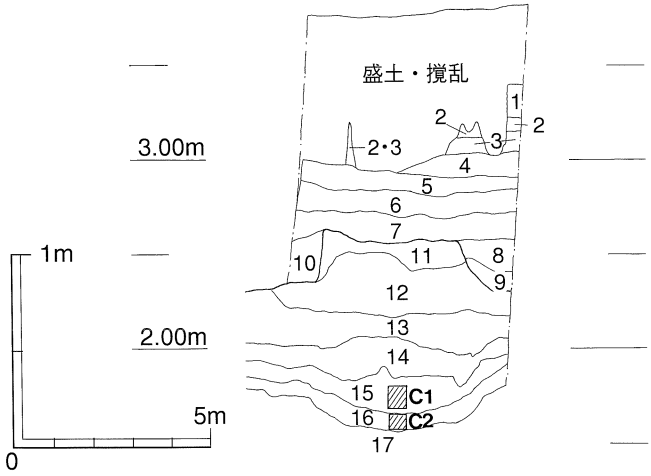
図110　土壌サンプル採取地点の位置



1　明黄色細砂～細礫　　2　淡青灰色シルト質極細砂
3　暗褐灰色細砂質シルト　　4　乳褐色砂
5　暗褐灰色細砂～粗砂質シルト
6　暗灰褐色シルト混じり細砂
7　淡黄灰色細砂～細礫
8　淡褐灰色シルト質極細砂～細砂
9　暗灰褐色細砂質シルト　　10　淡乳灰色極細砂～粗砂
11　暗灰色極細砂質シルト　　12　乳色極細砂～粗砂
13　黒灰色極細砂質シルト　　14　淡乳灰色極細砂～中砂
15　暗灰褐色シルト質極細砂～中砂
16　黒褐色細砂質シルト
17　淡乳灰色細砂～細礫　　18　淡黒灰色極細砂質シルト
19　淡青灰色細砂～粗砂（シルトをわずかに含む）
20　淡黒灰色極細砂混じりシルト（植物遺体多く含む）
21　淡灰色極細砂～細砂



1　旧耕土　　2　淡灰色細砂
3　灰（茶）色シルト質細砂
4　褐灰色～黄灰色シルト質細砂
5　淡灰（黄）色細砂　　6　灰黄色小礫混じりシルト
7　灰色～黄褐色細砂～粗砂
8　暗（褐）灰色シルト質細砂
9　暗褐灰色小礫混じりシルト質細砂
10　暗（褐）灰色粗砂混じりシルト
11　淡黒灰色細砂～粗砂　　12　淡乳褐色砂礫
13　（淡）黒灰色シルト　　14　黒灰色シルト
15　淡褐灰色粘土　　16　植物遺体層
17　黒色シルト混じり極細砂　　18　淡褐色極細砂～細砂



1　旧耕土　　2　灰色細砂
3　灰黄色シルト混じり細砂
4　灰茶色シルト質細砂　　5　灰茶色細砂
6　灰黄色シルト質細砂　　7　灰茶色小礫混じり細砂
8　暗灰色小礫混じりシルト質細砂
9　灰色小礫混じりシルト質細砂
10　淡灰色極細砂混じり細砂～粗砂
11　黄灰色小礫混じり細砂
12　淡灰色砂礫　　13　淡灰色砂礫
14　淡灰色細砂～中砂
15　淡黒灰色シルト　　16　黒色シルト混じり極細砂
17　淡乳色極細砂（淘汰良し・基盤層）

土壌サンプル採取層位

図111　花粉分析・珪藻分析試料採取地点の層位

（2）深江北町遺跡第９次調査　出土した木製品の樹種同定

松葉礼子（株式会社パレオ･ラボ）

Ⅰ．はじめに

神戸市東灘区深江北町１丁目にある深江北町遺跡第９次調査で出土した木製品・自然木の樹種を同定した。遺跡は現在の海岸線から１km程度の位置にある標高２～６mの砂堆上にある。第９次調査では中世および飛鳥～平安時代の遺物が出土しており、今回樹種を調べた木製品はこれらに伴って出土しているため、平安時代後期および奈良～平安時代、弥生時代後期～古墳時代前期のおおむね３時期の遺物である。同定対象試料の中心を占めるのは奈良～平安時代である。深江北町遺跡では島地・林，1988aが奈良時代後半～平安時代初頭の水田址から出土した木製品について樹種同定を行っており、ヒノキの木製品が多い結果が出ている（表27）。本庄町遺跡でも松葉，1997が古代の65点の製品に対して樹種同定をしており、ヒノキ、モミ属、アカマツなど針葉樹が多い結果が得られている。

表27　深江北町遺跡第１次調査の樹種同定結果

製品名	樹　種	点数
田下駄	ヒノキ	3
槽	ヒノキ　or　スギ	1
槌ノ子	ヒノキ	2
斎串	ヒノキ	4
曲物底板	ヒノキ	1

今まで行われてきた神戸市周辺の樹種同定結果では弥生時代前期の大開遺跡第５次調査（兵庫区大開通）、弥生時代後期の井戸田遺跡（東灘区本山中町）、古墳時代後期初頭の松野遺跡（長田区日吉町）、古代の本庄町遺跡第５次調査（東灘区深江北町）、平安時代～鎌倉時代の対中遺跡（兵庫県三田市）の結果から以下のような傾向がわかっている（島地，1988b 松葉，1997）。弥生時代前期まではアカガシ亜属やシイ属等の広葉樹とイヌガヤなどが利用樹種の中心であったが、弥生時代後期前後からヒノキ属など針葉樹の割合が高くなり、古墳時代ではヒノキ属などの針葉樹が利用木材の中心に移行する。その後古代では道具類を除きモミ属やヒノキといった針葉樹が製品の大部分を占め、特にヒノキの割合が高くなる傾向がある。そのため古代には既にヒノキを中心とした製品が利用されていたことがわかっているが、どの程度ヒノキを利用していたのかなど具体的な割合などは捉えられていなかった。今回は削りくずのような加工片や割材などの製品が分析対象に多く含められており、この遺跡で加工されていた木材を明らかにすることが期待できる。

Ⅱ．試料と方法

同定した試料は合計464点であった。内訳は弥生時代後期～古墳時代前期14点、奈良時代～平安時代441点、平安時代後期７点、時期不明が２点となっている。遺物は加工材、加工片が最も多く、割材、板、杭、柱などが多いが、曲物、人形、木簡、斎串といった小型の木製品もある。

同定には、これらの木製品から直接片刃剃刀を用いて、木材組織切片を横断面、接線断面、放射断面の３方向作成した。これらの切片はガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定はこれらの標本を光学顕微鏡下で観察し、現生標本との比較して行った。主要な分類群を代表する標本については写真図版に示し、同定根拠は後述する。なお、同定に用いた標本は神戸市埋蔵文化財センターに保管されている。

１．モミ属 *Abies* Pinaceae 挿図写真３－1a～1c：　223

放射方向・軸方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材の移行は緩やかで、成長輪界は明瞭。晩材部の量は多い。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。その軸方向壁には単穿孔が多く数珠状を

呈す。分野壁孔はきわめて小型で、1分野に1～4個程度ある。

2．アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. Pinaceae 挿図写真３－2a～2c： 14

放射方向･軸方向両細胞間道をともに持つ針葉樹材。細胞間道の周囲にはエピセリウム細胞がある。早材から晩材への移行はやや急で、成長輪界は明瞭である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管と放射細胞間道からなり、単列と紡錘形がある。放射仮道管は放射組織の上下端に位置し、その放射方向壁には鋭角な鋸歯状の肥厚が著しい。分野壁孔は大型の窓状で、1分野に1ないし2個ある。放射仮道管の肥厚の程度が確認できなかった試料はクロマツとの区別がつかないためにマツ属復維管束亜属と同定した。

3．ツガ属 *Tsuga* Pinaceae 挿図写真３－3a～3c： 218

軸方向・放射方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、晩材部の量が多い。成長輪界は明瞭である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管からなり単列。放射組織の上下端に放射仮道管を持つ。放射柔組織の放射方向壁は単穿孔が著しく数珠状を呈す。分野壁孔はごく小型のトウヒ型で1分野に1～4個ある。

4．スギ *Cryptomerica japonica* (L.fil.) D.Don Taxodiaceae 挿図写真４－4a～4c： 238

放射方向・軸方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で細胞が比較的大きい。成長輪界は明瞭で晩材部の量は多い。樹脂細胞は早材部から晩材部にかけて接線方向に散在する。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。分野壁孔は大型のスギ型で通常1分野あたり1～2個ある。

5．コウヤマキ *Sciadopopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc. Sciadopityaceae

挿図写真４－5a～5c： W7213

放射方向・軸方向量細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は緩やかで、晩材部の量はやや少なく、成長輪界は明瞭である。放射組織は放射柔細胞からなり単列。分野壁孔は大型の窓状で通常1分野あたり1ないし2個ある。

6．ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. Cupressaceae 挿図写真４－6a～6c： 217

放射方向・軸方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、成長輪界は明瞭。晩材部の量は少ない。樹脂細胞が早材部と晩材部の境に接線状に散在しており、その放射方向壁は結節状に肥厚している。放射組織は放射柔組織のみからなり単列。分野壁孔は中型のトウヒ～ヒノキ型で1分野に1～3個ある。今回の試料では分野壁孔が観察しにくいものが多くヒノキ属、ヒノキ科などに同定された試料も多い。また、放射組織に黄色の油状の物質がつまっている試料がしばしば観察された。

7．アスナロ *Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. Cupressaceae 挿図写真５－7a～7c： W7244

放射方向・軸方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、成長輪界は明瞭。晩材部の量は少ない。樹脂細胞が散在しており、その放射方向壁は結節状に肥厚している。放射組織は放射柔組織のみからなり単列。内部に樹脂状の物質がつまることが多い。分野壁孔は小型のトウヒ～ヒノキ型で１分野に１～５個程度ある。

8． マキ属 *Podocarpus* Podocarpaceae 挿図写真５－8a～8c: W7199

放射方向・軸方向両細胞間道を持たない針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、成長輪界はやや不明瞭。晩材部の量は少ない。樹脂細胞は成長輪界全体に散在している。放射組織は放射柔細胞からなり単列である。分野壁孔は中型のヒノキ型で１分野に２個前後ある。イヌガヤに近似しているが仮道管内壁に螺旋細胞はない。

9．カヤ *Torreya nucifera*(L.)Sieb.etZucc. Taxaceae 挿図写真５－9a～9c： 716

放射方向・軸方向両細胞間道を持たない針葉樹材。樹脂細胞もない。成長輪界は明瞭である。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。分野壁孔は小型のヒノキ～トウヒ型。仮道管内壁に顕著な対列状の螺旋肥厚がある。

10．ヤマモモ *Myrica rubra* Sieb. et Zucc. Myricaceae 挿図写真６－10a～10c： 329

小型で薄壁の道管が単独ないし2～3個複合して散在する散孔材。道管径は成長輪内であまり変化しない。道管は階段数が10以下でまばらな階段状穿孔板を持つ。木部柔組織は独立散在もしくは短接線状。放射組織は1～3列程度で平伏細胞と1～2細胞高の直立細胞の縁辺部から構成されている。

11．ヤナギ属 *Salix* Salicaceae 挿図写真６－11a～11c： 615

やや小型で丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合して密に散在する散孔材。道管の直径は成長輪界に向け徐々に減少する。道管は単穿孔板を持つ。放射組織は単列の異性。道管放射組織間壁孔は壁孔縁が狭く密であるため蜂の巣状を呈す。

12．クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* Betulaceae 挿図写真６－12a～12c： W7214

小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に数個複合し、全体として放射方向の帯状に配列する放射孔材。道管径は成長輪内であまり変化しない。道管は単穿孔板を持ち、内壁に明瞭でないが螺旋肥厚をもつ。放射組織は2階級あり、2～3列の平伏細胞と集合放射組織がある。

13．クリ *Castanea creneta* Sieb. et Zucc. Fagaceae 挿図写真７－13a～13c： 331

成長輪の始めに大型の丸い道管が1～2列並ぶ環孔材。晩材部では徐々に径を減じた薄壁の角張った道管が火炎状に配列する。道管は単穿孔板を持つ。木部柔組織は晩材部で接線状から短接線状。放射組織は単列で平伏細胞のみからなる。道管放射組織間壁孔は対列状。

14．シイ属 *Castanopsis* Fagaceae 挿図写真７－14a～14c： 33

成長輪の始めに大型で丸い道管が単独で間隔を置いて1列に並ぶ環孔材。晩材部では徐々に径を減じた薄壁の角張った道管が火炎状に配列している。道管は単穿孔板を持つ。木部柔組織は接線状から短接線状。放射組織は単列で平伏細胞のみから構成されている。

15．コナラ属コナラ節 *Quercus* Sect. Prinus Fagaceae 挿図写真７－15a～15c： W7293

成長輪の始めに大型で丸い道管が1列に並ぶ環孔材。晩材部では急激に径を減じた多角で薄壁の道管が火炎状に散在する。放射組織はすべて平伏細胞であるが、大きさは明らかに2階級あり単列と10列前後に達する大型のものから構成される。道管放射組織間壁孔は楕円形の対列状～柵状。軸方向柔組織は晩材部で3細胞幅以下の帯状に分布する。

16．アカガシ亜属 *Quercus* Subgen. Cyclobalanopsis Fagaceae 挿図写真８－16a～16c： 45

中型で厚壁の丸い道管が単独で放射方向に配列する放射孔材。道管径は晩材部にむかって減少する。道管は単穿孔板をもつ。放射組織の大きさは明らかに2階級あり単列と8細胞幅前後に達する大型のものがあるが、いずれも平伏細胞のみで構成されている。道管放射組織間壁孔は柵状。軸方向柔組織は晩材部で3細胞幅以下の帯状に分布する。

17．クスノキ科 Lauraceae 挿図写真８－17a～17c： 105

中型で丸い道管がほぼ単独で散在する散孔材。道管は横棒のまばらな階段状穿孔板を持つ。放射組織は、2～3列で平伏細胞と1細胞高の直立細胞からなる縁辺部をもつ。木部柔組織に油細胞を持つが、本標本では確認できなかった。クスノキ科のうち、クスノキは材の特徴より区別することができるため、ここには含まれていない。

18. ヤブツバキ *Camellia japonica* L.；*Thea hozanensis* Hayata；T.Nakaii Hayata Theaceae
挿図写真８－18a～18c： 143

小型で角張った道管が単独または2～3個複合して成長輪界に向かって径を減じながら散在する散孔材。道管は階段状穿孔板を持つ。木部柔組織は散在状である。放射組織は2～3列で平伏・方形・直立細胞から構成されている。単列部分の直立・方形細胞にしばしば大型の結晶細胞がある。

19. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. Theaceae 挿図写真９－19a～19c： 330

小型で多角の道管が単独もしくは複合して均一に散在する散孔材。道管は横棒の多い階段状穿孔板をもつ。木部柔組織は成長輪内に散在する。放射組織は単列もしくは2列で、平伏細胞と方形細胞、直立細胞から構成されている。道管と木部柔組織間の壁孔は対列状～階段状である。

20. ヒサカキ *Eurya* emarginata Thunb. Theaceae 挿図写真９－20a～20c： 323

小型で角張った道管が単独もしくは複合して均一に散在する散孔材。道管は横棒の多い階段状穿孔板を持つ。木部柔組織は成長輪内に散在する。放射組織はほぼ2列で多列部は平伏細胞で単列部は方形細胞、直立細胞から構成されている。

21. ユズリハ属 *Daphniphyllum* Daphniphyllaceae 挿図写真９－21a～21c： W7206

小型で角張った道管が均一に散在する散孔材。成長輪界は目立たない。道管の直径は成長輪内でほぼ変化しない。道管は横棒の多い階段状穿孔板を持つ。木部柔組織は成長輪内に散在する。放射組織は単列もしくは2列で平伏細胞、方形細胞と直立細胞から構成される。

22. ヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq. Anacardiaceae 挿図写真10－22a～22c： W7187

中型で丸い道管が数列成長輪のはじめに並び、徐々に径を減じた道管が単独もしくは数個複合して散在する環孔材。道管は単穿孔板を持ち、内壁には微細な螺旋肥厚がある。木部柔組織は周囲状。放射組織は1～2列幅程度で平伏細胞でのみで構成され、外形はいびつである。道管放射組織間壁孔は大型で丸い。

23. ケンポナシ属 *Hovenia* Rhamnaceae 挿図写真10－23a～23c： 563

成長輪界に中～大型の道管が並び、晩材部では厚壁の道管が単独もしくは2～数個放射方向に複合して散在する散孔材。道管は単穿孔板を持つ。木部柔組織は周囲状～連合翼状。放射組織は平伏細胞と方形細胞と直立細胞からなり、1～4列前後で全体の外形は滑らかである。

24. ハリギリ *Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai Araliaceae 挿図写真10－24a～24c： 324

大型で丸い道管が成長輪に沿って一列に並び、小型で薄壁の道管が斜め接線状～接線状に配列する環孔材。道管は単穿孔板を持つ。放射組織は1～6列で多列部の平伏細胞と1細胞高の方形細胞からなる縁辺部から構成される。道管放射組織間壁孔は大型の円形である。

25. シャシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. Ericaceae 挿図写真11－25a～25c: W7209

小型で角張った道管が散在する散孔材。道管の直径は成長輪内で徐々に減じる。道管は内壁に螺旋肥厚を持ち、階段状穿孔板と短穿孔板を持つ。放射組織には明らかに２階級あり、直立細胞からなる単列のものと方形細胞が中心の６列前後で大型のものから構成される。

26. タイミンタチバナ *Myrsine seguinii* Lev. Myrsinaceae 挿図写真11－26a～26c: 325

小型の丸い道管が放射方向に複合して散在する散孔材。道管の直径は成長輪内で変化せず、成長輪界は不明瞭である。放射組織は２階級あり、直立細胞からなる単列と平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる６列前後の大型のものから構成されている。

27．トネリコ属　　*Fraxinus* Oleaceae　　挿図写真11－27a～27c:　37

大型の道管が成長輪の始めに並ぶ環孔材で、晩材部では厚壁の小型の道管が単独あるいは放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔板を持つ。軸方向柔組織は周囲状あるいは連合翼状分布する。放射組織は２列前後で平伏細胞のみで構成される。

28．散孔材　　Diffuse　Porus　Wood　　挿図写真12－28a～28c:　W7198

角張った小型の道管が成長輪内に散在する散孔材。道管は階段状穿孔板を持つ。木部柔組織は散在上である。放射組織は直立細胞からなる単列のものと４列程度の多列部が平伏細胞からなる大型のものから構成されているが、大型の放射組織の頻度は低い。これらの特徴が観察できたが、同定には至らなかった。

Ⅲ．結果

同定した結果、針葉樹８種類、20種類が確認された。全体の傾向では、ヒノキとヒノキ属が最も多く、全体の60％以上を占めており、次にアカマツ、スギといった針葉樹が全体の９割を超えている結果となった(表28)。広葉樹は暖温帯に生育する落葉広葉樹と常緑広葉樹が確認されている。464点中441点を占めている奈良時代～平安時代を中心にこれらの結果を同定することにした。

表28　深江北町遺跡第９次調査出土木材の時期別集計

樹　種	弥生後～古墳前	奈良～平安	平安後期	時期不明	総計
モミ属		13			13
アカマツ	8	22			30
マツ属複維管束亜属		13			13
ツガ属		15			15
スギ	1	23			24
コウヤマキ	1	7			8
ヒノキ		224	4	2	230
ヒノキ属	2	63	2		67
アスナロ		5			5
ヒノキ科		10			10
マキ属		2			2
カヤ		1			1
針葉樹		7			7
ヤマモモ		2			2
ヤナギ属			1		1
クマシデ属イヌシデ節		1			1
クリ		3			3
シイ属		2			2
コナラ属コナラ節	1	1			2
アカガシ亜属	1	11			12
クスノキ科		1			1
ヤブツバキ		4			4
サカキ		2			2
ヒサカキ		1			1
ユズリハ属		1			1
ヤマウルシ		1			1
ケンポナシ属		1			1
ハリギリ		1			1
シャシャンボ		1			1
タイミンタチバナ		1			1
トネリコ属		1			1
散孔材		1			1
総　計	14	441	7	2	464

奈良～平安時代(「平安時代」含む)で最も多く同定されたのは加工材／加工片で、次に割材／割角材、板材などが続いている。これらの製品でも全体の傾向と同じく、ヒノキ(ヒノキ属)の製品が最も多い結果である。さらに加工材では2点しか広葉樹が確認されておらず、広葉樹の利用が少ない。加工材や加工片は鋭利な刃物ではつり取られた形状をした試料も多く、「ちょうな」などの加工片も含まれていると考えられるが、この場所で加工された多くの木材は針葉樹で、さらにヒノキがその中でも最も多いことが分かる。割材／割角材などでもヒノキが多く、板材でも同様である。ヒノキ以外では杭にはアカマツ(マツ属複維管束亜属)・アカガシ亜属が多いこと、板材のツガ属、柱のクリが利用されていることが特徴として挙げられる。樹種以外の特徴としては、割材／割角材のなかに片(両)端が炭化しているものがある(備考に「炭化」と記載している)。付け木などの用途も考えられるが、これらの樹種は47点中ヒノキ

表29　奈良～平安時代の製品別集計（大型の製品・加工材中心）

樹　種	礎盤	柱	板材	丸杭	割杭	部材	角材	割材／割角材	丸材	加工材加工片
モミ属			1	2			1	1	1	5
アカマツ				12				2	1	6
マツ属複維管束亜属		1		8					2	2
ツガ属			9				2			2
スギ			4				6	1		3
コウヤマキ	1	1		1			2		1	1
ヒノキ	9	3	33	6	1	1	9	58	1	72
ヒノキ属	1	6	11			1	4	13		12
ヒノキ科		2	1				1	1	1	4
アスナロ							1	3		1
マキ属		1		1						
カヤ									1	
針葉樹			1		1			4		
ヤマモモ				1						
クマシデ属イヌシデ節		1								
クリ		3								
シイ属				2						
コナラ属コナラ節				1						
アカガシ亜属	1		1	4					1	
クスノキ科			1							
ヤブツバキ				1						
サカキ				2						
ヒサカキ								1		
ユズリハ属				1						
ヤマウルシ				1						
ケンポナシ属										1
ハリギリ				1						
シャシャンボ		1								
タイミンタチバナ				1						
トネリコ属										1
散孔材				1						
総　計	12	19	62	46	2	2	26	84	9	110

表30　奈良～平安時代の製品別集計（小型の製品中心）

樹　種	木簡	斎串	人形	鳥形？	曲物	桶底板	木皿	箸	丸柄	角柄	柄	箆	木錘	下駄	その他木製品
モミ属										1			1		
アカマツ															1
ツガ属	1										1				
スギ	1		2							2	3				1
ヒノキ	1	1		1	3		1	1	4	3	7	2		1	6
ヒノキ属			1		3	1	2		1	1	3	1			2
針葉樹			1												
ヤマモモ															1
ヤブツバキ									2	1					
アカガシ亜属			1						2						1
総計	3	1	5	1	6	1	3	1	9	8	14	3	1	1	12

(ヒノキ属)が37点、アカマツ５点、アスナロ３点、ツガ属１点で、樹種に顕著な違いは見出せなかった。

次に、奈良～平安時代の小型の木製品であるが(表30)、これらの結果でもヒノキが多い結果が得られており、広葉樹の利用は丸柄、角柄、人形以外にはない。下駄や木皿は他の地域では広葉樹も利用される製品であるが、針葉樹が利用されている。

この結果から今までの結果と同様、奈良～平安時代にはヒノキを中心とした針葉樹材を利用していたことが分かる。加工片などでも広葉樹が極端に少ないことから、板材などに広葉樹を加工すること自体少なかったと類推できる。ヒノキ(ヒノキ属とあわせて)は加工片で76％を占めており、他の針葉樹があるにもかかわらず、ヒノキだけが高い割合を示している。

奈良～平安時代以外の結果は、弥生時代後期～古墳時代前期の結果と平安後期の結果がある(表31)。弥生時代後期～古墳時代前期初頭では自然木にアカマツが多い。中世では奈良～平安時代同様丸材のヤナギ属を除いてすべてヒノキもしくはヒノキ属で、古代と同様の結果が得られている。

表31　弥生後期～古墳前期・平安時代後期の結果

時期	W No.	種　類	樹　種
弥生後期～古墳後期	7263	割材	アカマツ
	7266	板材	スギ
	7267	割材	アカガシ亜属
	7274	丸杭	アカマツ
	7275	割板材	ヒノキ属
	7276	割板材	ヒノキ属
	7277	有孔板材	コナラ属コナラ節
	サンプルのみ	自然木Ａ	アカマツ
	サンプルのみ	自然木Ｂ	アカマツ
	サンプルのみ	自然木Ｃ	アカマツ
	サンプルのみ	自然木Ｄ	コウヤマキ
	サンプルのみ	自然木Ｅ	アカマツ
	サンプルのみ	自然木Ｆ	アカマツ
	サンプルのみ	自然木Ｇ	アカマツ
平安時代後期	6840	板材	ヒノキ
	6841	板材	ヒノキ
	6842	板材	ヒノキ
	6857	丸材	ヤナギ属
	6870	曲物　（上側）	ヒノキ属
	6927	曲物側板	ヒノキ属
	6928	曲物帯板	ヒノキ

Ⅳ．考察

奈良～平安時代ではヒノキが利用木材の中心で、６割以上がヒノキ製品で占められていることが分かった。加工片に至っては７割を超えており、本遺跡で加工していたと考えられる木材はヒノキが中心であると思われる。本庄町遺跡で行われた古代の樹種同定結果と比較しても、本遺跡のヒノキの割合は高く(本庄町遺跡では65点中12点)、さらに加工材の９割以上を針葉樹が占めている。本庄町遺跡では割材や丸材などでは針葉樹以外にもばらついていたが、本遺跡ではこれらの加工材や未製品ですらもヒノキを中心とした針葉樹材が利用されている。本庄町遺跡よりもさらに意図的にヒノキや針葉樹を選択していると考えられる。

針葉樹が優占する遺跡は縄文時代からあるが、その樹種や割合は地域の植生や加工技術の変化が背景にあり、地域毎に異なっている。ヒノキは特に近畿地方などを中心に優占する多くの事例がある。いままでの結果からも神戸市内の古代ではヒノキを利用していることが分かっていた。しかし、都城など一方的に消費される遺跡以外では杭や挽物、下駄などの製品に広葉樹が利用されることが多く、針葉樹もモミ属やアカマツなどの樹種が混じる本庄町遺跡のような結果が一般的である。島地・林，1988aでもヒノキばかりが確認されている。そのため、深江北町遺跡の範囲内で何らかのヒノキを積極的に選択した理由があると考えられるが、それは樹種同定結果のみでは分からない問題である。

引用文献

島地　謙・林　昭三．1988a．深江北町遺跡出土の木器の樹種．深江北町遺跡，兵庫県教育委員会．
島地　謙・林　昭三．1988b．対中遺跡出土木器の樹種．対中，兵庫県教育委員会．
島地 謙・伊東 隆夫・林 昭三・鈴木 三男・光谷 拓実・布谷 知夫・能城 修一 ．1988．日本の遺跡出土木製品総覧，296pp，雄山閣．東京．
松葉礼子．1999．大開遺跡第7次調査出土木製品等の樹種同定分析．平成8年度神戸市埋蔵文化財年報．神戸市教育委員会．
松葉礼子．1997．本庄町遺跡5次の自然科学的検討
松葉礼子．1997．井戸田遺跡2次調査出土木材の樹種同定
松葉礼子．2001．松野遺跡出土木製品(古墳時代後期初頭～鎌倉時代)の樹種同定．松野遺跡発掘調査報告書　第３～７次調査．神戸市教育委員会．

表32-1　深江北町遺跡第9次調査出土木製品の樹種同定結果

遺物No.	出土地区	遺構・層位	種類	時期	樹種	備考	W-No.
12	5区 断割トレ	落ち込み内③	有孔板材	弥生末～古墳初	コナラ属コナラ節		7277
13	5区 断割トレ	淡灰黒色シルト	板材	弥生末～古墳初	スギ		7266
14	5区	黒灰色シルト	割材	弥生末～古墳初	アカマツ		7263
15	5区 断割トレ	落ち込み内②	割板材	弥生末～古墳初	ヒノキ属		7276
16	5区 断割トレ	落ち込み内①	割板材	弥生末～古墳初	ヒノキ属		7275
17	5区 断割トレ	淡灰黒色シルト	割材	弥生末～古墳初	アカガシ亜属		7267
18	5区	淡黒灰色細砂	丸杭	弥生末～古墳初	アカマツ		7274
	5区	断割トレ	自然木A	弥生末～古墳初	アカマツ		サンプル
	5区	断割トレ	自然木B	弥生末～古墳初	アカマツ		サンプル
	5区	断割トレ	自然木C	弥生末～古墳初	アカマツ		サンプル
	5区	断割トレ	自然木D	弥生末～古墳初	コウヤマキ		サンプル
	5区	断割トレ	自然木E	弥生末～古墳初	アカマツ		サンプル
	5区	断割トレ	自然木F	弥生末～古墳初	アカマツ		サンプル
	5区	断割トレ	自然木G	弥生末～古墳初	アカマツ		サンプル
30	5区	SB01－P1柱痕	柱材	奈良時代前半	クリ		7278
31	5区	SB01－P2柱痕	柱材	奈良時代前半	クリ		7280
32	4区	SB01－P5 柱痕	柱材	奈良時代前半	ヒノキ属		7241
33	4区	SB01－P9	柱材	奈良時代前半	クリ		7262
34	5区 東部	SB01－P14	板材	奈良時代前半	ヒノキ		7211
35	4区	SB01－P8	板材	奈良時代前半	ヒノキ		7264
36	4区	SB01－P4	箆状木製品	奈良時代前半	ヒノキ属	斎串状	7265
37	5区 東	SB01－P7	加工片	奈良時代前半	トネリコ属		7269
38	5区 東	SB01－P7	加工片	奈良時代前半	ヒノキ		7270
39	5区 東	SB01－P7	加工片	奈良時代前半	ヒノキ		7271
42	4区	SB02－P4柱痕	柱材	奈良時代前半	ヒノキ属		7242
43	5区	SB02－P7	柱材?	奈良時代前半	ヒノキ科		7272
44	5区	SB02－P7	丸杭	奈良時代前半	アカガシ亜属		7273
45	4区	SB02－P9	柱材	奈良時代前半	ヒノキ属		7291
47	4区	SB03－P1	柱材	奈良時代後半	マキ属		7288
48	5区	SB03－P4柱痕	柱材	奈良時代後半	ヒノキ属	面取あり	7286
49	4区	SB03－P6	柱材	奈良時代後半	ヒノキ		7212
50	4区	SB03－P7	柱材	奈良時代後半	ヒノキ		7234
51	4区	SB03－P5－③層	加工片	奈良時代後半	ヒノキ		7281
52	4区	SB03－P5－③層	加工片	奈良時代後半	ヒノキ科		7282
53	4区	SB03－P5－③層	加工片	奈良時代後半	ヒノキ		7289
55	5区 東部	SB04－P1	柱材	奈良時代後半	ヒノキ		7285
56	5区 東部	SB04－P2	礎盤	奈良時代後半	ヒノキ		7215
57	5区 東部	SB04－P2	礎板	奈良時代後半	ヒノキ		7216
58	5区 東部	SB04－P2	加工片	奈良時代後半	ヒノキ		7217
59	5区 東部	SB04－P2	加工片	奈良時代後半	ヒノキ		7218
60	5区 東部	SB04－P2	加工片	奈良時代後半	ヒノキ		7220
61	5区 東部	SB04－P2	加工片	奈良時代後半	ヒノキ		7219
62	5区 東部	SB04－P2	丸材	奈良時代後半	モミ属		7181
63	4区	SB05－P1	礎盤?	奈良時代後半	ヒノキ	2面以上炭化	7279
	4区	SB05－P2	割材	奈良時代後半	ヒノキ属		略 7201
	4区	SB06 -P4	柱材	奈良時代後半	ヒノキ属		7069
	4区	SB06 -P4	柱材?	奈良時代後半	×		7070

表32-2　深江北町遺跡第9次調査出土木製品の樹種同定結果

遺物No.	出土地区	遺構・層位	種類	時期	樹種	備考	W-No.
73	4区 東部	SP44	柱材	奈良～平安	ヒノキ属		7287
74	4区	SP48柱痕	柱材	奈良～平安	マツ属複維管束亜属		7193
76	5区	SP88②層	礎盤	奈良～平安	ヒノキ		7245
77	5区	SP88②層	礎盤	奈良～平安	ヒノキ属		7246
78	5区	SP88②層	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7247
79	5区	SP88②層	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7248
80	5区	SP88②層	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7249
81	5区	SP88②層	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7250
82	5区	SP88②層	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7251
83	5区	SP88②層	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7252
84	5区	SP88②層	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7253
85	5区	SP88②層	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7254
86	5区 東部	SP88埋土	加工片	奈良～平安	モミ属		7221
87	5区 東部	SP88埋土	礎盤	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7222
88	5区 東部	SP88埋土	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7223
89	5区 東部	SP 123埋土	礎盤?	奈良～平安	ヒノキ	板状	7238
90	5区 東部	SP 124柱痕	礎盤	奈良～平安	ヒノキ		7235
91	5区 東部	SP 124柱痕	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7236
92	5区 東部	SP 124柱痕	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7237
93	5区 東部	SP 124掘形	礎板	奈良～平安	ヒノキ		7227
94	5区 東部	SP 124掘形	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7228
95	5区 東部	SP 124掘形	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7229
96	5区 東部	SP 124掘形	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7230
97	5区 東部	SP 124掘形	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7231
98	5区 東部	SP 124掘形	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7232
99	5区 東部	SP 124掘形	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7233
101	5区 東部	SP 125下層	加工木	奈良時代後半	針葉樹		7224
102	5区 東部	SP 125下層	加工片	奈良時代後半	ヒノキ		7225
105	5区	SP160掘形(⑤層)	柄	奈良時代前半	クスノキ科		7260
106	5区	SP160掘形(⑤層)	角材	奈良時代前半	ヒノキ		7259
107	5区	SP160掘形(⑤層)	加工片	奈良時代前半	ヒノキ		7261
108	5区	SP 160埋土	加工片	奈良時代前半	ヒノキ		7239
109	5区	SP 160掘形	柱材?	奈良時代前半	ヒノキ科		7256
110	5区	SP 162 埋土	板材	奈良～平安	スギ		7268
111	4区	SP 256埋土	加工木	奈良～平安	コウヤマキ		7240
	5区 中央	SP86埋土	割材	奈良～平安	アカマツ	炭化	7174
	5区	SP86埋土	割材	奈良～平安	ヒノキ		7175
	5区 東部	SP 124埋土	割材	奈良～平安	ヒノキ科		7177
	5区 東部	SP 124埋土	加工片	奈良～平安	モミ属		7178
	5区 東部	SP 132埋土	割材	奈良～平安	ヒノキ		7179
	5区 東部	SP 132埋土	割材	奈良～平安	ヒノキ		7180
	5区 東部	SP 151埋土	加工片	奈良～平安	アカマツ	炭化	略7182
	5区	SP 154柱痕内	加工片	奈良～平安	ヒノキ		略7183
	5区	SP 158埋土	割材	奈良～平安	ヒノキ		略7184
	5区	SP 160埋土	加工片	奈良～平安	アカマツ		略7185
	5区	SP 220埋土	割材	奈良～平安	ヒノキ属		略7186
	5区 北西	SP63の南側	丸杭	奈良～平安	ヤマウルシ		7187

表32-3　深江北町遺跡第9次調査出土木製品の樹種同定結果

遺物No.	出土地区	遺構・層位	種類	時期	樹種	備考	W-No.
	5区	SP114	丸杭	奈良～平安	マツ属複維管束亜属		7189
	5区 東部	SP129埋土	板材	奈良～平安	×	樹皮	7226
	4区	SP270埋土	柱根	奈良～平安	コウヤマキ		7290
	5区	SP130-W柱痕	加工片	奈良～平安	ヒノキ属		7243
	5区	SP130-E埋土	加工片	奈良～平安	アスナロ		7244
	5区 北東	SP131埋土	丸材	奈良～平安	アカマツ		7255
	5区	SP275埋土	木	奈良～平安	アカマツ		7258
	5区	SP269	丸杭	奈良～平安	コウヤマキ		7213
	5区 東部	SP139埋土	柱材	奈良～平安	クマシデ属イヌシデ節		7214
	5区	SP163埋土	板材	奈良～平安	ヒノキ		7283
	5区	SP163埋土	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7284
133	5区 北西	SD05-①区	木柄の端?	奈良～平安	ヒノキ		7129
134	5区 北東	SD05-②区	有孔板材	奈良～平安	ヒノキ		7149
142	5区	SD06-②・③区間	柄?	奈良～平安	ヒノキ		7159
143	5区 北西	SD06-③区	丸柄?	奈良～平安	ヤブツバキ		7088
144	5区 北西	SD06-③区	角柄?	奈良～平安	ヒノキ		7118
145	5区 北西	SD06-②区	丸柄	奈良～平安	ヒノキ		7073
146	5区 北西	SD06-③区	丸柄	奈良～平安	ヒノキ		7086
147	5区	SD06-②・③区間	柄	奈良～平安	スギ		7160
148	5区 北西	SD06-②区	角柄	奈良～平安	スギ		7085
149	5区 北西	SD06-②区	角柄	奈良～平安	ヒノキ		7079
150	5区 北西	SD06-④区	抉入り板材	奈良～平安	ヒノキ		7128
151	5区 北西	SD06-④区	曲物底	奈良～平安	ヒノキ属		7126
152	5区 北西	SD06-②区	角材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7115
153	5区 北西	SD06-②区	板材	奈良～平安	ヒノキ		7077
154	5区 北西	SD06-③区	板材	奈良～平安	ツガ属		7090
155	5区 北西	SD06-②区	板材	奈良～平安	ツガ属		7082
156	5区 北西	SD06-③区	丸杭	奈良～平安	ヒノキ		7087
157	5区 北西	SD06-④区	加工片	奈良～平安	マツ属複維管束亜属		7127
158	5区 北西	SD06-②区	割材	奈良～平安	ヒノキ属		7113
159	5区 北西	SD06-②区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7074
160	5区 北西	SD06-⑤区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7098
161	5区 北西	SD06-⑤区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7100
162	5区 北西	SD06-②区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7076
163	5区 北西	SD06-②区	加工片	奈良～平安	アカマツ	炭化	7083
164	5区 北西	SD06-⑤区	加工片	奈良～平安	マツ属複維管束亜属		7099
165	5区 北西	SD06-②区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7075
166	5区 北西	SD06-②区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7116
167	5区 北西	SD06-③区	切断角材	奈良～平安	スギ		7089
168	5区 北西	SD06-③区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7117
169	5区 北西	SD06-②区	斎串?	奈良～平安	ヒノキ		7080
176	5区 北西	SD06-②区	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7084
170	5区 北西	SD06-④区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7096
171	5区 北西	SD06-④区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7095
172	5区 北西	SD06-②区	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7114
173	5区 北西	SD06-③区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7091
174	5区 北西	SD06-④区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7094

表32-4　深江北町遺跡第9次調査出土木製品の樹種同定結果

遺物No.	出土地区	遺構・層位	種類	時期	樹種	備考	W-No.
175	5区 北西	SD06-④区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7092
177	5区 北西	SD06-②区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7078
178	5区 北西	SD06-③区	割材	奈良～平安	アスナロ	炭化	7119
179	5区 北西	SD06-④区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7093
180	5区 北西	SD06-③区	割材	奈良～平安	ヒノキ		7124
181	5区 北西	SD06-③区	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7122
182	5区 北西	SD06-⑤区	加工片	奈良～平安	アカマツ		7101
183	5区 北西	SD06-③区	割材	奈良～平安	ヒノキ属	炭化	7123
184	5区 北西	SD06-②区	加工片	奈良～平安	ヒノキ属	炭化	7081
	5区 北西	SD06-④区	割材	奈良～平安	ヒノキ		7097
	5区 北西	SD06-③区	割材	奈良～平安	ヒノキ属		7120
	5区 北西	SD06-③区	割材	奈良～平安	ヒノキ		7121
	5区 北西	SD06-③区	割材	奈良～平安	ヒノキ		7125
197	5区 北西	SD07-①区	角柄?	奈良～平安	ヤブツバキ		7130
198	5区 西部	SD07-①・②区間	板材	奈良～平安	ヒノキ		7176
199	5区 北西	SD07-②区	丸柄?	奈良～平安	ヒノキ属		7133
200	5区 北西	SD07-②区	角材	奈良～平安	ヒノキ		7131
201	5区 北西	SD07-②区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7132
202	5区	SD07-①区	板杭	奈良～平安	ヒノキ		7163
213	5区 北東	SD08-②区	柄?	奈良～平安	ヒノキ属		7111
214	5区 北東	SD08-②区	有孔柄	奈良～平安	アカガシ亜属		7112
215	5区 北東	SD08-②区	丸柄	奈良～平安	アカガシ亜属		7141
216	5区	SD08-①・②区間	用途不明	奈良～平安	ヒノキ		7164
217	5区 北東	SD08-②区部分	有孔板材	奈良～平安	ヒノキ	板目	7154
218	5区	SD08-①・②区間	加工片	奈良～平安	ツガ属		7166
219	5区 北東	SD08-③区	角柄?	奈良～平安	ヒノキ		7148
220	5区	SD08-①・②区間	板材	奈良～平安	ヒノキ		7165
221	5区	SD08-①区	板材	奈良～平安	ヒノキ		7162
222	5区 北東	SD08-①区	加工片	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7139
223	5区 北東	SD08-②区	板材	奈良～平安	ヒノキ	板目	7110
224	5区 北東	SD08-①区	加工片	奈良～平安	モミ属		7138
225	5区 北東	SD08-①区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7103
226	5区 東部	SD08-②・③区間	割材	奈良～平安	ヒノキ		7167
227	5区 北東	SD08-②区	割材	奈良～平安	モミ属		7142
228	5区 北東	SD08-①区	割角材	奈良～平安	針葉樹	炭化	7137
229	5区 北東	SD08-②区	角材	奈良～平安	スギ		7143
230	5区 東部	SD08-②・③区間	割角材	奈良～平安	ヒノキ		7170
231	5区 東部	SD08-②・③区間	割角材	奈良～平安	ヒノキ		7171
232	5区 北東	SD08-③区	加工片	奈良～平安	ヒノキ属		7147
233	5区 北東	SD08-①区	割材	奈良～平安	ヒノキ		7107
234	5区 北東	SD08-①区	割材	奈良～平安	ヒノキ		7109
235	5区 北東	SD08-①区	割材	奈良～平安	ヒノキ		7108
236	5区 東部	SD08-②・③区間	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7173
237	5区	SD08-①	板材	奈良～平安	ヒノキ		7292
238	5区 北東	SD08-①区	加工片	奈良～平安	スギ		7134
239	5区 東部	SD08-②・③区間	用途不明	奈良～平安	ヒノキ		7169
240	5区 北東	SD08-①区	角材	奈良～平安	ヒノキ属		7140

表32-5　深江北町遺跡第9次調査出土木製品の樹種同定結果

遺物No.	出土地区	遺構・層位	種類	時期	樹種	備考	W-No.
241	5区 北東	SD08-①区	加工片	奈良～平安	スギ		7106
242	5区 北東	SD08-①区	加工片	奈良～平安	スギ		7105
243	5区 北東	SD08-①区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7102
244	5区 東部	SD08-②・③区間	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7172
245	5区 北東	SD08-②区部分	割材	奈良～平安	ヒノキ		7155
246	5区 北東	SD08-③区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7145
247	5区 北東	SD08-①区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7104
248	5区	SD08-①区	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7161
249	5区 北東	SD08-①区	加工片	奈良～平安	コウヤマキ		7135
250	5区 北東	SD08-③区	加工片	奈良～平安	ヒノキ属		7146
251	5区 北東	SD08-③区	割杭	奈良～平安	ヒノキ		7144
252	5区 東部	SD08-②・③区間	丸材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7168
253	5区 北東	SD08-①区	丸杭	奈良～平安	ヒノキ		7136
308	5区 北西	SX07埋土	丸柄	奈良～平安	ヒノキ		7151
309	5区 北西	SX07埋土	丸柄	奈良～平安	アカガシ亜属		7153
310	5区 北西	SX07埋土	丸柄?	奈良～平安	ヤブツバキ		7152
311	5区 北西	SX07埋土	丸杭	奈良～平安	アカマツ	炭化	7150
319	2区	杭①	丸杭	奈良～平安	マツ属複維管束亜属		6965
320	2区	杭②	丸杭	奈良～平安	マツ属複維管束亜属		6966
321	2区	杭③	丸杭	奈良～平安	マツ属複維管束亜属		6967
322	2区	杭④	丸杭	奈良～平安	アカマツ		6968
323	2区	杭⑤	割材	奈良～平安	ヒサカキ		6969
324	2区	杭⑦	丸杭	奈良～平安	ハリギリ		6976
325	2区	杭⑧	丸杭	奈良～平安	タイミンタチバナ		6975
326	2区	杭⑩	丸杭	奈良～平安	ヒノキ		6971
327	2区	杭⑪	割材	奈良～平安	ヒノキ		6972
328	2区	杭⑫	丸杭	奈良～平安	ヒノキ		6974
329	2区	杭⑬	丸杭	奈良～平安	ヤマモモ		6970
330	2区	杭⑭	丸杭	奈良～平安	サカキ		6977
331	2区	杭⑮	丸杭	奈良～平安	シイ属	ほぞ穴有	6973
	2区	杭⑥	サンプル	奈良～平安	ヤマモモ		サンプル
	2区	杭⑨	丸木杭	奈良～平安	ヤブツバキ		サンプル
473	3区 南東	暗灰色シルト	木簡	平安時代前期	ツガ属		6947
474	3区 中央東半	暗灰色シルト質細砂	木簡	奈良～平安	ヒノキ		7297
475	3区 東部	暗灰色シルト	木簡片	奈良～平安	ヒノキ		6883
476	3区 東部	暗灰色シルト	角材	奈良～平安	ヒノキ属		6925
477	3区 南東	暗灰色シルト	柄	奈良～平安	ツガ属		6959
478	3区 南東	暗灰色シルト	有孔柄	奈良～平安	スギ		6957
479	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	柄	奈良～平安	ヒノキ		7294
480	3区 東部	暗灰色シルト	柄	奈良～平安	ヒノキ		6922
481	2区 東部	暗灰色シルト	柄	奈良～平安	ヒノキ属		6900
482	3区 南東	暗灰色シルト	柄	奈良～平安	ヒノキ		6956
483	2区 中央	暗灰色シルト	柄?	奈良～平安	ヒノキ		6905
484	2区 東部	暗灰色シルト質細砂	柄	奈良～平安	スギ		6859
485	3区 東部	灰色中～粗砂	丸柄	奈良～平安	ヒノキ		6943
486	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	箆	奈良～平安	ヒノキ	板目	6861
487	3区 中央	淡灰色砂	木錘	奈良～平安	モミ属		6951

表32-6　深江北町遺跡第9次調査出土木製品の樹種同定結果

遺物No.	出土地区	遺構・層位	種類	時期	樹種	備考	W-No.
488	2区 東部	暗灰色シルト質細砂	下駄	奈良～平安	ヒノキ		6858
489	3区 東部	暗灰色シルト	角柄?	奈良～平安	ヒノキ属	くり込み（三角）	6917
490	3区 南東	暗灰色シルト	木皿	平安時代前期	ヒノキ属	横木	6949
491	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	皿	奈良～平安	ヒノキ		6846
492	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	皿	奈良～平安	ヒノキ	四片・横木	6855
493	3区 南東	淡灰色中～粗砂	曲物底	奈良～平安	ヒノキ		6953
494	3区 南東	暗灰色シルト	曲物底	奈良～平安	ヒノキ属		6955
495	3区 東部	暗灰色シルト質細砂	桶底板	奈良～平安	ヒノキ属	柾目	6864
496	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ	板目	6853
497	3区 南東	暗灰色シルト	板材	平安時代前期	スギ		6950
498	2区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ		6884
499	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	人形（頭）	奈良～平安	アカガシ亜属		6862
500	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	人形（胴）	奈良～平安	スギ	板目	6860
501	3区 東部	暗灰色シルト	人形	奈良～平安	ヒノキ属		6871
502	3区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ		6932
503	3区 東部	暗灰色シルト	丸材	奈良～平安	コウヤマキ		6944
504	3区 東部	淡灰色砂礫	丸材	奈良～平安	マツ属複維管束亜属		6945
505	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	角材	奈良～平安	モミ属		6849
506	3区 東部	乳褐色砂	杭	奈良～平安	アカガシ亜属		6941
507	2区 東部	暗灰色シルト	丸材	奈良～平安	ヒノキ科		6890
508	2区 中央	暗灰色シルト	丸杭	奈良～平安	アカマツ		6903
509	3区 中央	淡灰色砂礫	丸杭	奈良～平安	モミ属		6952
510	3区 西部	暗灰色シルト質細砂	丸杭	奈良～平安	アカマツ		6911
511	3区 南東	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ		6962
512	3区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ属	板目	6926
513	3区 南東	暗灰色シルト	角材	奈良～平安	ツガ属		6961
514	3区 南東	暗灰色シルト	加工片	奈良～平安	ヒノキ属		6964
515	2区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ	柾目	6901
516	3区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	針葉樹		6936
517	2区 東部	暗灰色シルト	板材片	奈良～平安	ヒノキ		6902
518	3区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ	板目	6923
519	3区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ツガ属		6934
520	3区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ツガ属	板目	6878
521	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ		6845
522	2区 中央	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ属		6908
523	3区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ属	柾目	6940
524	3区 中央東半	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ		6867
525	3区 南東	暗灰色シルト	板材	平安時代前期	ツガ属		6948
526	3区 南東	暗灰色シルト	板材	平安時代前期	ヒノキ		7295
527	3区 東部	淡灰色砂礫	板材	奈良～平安	ヒノキ		6946
528	2区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ属	柾目	6916
529	3区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ		6935
530	3区 東部	暗灰色シルト	加工片	奈良～平安	ヒノキ	柾目	6875
531	3区 南東	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ属		6958
532	2区 東部	暗灰色シルト	角材片	奈良～平安	スギ		6915
533	2区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ	柾目	6886
534	3区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ツガ属		6930

表32-7　深江北町遺跡第9次調査出土木製品の樹種同定結果

遺物No.	出土地区	遺構・層位	種類	時期	樹種	備考	W-No.
535	3区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ツガ属	板目	6872
536	2区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ	柾目	6885
537	3区 東部	暗灰色シルト	角材	奈良～平安	ヒノキ		6924
538	3区 東部	暗灰色シルト	角材	奈良～平安	ツガ属		6879
539	3区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ		6931
540	2区 東部	暗灰色シルト	加工片	奈良～平安	ヒノキ		6899
541	3区 東部	暗灰色シルト	角材片	奈良～平安	スギ		6921
542	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	角材	奈良～平安	ヒノキ		6843
543	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	角材	奈良～平安	ヒノキ科		6863
544	3区 中央東半	暗灰色シルト質細砂	角材	奈良～平安	スギ		6866
545	2区 東部	暗灰色シルト	部材	奈良～平安	ヒノキ属		6912
546	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ		6854
547	3区 東部	暗灰色シルト	角材片	奈良～平安	ヒノキ		6920
548	2区 東部	暗灰色シルト	角材片	奈良～平安	ヒノキ属		6914
549	3区 東部	暗灰色シルト	角物	奈良～平安	スギ		6918
550	3区 東部	暗灰色シルト	角材片	奈良～平安	ヒノキ属		6919
551	3区 南東	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ		6954
552	3区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ属	柾目	6929
553	2区 東部	暗灰色シルト	部材	奈良～平安	ヒノキ		6913
554	3区 中央東半	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ属	柾目	6865
555	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	角材	奈良～平安	ヒノキ		6847
556	3区 東部	暗灰色シルト	加工片	奈良～平安	アカマツ		6881
557	3区 南東	暗灰色シルト	角材	奈良～平安	ヒノキ	片方炭化	6963
558	3区 南東	暗灰色シルト	杭	奈良～平安	ヒノキ	片方炭化	6960
559	2区 中央	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	6909
560	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ属	柾目	6848
561	2区 中央	暗灰色シルト	加工片	奈良～平安	ヒノキ		6910
562	2区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	×		6942
563	3区 東部	暗灰色シルト	加工片	奈良～平安	ケンポナシ属		6937
564	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ属	板目	6844
565	2区 中央	暗灰色シルト	加工片	奈良～平安	ヒノキ		6907
566	3区 東部	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ属	板目	6939
567	3区 東部	暗灰色シルト	加工片	奈良～平安	ヒノキ		6880
568	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ属		6851
569	3区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ	片側炭化	6874
570	2区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ	片端炭化	6889
571	3区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	6933
572	3区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ		6876
573	2区 中央	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	6906
574	2区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ	片端炭化	6893
575	2区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ	片端炭化	6897
576	2区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ	片端炭化	6894
577	3区 中央東半	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ		6868
578	2区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ	片端炭化	6896
579	3区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ		6877
580	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	モミ属		6856
581	2区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ	両端炭化	6898

表32-8　深江北町遺跡第9次調査出土木製品の樹種同定結果

遺物No.	出土地区	遺構・層位	種類	時期	樹種	備考	W-No.
582	3区 中央東半	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ属		6869
583	2区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ属	片端炭化	6895
584	2区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ		6892
585	2区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ		6891
586	2区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	針葉樹		6888
587	2区 中央	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	6904
588	2区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ		6887
589	3区 東部	暗灰色シルト	割材	奈良～平安	ヒノキ属	片側炭化	6873
590	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ属		6850
	2区 中央	暗灰色シルト質細砂	角柄	奈良～平安	×		6852
	3区 東部	暗灰色シルト	加工片	奈良～平安	ツガ属		6882
	3区 東部	暗灰色シルト	加工片	奈良～平安	モミ属		6938
599	1区	SB08－P1柱痕内	礎盤?	平安時代後期	ヒノキ		6838
	1区	SB08－P1	柱材?	平安時代後期	×		6839
611	3区 東部	SX02	曲物帯板	平安時代後期	ヒノキ		6928
612	3区 東部	SX02	曲物側板	平安時代後期	ヒノキ属		6927
614	3区 東部	SX02	曲物	平安時代後期	ヒノキ属	板目	6870
615	3区 東部	SX02	丸材	平安時代後期	ヤナギ属	先端加工	6857
616	5区	SX14	曲物 帯板	平安時代後期	ヒノキ		7257
617	5区	SX14	曲物 側板	平安時代後期	ヒノキ属		7257
	2区 中央	暗灰色粗砂混シルト	板材	平安時代後期	ヒノキ		6840
	2区 中央	暗灰色粗砂混シルト	板材	平安時代後期	ヒノキ		6841
	2区 中央	暗灰色粗砂混シルト	板材	平安時代後期	ヒノキ		6842
678	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	木簡	奈良～平安	スギ		7296
679	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	柄	奈良～平安	スギ		6991
680	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	柄	奈良～平安	ヒノキ		6992
681	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	半丸柄	奈良～平安	ヒノキ		7036
682	5区 南半中央	暗灰色細砂	用途不明	奈良～平安	ヒノキ		7067
683	5区 北東	暗灰色シルト質細砂	角柄	奈良～平安	モミ属		7058
684	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	角柄	奈良～平安	スギ		7055
685	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	柄	奈良～平安	ヒノキ属		6984
686	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	箸?	奈良～平安	針葉樹		6995
687	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	箸	奈良～平安	ヒノキ		6986
688	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	木皿	奈良～平安	ヒノキ属		6982
689	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ		7048
690	5区 北東	暗灰色シルト質細砂	曲物底?	奈良～平安	ヒノキ属		7057
691	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	曲物底?	奈良～平安	ヒノキ		7053
692	5区 南西	暗灰色シルト質細砂	人形	奈良～平安	スギ		7059
693	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	人形?	奈良～平安	針葉樹		6985
694	5区 南半中央	暗灰色細砂	刀形	奈良～平安	ヒノキ		7066
695	5区 北東	暗灰色シルト質細砂	斎串?	奈良～平安	ヒノキ		6981
696	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	鳥形?	奈良～平安	ヒノキ		7052
697	5区 北半中央	暗灰色シルト	有孔角材	奈良～平安	ヒノキ属		7156
698	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ属	板目	6983
699	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ	柾目	7041
700	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ	柾目	7007
701	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ	板目	7040

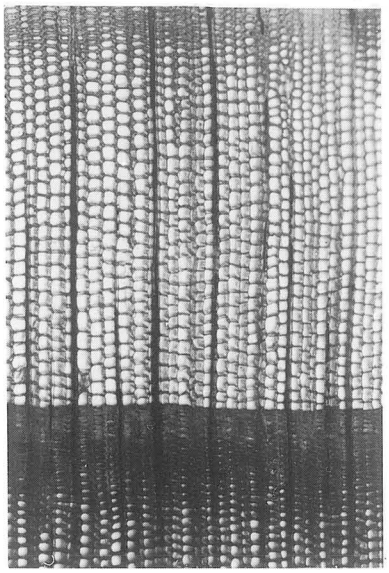
表32-9　深江北町遺跡第9次調査出土木製品の樹種同定結果

遺物No.	出土地区	遺構・層位	種類	時期	樹種	備考	W-No.
702	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ	板目	7006
703	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ		7038
704	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ属	柾目	6989
705	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	切断角材	奈良～平安	コウヤマキ		7011
706	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	切断角材	奈良～平安	コウヤマキ		7012
707	5区 北西	遺構面上面精査中	角材	奈良～平安	アスナロ	炭化	7061
708	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	加工材	奈良～平安	ヒノキ		7046
709	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7037
710	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	篦状	奈良～平安	ヒノキ		7047
711	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ツガ属	板目・炭化	6994
712	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ		7051
713	5区 南西	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ属		7064
714	5区 南西	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7002
715	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ	板目	6990
716	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	丸材	奈良～平安	カヤ		6993
717	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	丸杭	奈良～平安	モミ属		6987
718	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割角材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7009
719	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7031
720	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ属		7033
721	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	丸杭	奈良～平安	マツ属複維管束亜属		7005
722	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	丸杭	奈良～平安	アカマツ		7013
723	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	丸杭	奈良～平安	サカキ		7029
724	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	丸(柄)杭	奈良～平安	アカマツ		7030
	5区 北西	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ		6978
	5区 北西	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ		6979
	5区 北西	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ		6980
	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	針葉樹		6996
	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ	板目	6988
	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	丸材	奈良～平安	アカガシ亜属		6997
	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ツガ属		6998
	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	アカマツ	炭化	6999
	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ属		7000
	5区 西部	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	アカマツ		7001
	5区 北西	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	スギ		7003
	5区 北西	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	スギ		7004
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割角材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7008
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割角材	奈良～平安	ヒノキ属		7010
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ		7014
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ		7015
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7016
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7017
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ		7018
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7019
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ属	炭化	7020
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ属	炭化	7021
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7022
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ属		7023

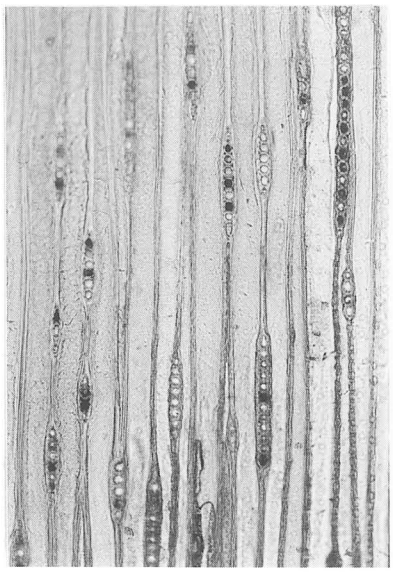
表32-10　深江北町遺跡第9次調査出土木製品の樹種同定結果

遺物No.	出土地区	遺構・層位	種類	時期	樹種	備考	W-No.
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ		7024
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ		7025
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ		7026
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7027
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	×		7028
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ属		7032
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7034
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7035
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ	炭化	7039
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ		7042
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	アスナロ		7043
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ		7044
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	加工材	奈良～平安	ヒノキ科		7045
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	ヒノキ科		7049
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	ヒノキ		7050
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	スギ		7054
	5区 北半中央	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7056
	5区 南西	暗灰色シルト質細砂	割材	奈良～平安	アスナロ	炭化	7060
	5区 南半中央	暗灰色細砂	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7062
	5区 南西	暗灰色シルト質細砂	角材	奈良～平安	ヒノキ		7063
	5区 南半中央	暗灰色細砂	加工材	奈良～平安	ヒノキ科		7065
	5区 南半中央	暗灰色細砂	加工材	奈良～平安	ヒノキ属		7068
	5区 北西	暗灰色シルト質細砂	板材	奈良～平安	アカガシ亜属		7071
	5区 北西	暗灰色シルト質細砂	加工片	奈良～平安	モミ属		7072
	5区 北半中央	暗灰色シルト	板材	奈良～平安	ヒノキ		7157
	5区 北半中央	暗灰色シルト	加工片	奈良～平安	ヒノキ		7158
	5区	SP 105	丸杭	奈良～平安後期	マツ属複維管束亜属		7188
	5区	SP 121	丸杭先	奈良～平安後期	アカマツ		7190
	5区	SP 113	丸杭先	奈良～平安後期	アカガシ亜属		7191
	5区	SP 95	丸杭	奈良～平安後期	アカマツ		7192
	5区	SP 84	丸杭	奈良～平安後期	コナラ属コナラ節		7293
	5区	SP 86埋土	加工片	奈良～平安	ヒノキ科		7194
	5区	SP 107	丸杭先	奈良～平安後期	マツ属複維管束亜属		7195
	5区	SP 106	丸杭	奈良～平安後期	アカガシ亜属		7196
	5区	SP 112	丸杭	奈良～平安後期	アカマツ		7197
	5区	SP 111	丸杭	奈良～平安後期	散孔材		7198
	5区	SP 73	丸杭	奈良～平安後期	マキ属		7199
	5区	SP 72	丸杭	奈良～平安後期	マツ属複維管束亜属		7200
	5区	SP 74	丸杭	奈良～平安後期	シイ属		7202
	5区	SP 81	丸杭	奈良～平安後期	アカマツ		7203
	5区	SP 82	丸杭	奈良～平安後期	アカマツ		7204
	5区	SP 103	丸杭	奈良～平安後期	アカマツ		7205
	5区	SP 79	丸杭	奈良～平安後期	ユズリハ属		7206
	5区	SP 80埋土	丸材	奈良～平安後期	マツ属複維管束亜属		7207
	5区 東部	SP 89中・下層	加工片	奈良～平安	ヒノキ	斎串状	7208
	5区	SP 125埋土	柱材?	奈良～平安	シャシャンボ		7209
	5区	SP 125埋土	礎板	奈良～平安	アカガシ亜属?		7210

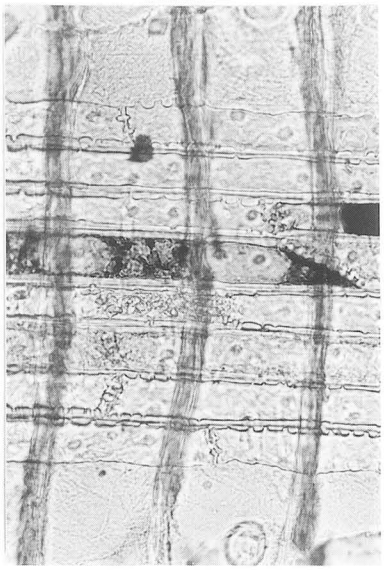
挿図写真3　深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真　Bar:



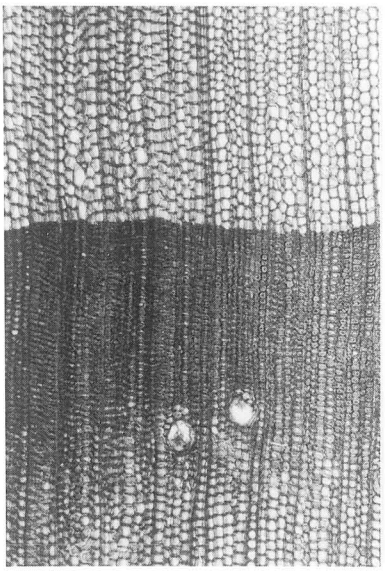
1 a モミ属　bar:1mm　223



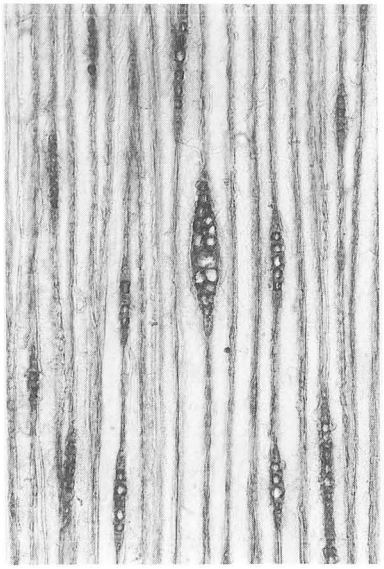
1 b 同　bar:0.4mm



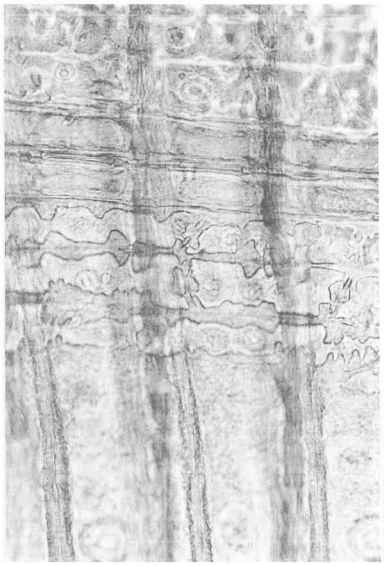
1 c 同　bar:0.1mm



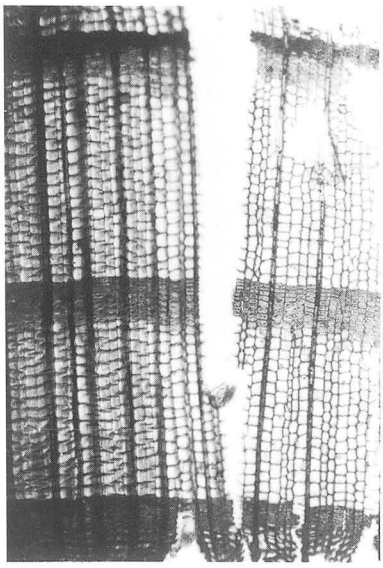
2 a アカマツ　bar:1mm　14



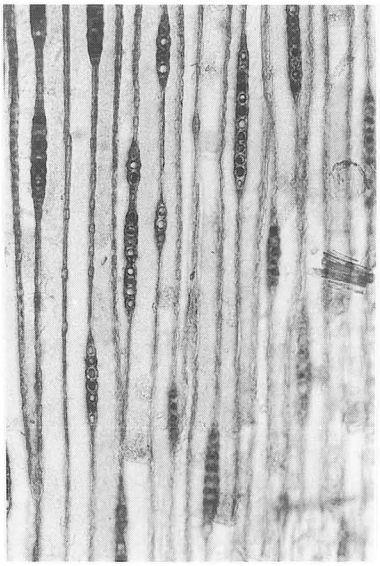
2 b 同　bar:0.4mm



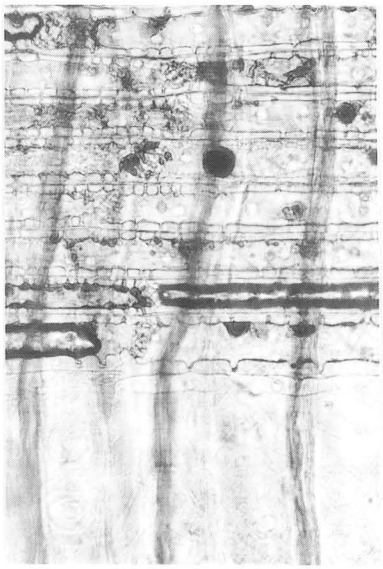
2 c 同　bar:0.1mm



3 a ツガ属　bar:1mm　218

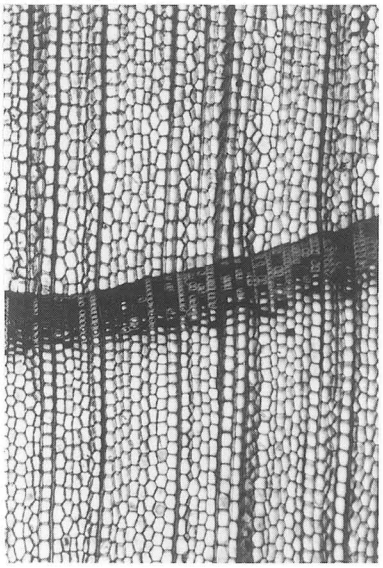


3 b 同　bar:0.4mm

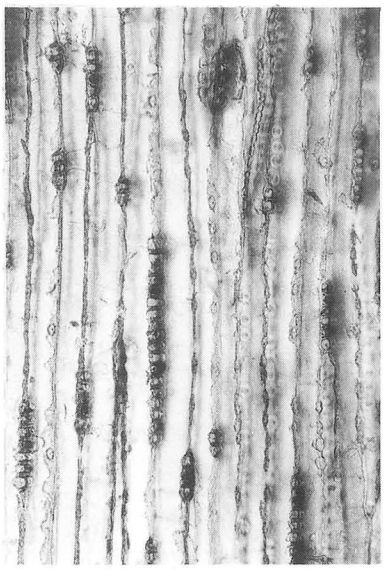


3 c 同　bar:0.1mm

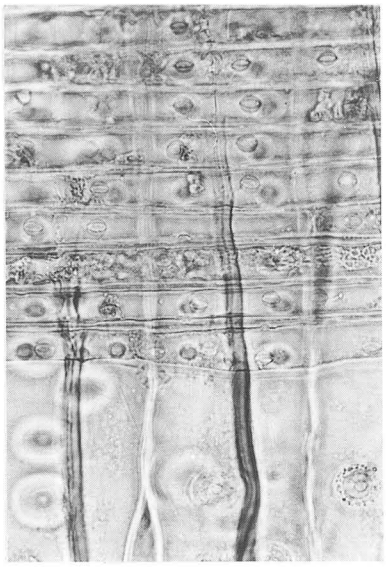
挿図写真 4　　深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真　　Bar:



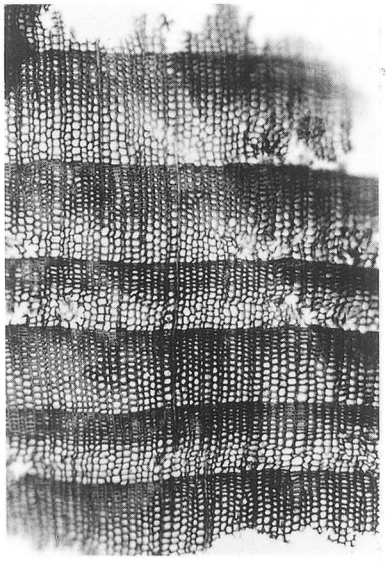
4 a スギ　bar:1mm　238



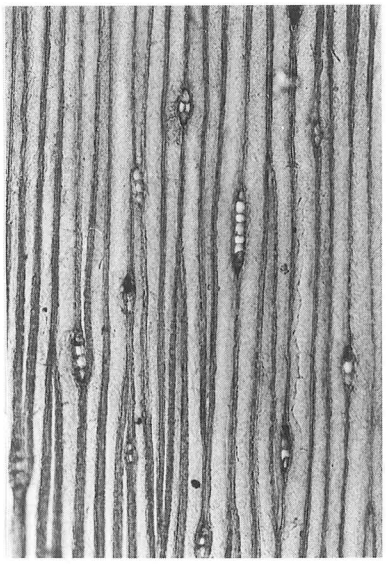
4 b 同　bar:0.4mm



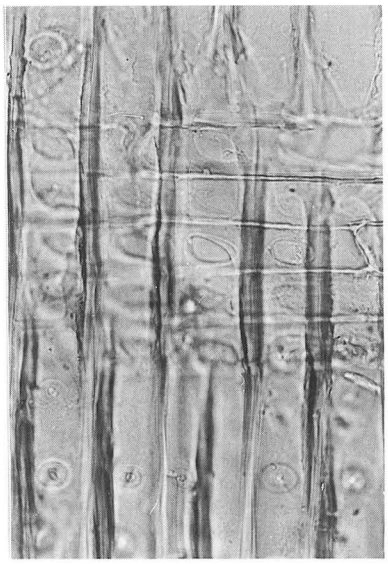
4 c 同　bar:0.1mm



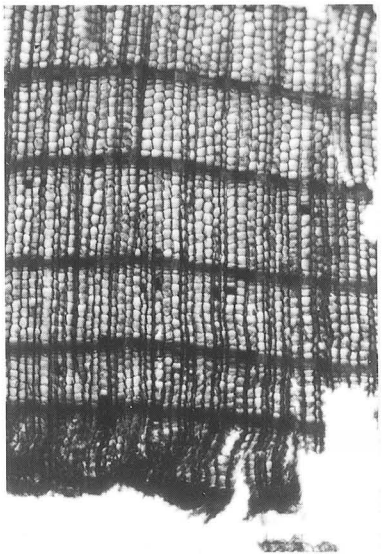
5 a コウヤマキ　bar:1mm　W7213



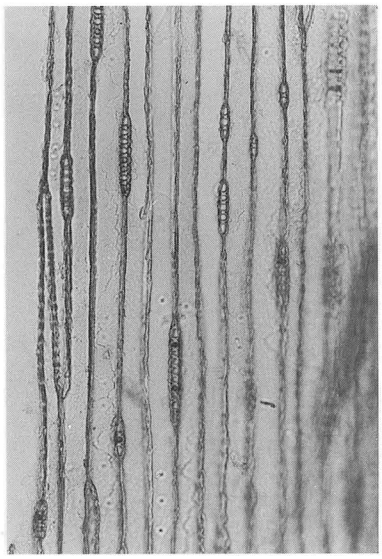
5 b 同　bar:0.4mm



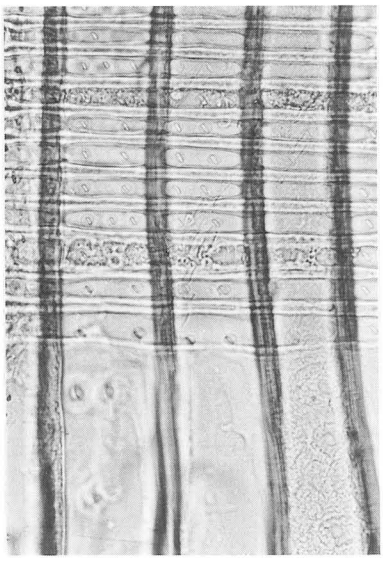
5 c 同　bar:0.1mm



6 a ヒノキ　bar:1mm　217



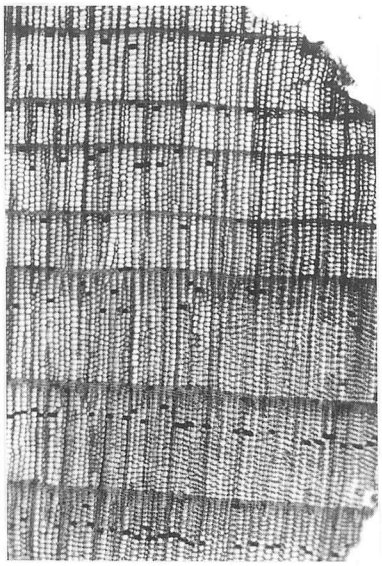
6 b 同　bar:0.4mm



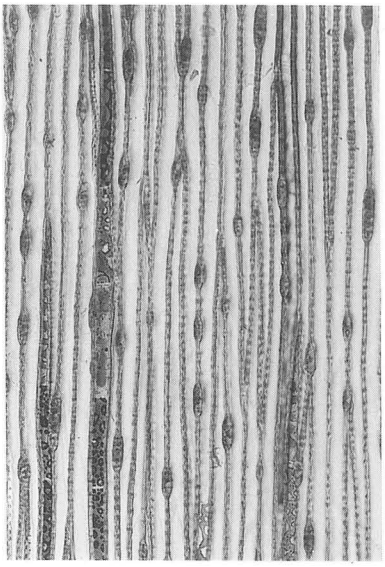
6 c 同　bar:0.1mm

挿図写真５　深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真

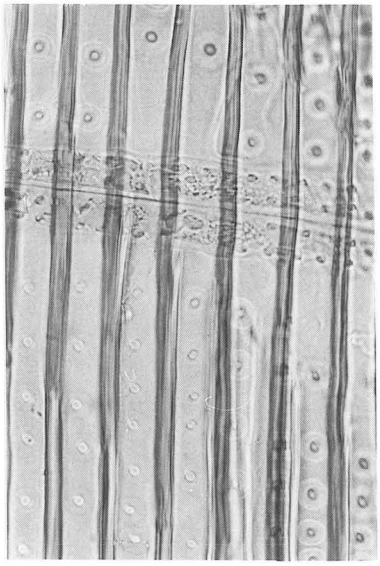
Bar:



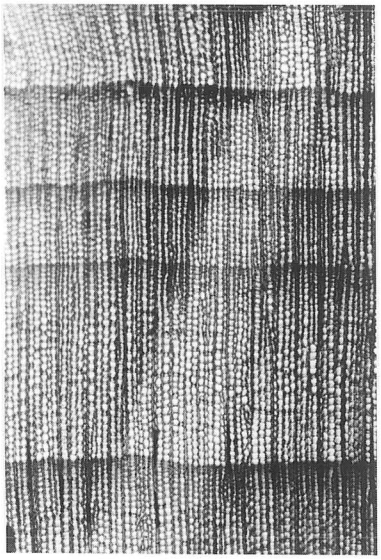
7ａ アスナロ　bar:1mm　W7244



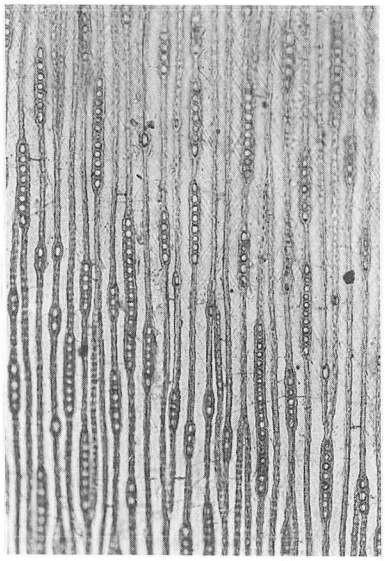
7ｂ 同　bar:0.4mm



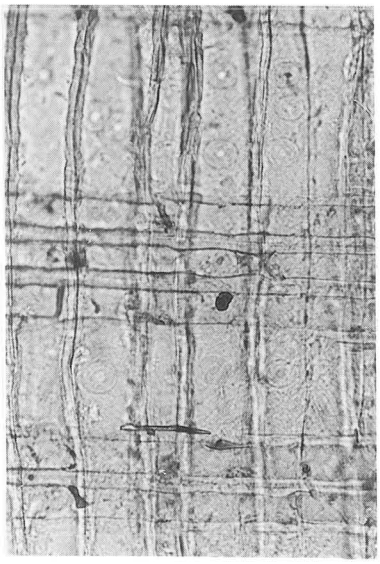
7ｃ 同　bar:0.1mm



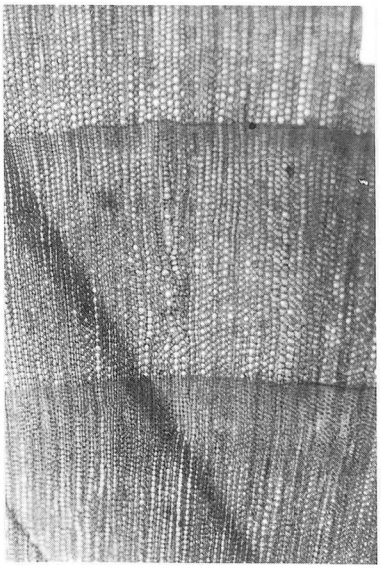
8ａ イヌマキ　bar:1mm　W7199



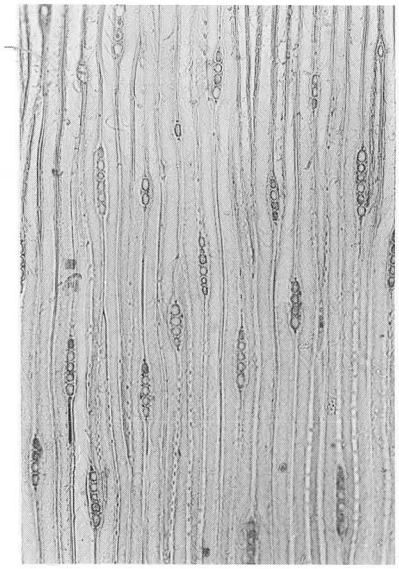
8ｂ 同　bar:0.4mm



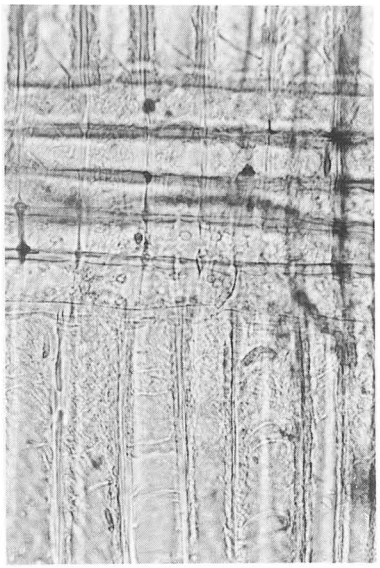
8ｃ 同　bar:0.1mm



9ａ カヤ　bar:1mm　716

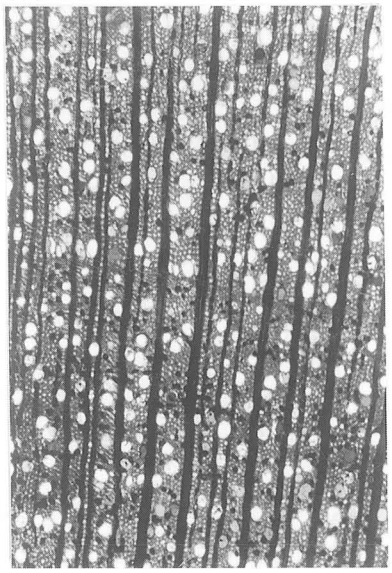


9ｂ 同　bar:0.4mm



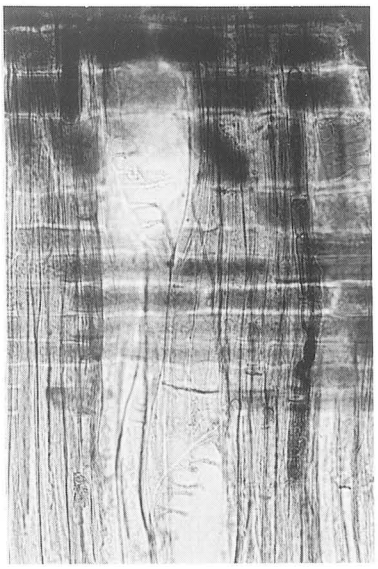
9ｃ 同　bar:0.1mm

挿図写真 6　　深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真　　Bar:

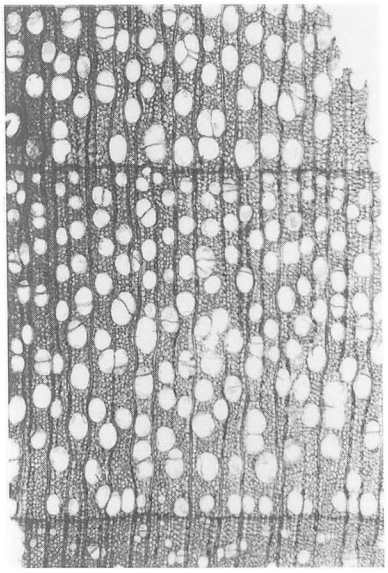


10 a ヤマモモ　bar:1mm　329

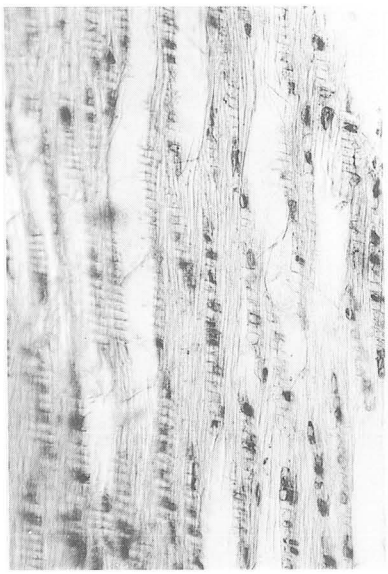
10 b 同　bar:0.4mm



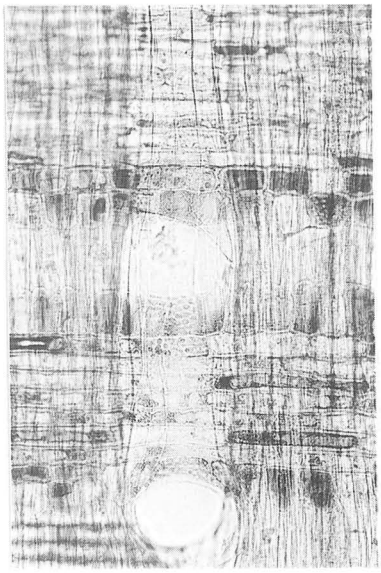
10 c 同　bar:0.2mm



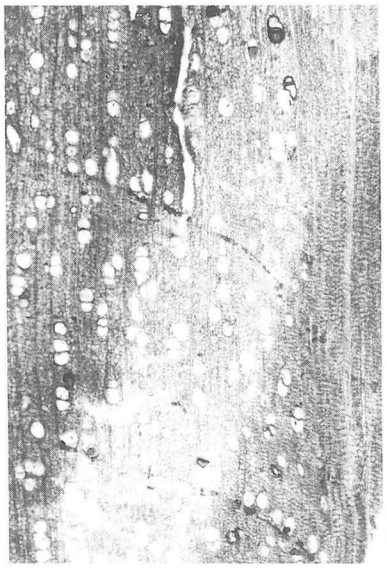
11 a ヤナギ属　bar:1mm　615



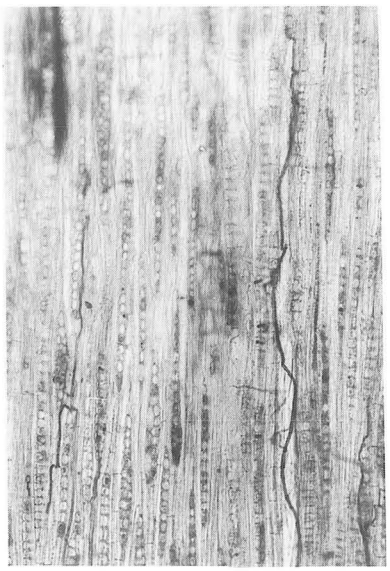
11 b 同　bar:0.4mm



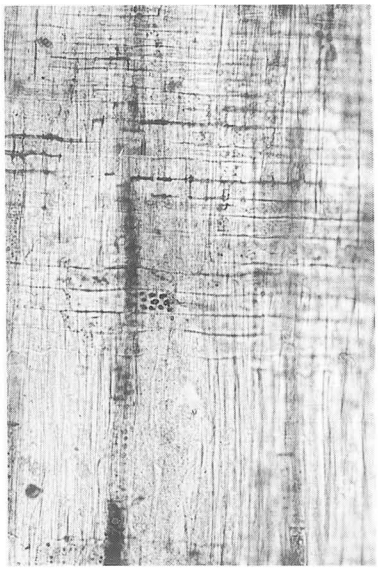
11 c 同　bar:0.2mm



12 a クマシデ属イヌシデ節　bar:1mm　7214

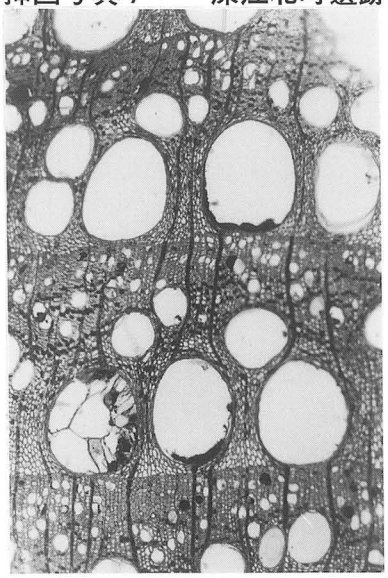


12 b 同　bar:0.4mm

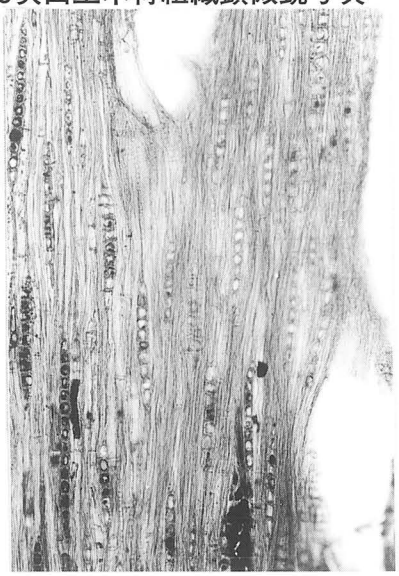


12 c 同

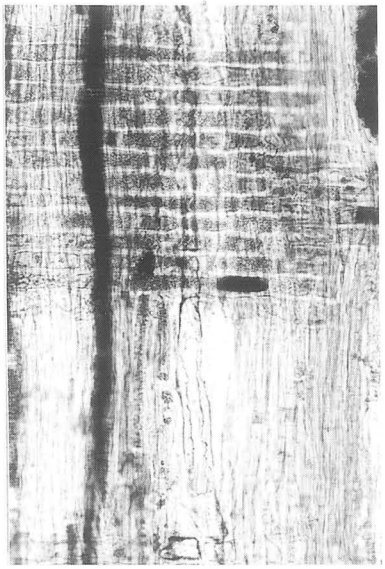
挿図写真７　深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真　Bar:



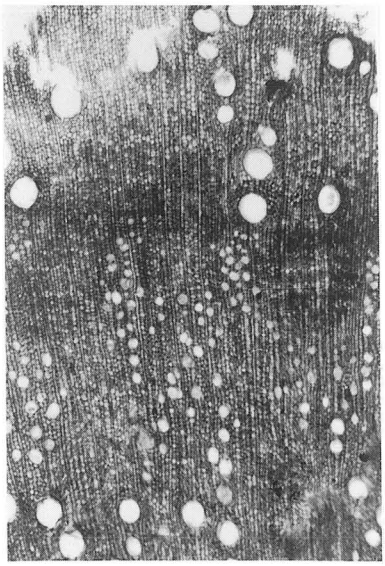
13ａ クリ　bar:1mm　331



13ｂ 同　bar:0.4mm

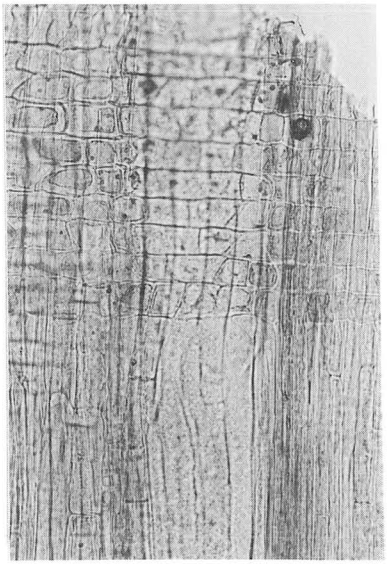


13ｃ 同　bar:0.2mm

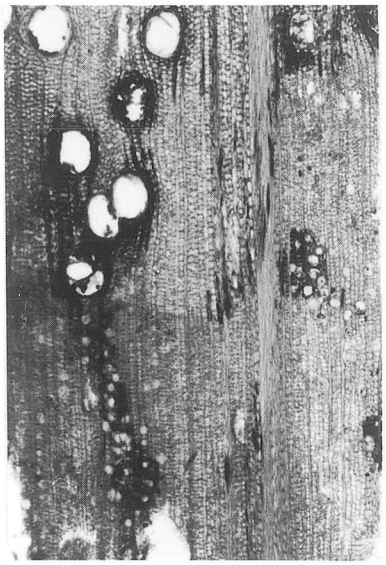


14ａ シイ属　bar:1mm　33

14ｂ 同　bar:0.4mm

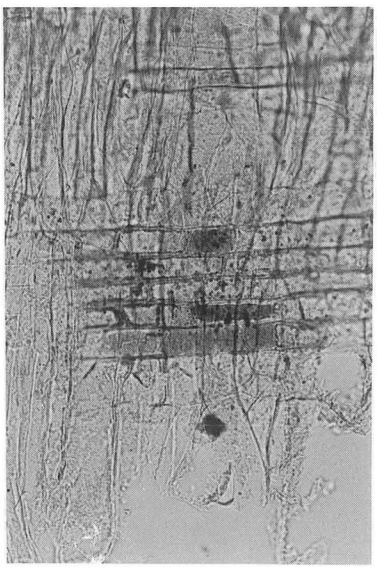


14ｃ 同　bar:0.2mm



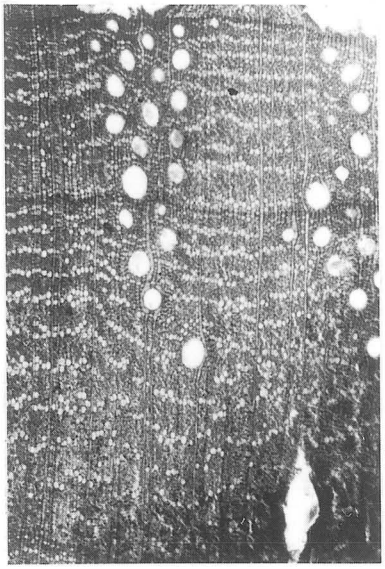
15ａ コナラ属コナラ節　bar:1mm　W7293

15ｂ 同　bar:0.4mm

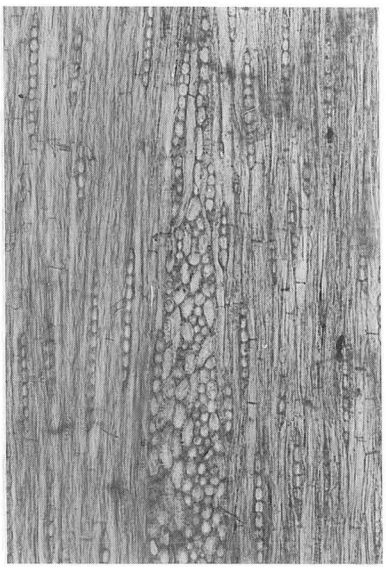


15ｃ 同 bar:0.2mm

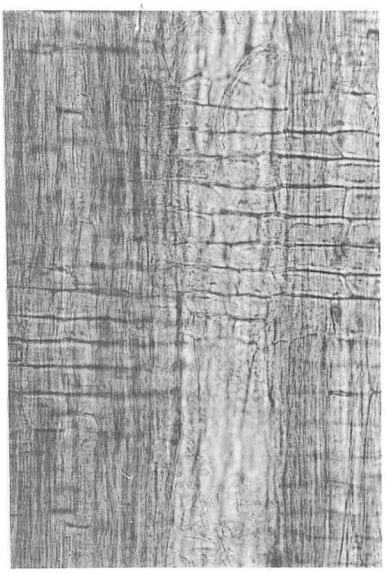
挿図写真８　　深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真　　Bar:



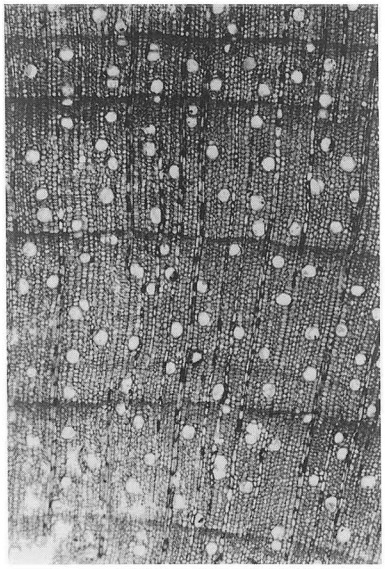
16ａ アカガシ亜属　bar:1mm　45



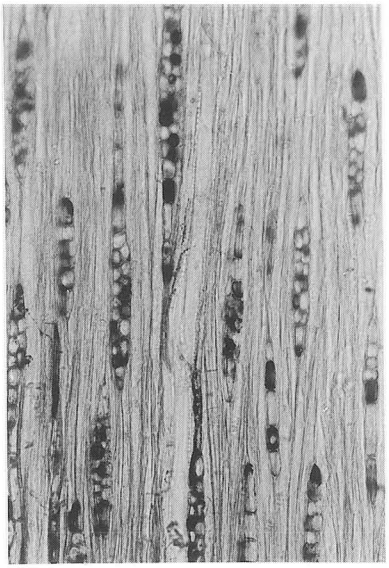
16ｂ 同　bar:0.4mm



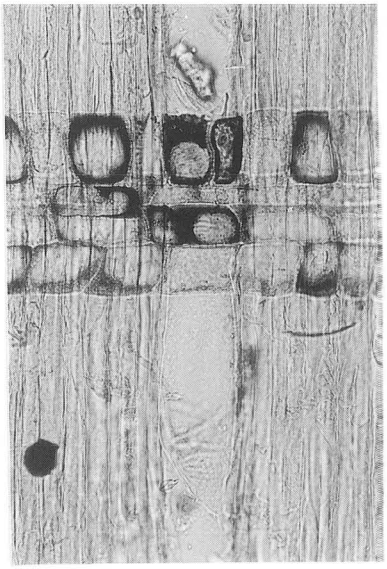
16ｃ 同　bar:0.2mm



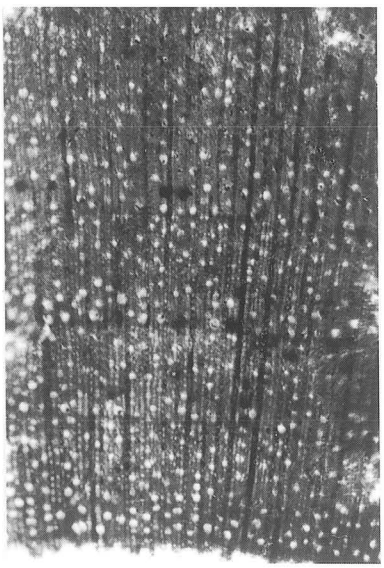
17ａ クスノキ科　bar:1mm　105



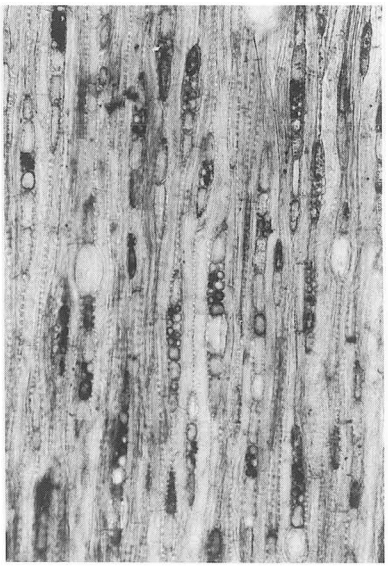
17ｂ 同　bar:0.4mm



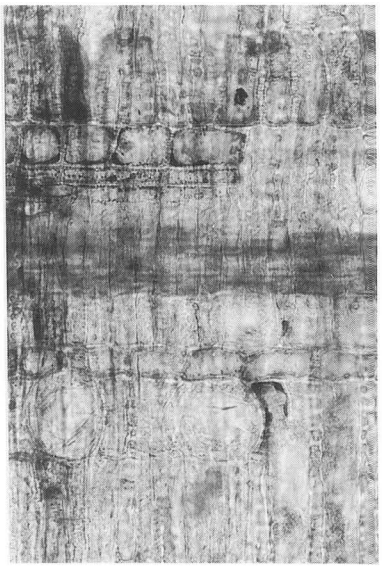
17ｃ 同　bar:0.2mm



3 18ａ ヤブツバキ　bar:1mm　143



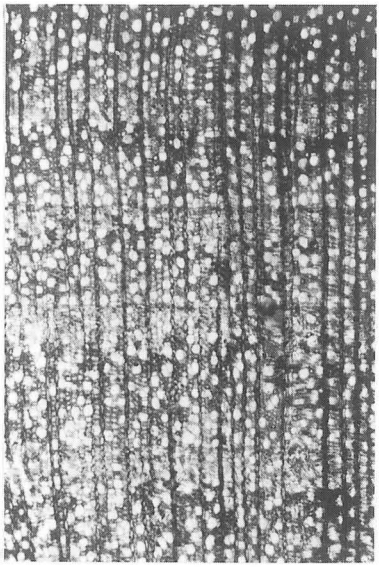
18ｂ 同 bar:0.4mm



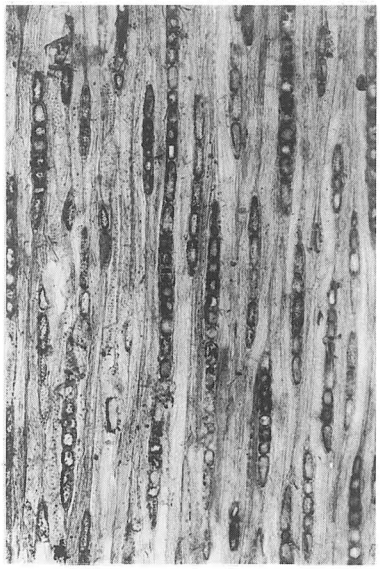
18ｃ 同　bar:0.2mm

挿図写真 9　深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真

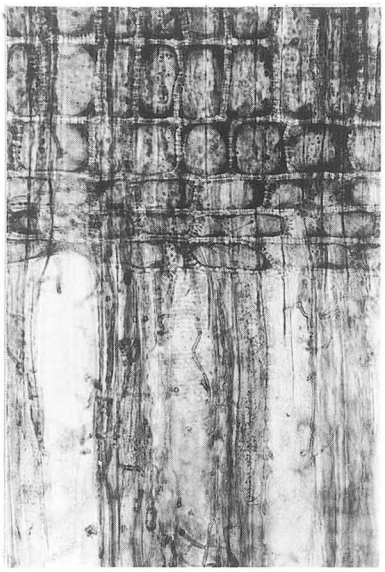
Bar:



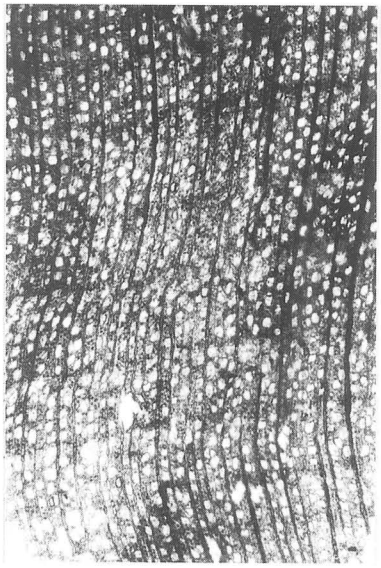
19 a サカキ　bar:1mm　330



19 b 同　bar:0.4mm



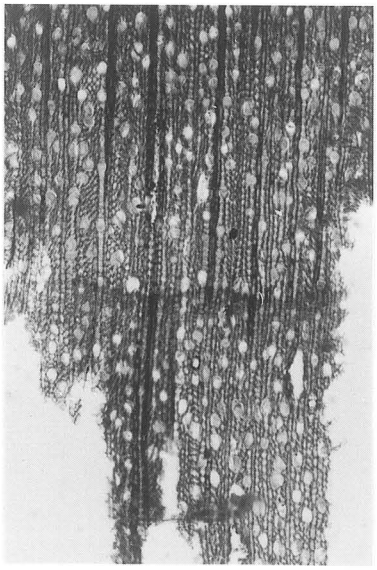
19 c 同　bar:0.2mm



20 a ヒサカキ　bar:1mm　323

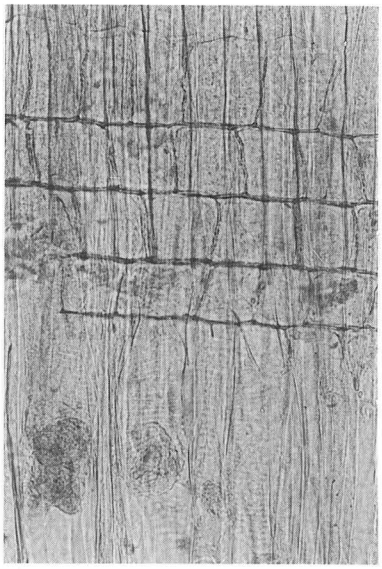
20 b 同　bar:0.4mm

20 c 同　bar:0.2mm



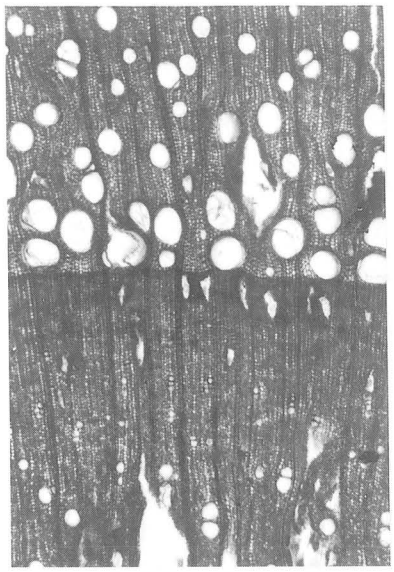
21 a ユズリハ属　bar:1mm　W7206

21 b 同　bar:0.4mm

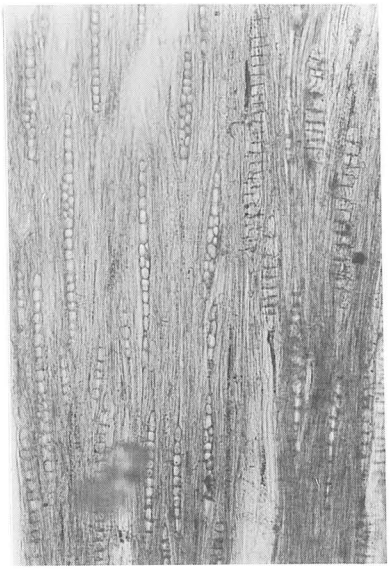


21 c 同　bar:0.2mm

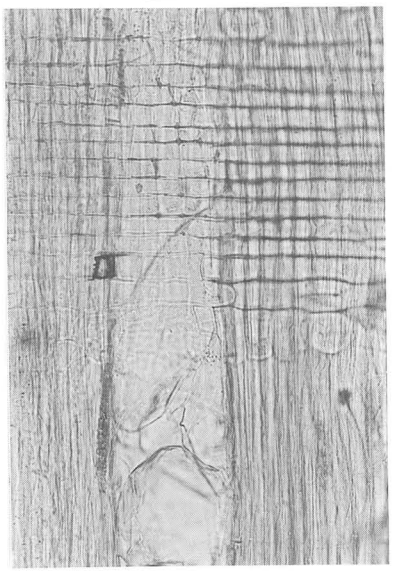
挿図写真10　深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真　Bar:



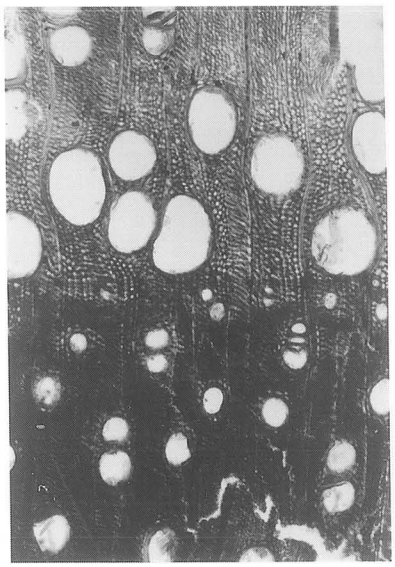
22 a ヤマウルシ　bar:1mm　W7187



22 b 同　bar:0.4mm

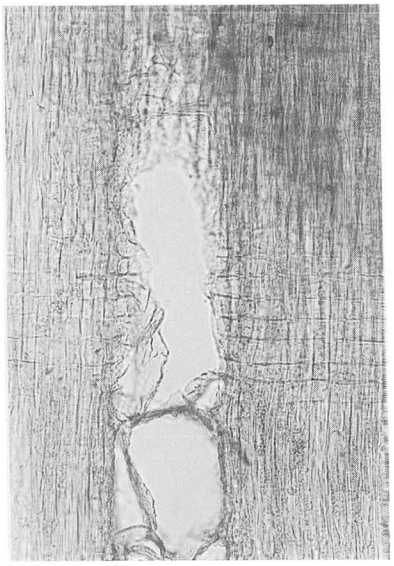


22 c 同　bar:0.2mm

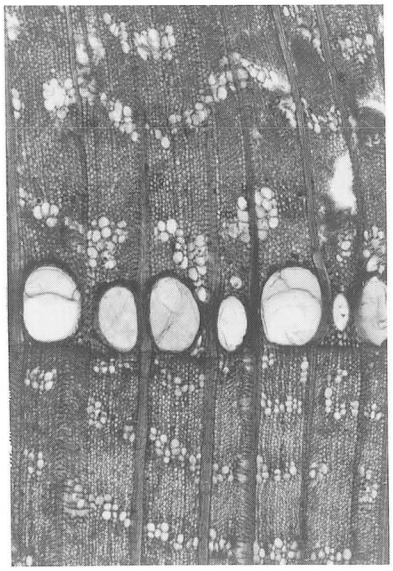


23 a ケンポナシ属　bar:1mm　563

23 b 同　bar:0.4mm



23 c 同　bar:0.2mm



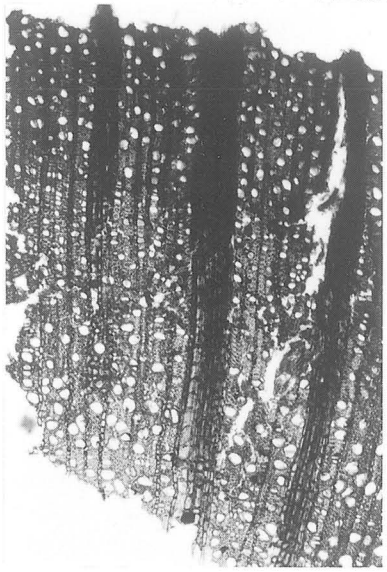
24 a ハリギリ　bar:1mm　324

24 b 同　bar:0.4mm

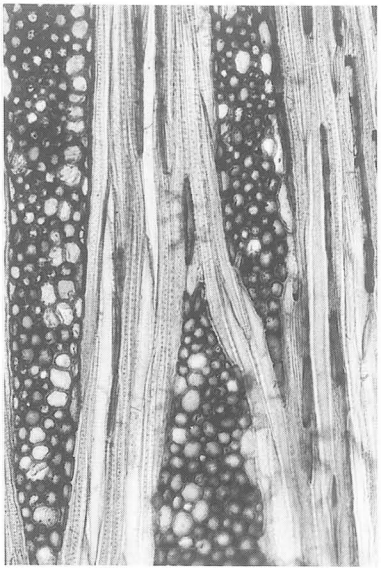
24 c 同　bar:0.2mm

挿図写真11　深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真

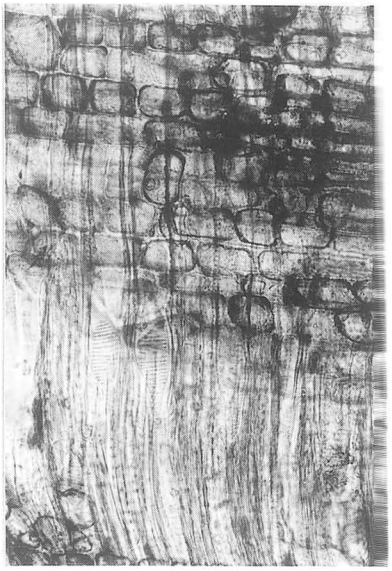
Bar: [redacted]



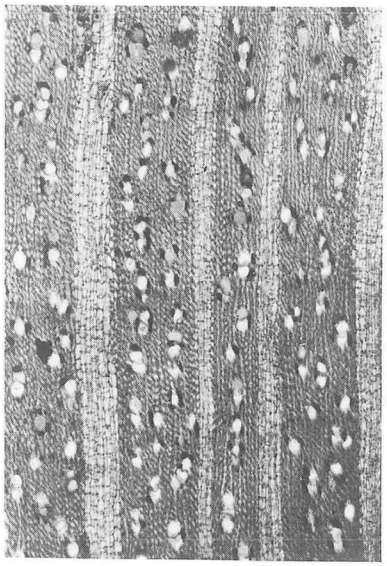
25 a シャシャンボ　bar:1mm　W7209



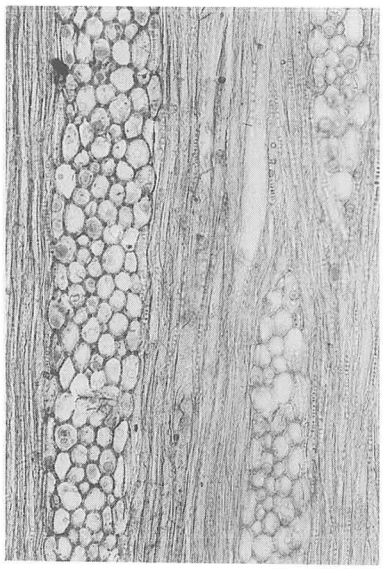
25 b 同　bar:0.4mm



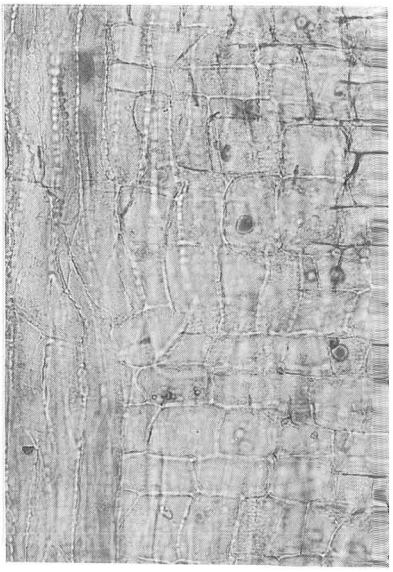
25 c 同　bar:0.2mm



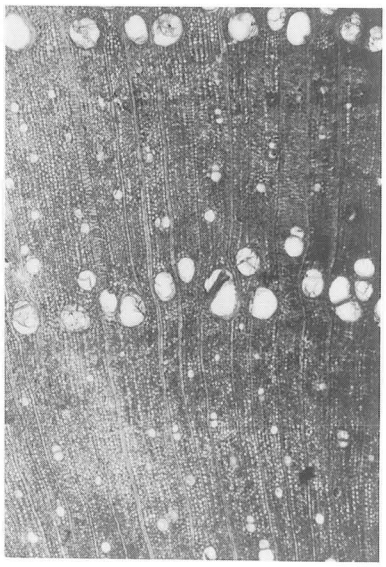
26 a タイミンタチバナ　bar:1mm　325



26 b 同　bar:0.4mm

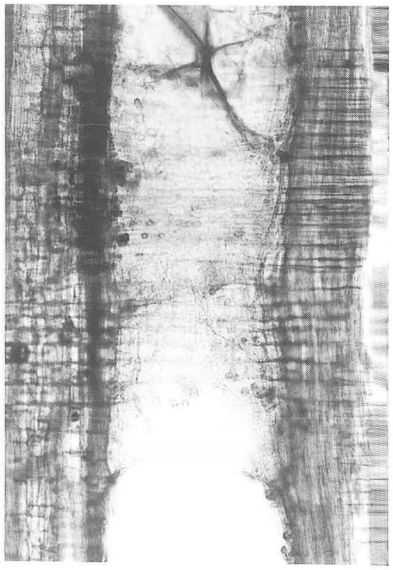


26 c 同　bar:0.2mm



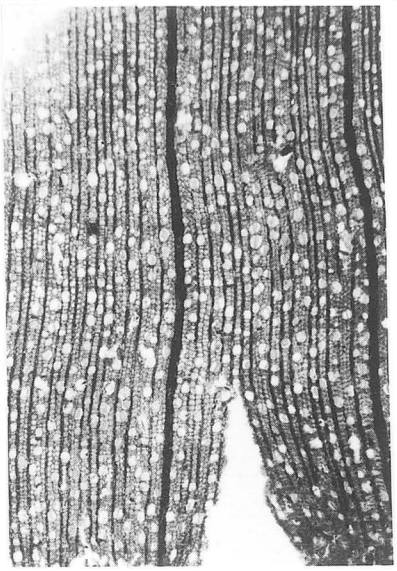
27 a トリネコ属　bar:1mm　37

27 b 同　bar:0.4mm

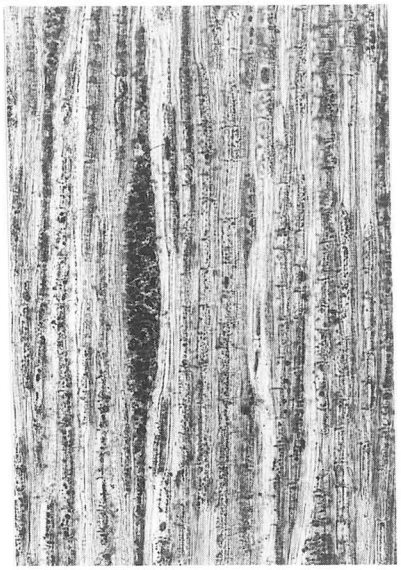


27 c 同　bar:0.2mm

挿図写真12　深江北町遺跡第9次出土木材組織顕微鏡写真　Bar:



28 a 散孔材　bar:1mm　W7198



28 b 同　bar:0.4mm

28 c 同　bar:0.2mm

（３）深江北町遺跡（第９次調査）の花粉化石群集

新山雅広（株式会社パレオ・ラボ）

１．はじめに

深江北町遺跡は神戸市の東端部に位置し、現海岸線から１km内外の標高２～６ｍの砂堆上に立地する。本遺跡は、弥生時代後期～古墳時代前期および奈良時代～平安時代の遺跡であり、第９次調査（標高3.6～4.0m）では、平安時代後期および飛鳥時代～平安時代前期の２面の遺構面が検出され、掘立柱建物、柱穴、溝、土坑などの遺構や奈良時代～平安時代の土器、木製品（木簡など）などの多量の遺物が確認された。ここでは、本遺跡における各時期の植生および栽培状況を復元する一端として花粉化石群集の検討を行った。

２．試料と方法

花粉化石群集の検討は、２区（４試料:A１～４）、５区（４試料:B１～４）および４区（２試料:C1、2）より採取された合計１０試料について行った。これら１０試料は、珪藻化石の検討にも用いられた。以下に、各試料の簡単な記載を示す。

２区（４試料:A１～４）：A１（５層）は、暗褐灰色細砂～粗砂質シルトで平安時代後期～鎌倉時代。A２（８層）は、淡褐灰色シルト質極細砂～細砂で奈良時代～平安時代。A３（15層）は、暗灰褐色シルト質極細砂～細砂で弥生時代後期末。A４（20層）は、植物遺体を多く含む淡黒灰色極細砂混じりシルトで弥生時代後期末以前？。

５区（４試料:B１～４）：B１（８層）は、暗（褐）灰色シルト質細砂で奈良時代～平安時代。B２（９層）は、暗褐灰色小礫混じりシルト質細砂で奈良時代～平安時代。B３（13層上部）は、（淡）黒灰色シルトで弥生時代後期末。B４（14層）は、黒灰色シルトで弥生時代後期末。

４区（２試料:C１、２）：C１（15層）は、淡黒灰色シルトで弥生時代後期末。C２（16層）は、黒色シルト混じり極細砂で弥生時代後期末。

花粉化石の抽出は、試料約２～５gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理･化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定･計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉･胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

３．花粉化石群集の記載

同定された分類群数は、樹木花粉37、草本花粉32、形態分類を含むシダ植物胞子３である。以下に、各地点ごとに花粉化石群集の記載を示す。

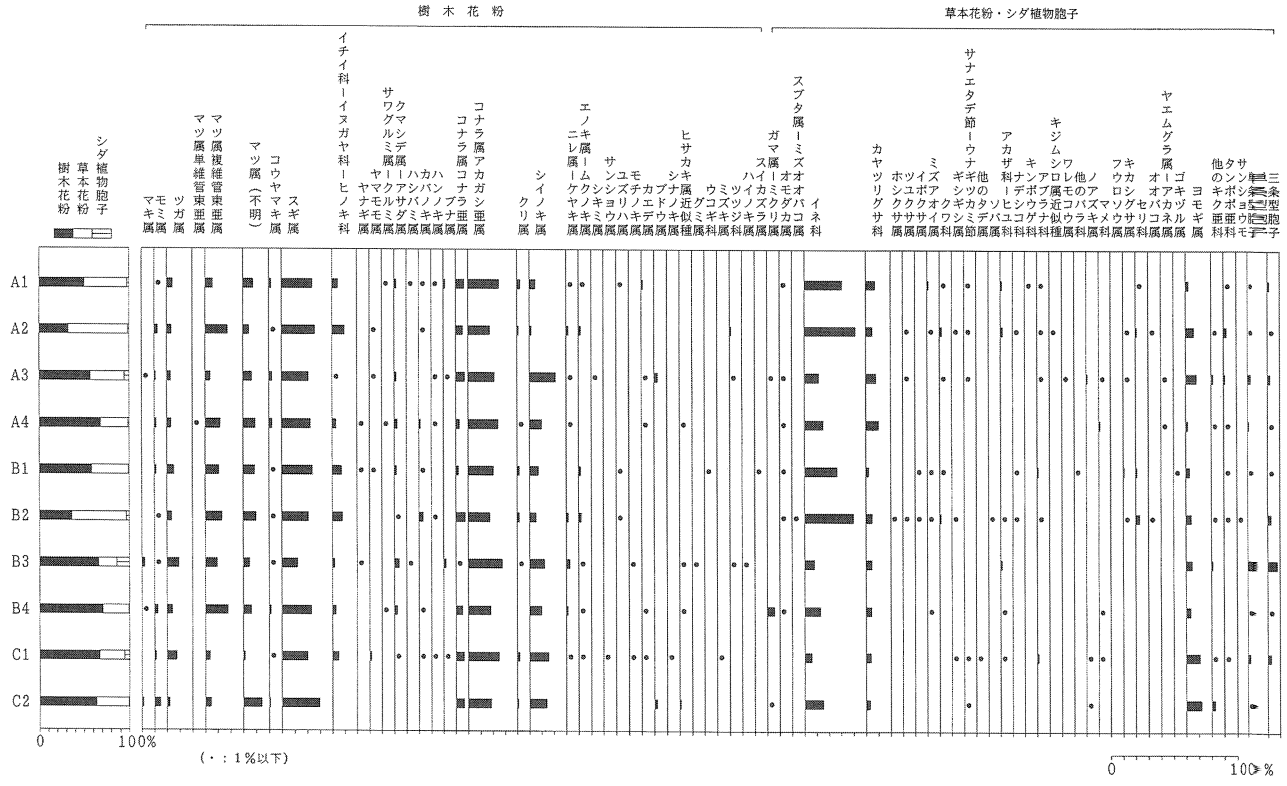
表33　花粉化石一覧表

和名	学名	A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3	B4	C1	C2
樹木											
マキ属	*Podocarpus*	-	-	1	-	-	-	5	2	-	2
モミ属	*Abies*	1	6	3	5	4	2	2	7	3	9
ツガ属	*Tsuga*	10	8	8	10	14	8	19	11	16	4
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	13	37	11	35	27	29	19	47	8	9
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	17	10	18	28	23	22	10	17	3	28
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	4	2	7	8	2	2	2	4	1	2
スギ属	*Cryptomeria*	52	55	55	67	61	46	25	61	43	59
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	10	21	2	9	19	18	4	8	11	-
ヤナギ属	*Salix*	-	-	-	1	2	-	2	-	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	1	2	-	2	-	-	-	3	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	2	-	-	1	-	-	-	2	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	4	-	5	8	5	1	8	7	2	-
ハシバミ属	*Corylus*	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-
カバノキ属	*Betula*	2	2	-	4	1	8	-	1	2	-
ハンノキ属	*Alnus*	1	-	2	1	-	1	-	-	2	-
ブナ属	*Fagus*	3	-	2	-	-	-	4	-	2	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	15	12	19	9	6	17	2	14	14	13
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	54	37	56	72	52	39	56	48	53	37
クリ属	*Castanea*	6	3	-	2	5	4	1	-	4	2
シイノキ属	*Castanopsis*	11	4	56	30	19	12	25	26	33	28
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1	4	1	1	-	4	6	3	1	-
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	1	4	-	-	4	5	2	1	2	-
シキミ属	*Illicium*	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	2	-	-	-	2	1	-	-	-	-
モチノキ属	*Ilex*	-	-	-	-	-	-	2	-	2	-
カエデ属	*Acer*	3	-	2	1	-	-	-	2	2	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	7	-	-	-	-	-	-	4
シナノキ属	*Tilia*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ヒサカキ属近似種	cf. *Eurya*	-	-	-	1	-	-	1	1	-	2
グミ属	*Elaeagnus*	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
ミズキ属	*Cornus*	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
ツツジ科	Ericaceae	-	3	1	-	-	-	2	-	-	-
ハイノキ属	*Symplocos*	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
スイカズラ属	*Lonicera*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
草本											
ガマ属－ミクリ属	*Typha - Sparganium*	-	-	1	-	-	-	-	22	-	2
オモダカ属	*Sagittaria*	1	-	1	2	4	2	-	2	-	-
スブタ属－ミズオオバコ属	*Blyxa - Ottelia*	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	131	265	54	66	115	240	25	48	19	47
カヤツリグサ科	Cyperaceae	32	34	37	44	9	30	14	16	12	10
ホシクサ属	*Eriocaulon*	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
ツユクサ属	*Commelina*	-	2	1	-	-	1	-	-	-	-
イボクサ属	*Aneilema*	-	-	-	-	4	1	-	-	-	-
ミズアオイ属	*Monochoria*	5	2	-	-	2	5	-	1	-	-
クワ科	Moraceae	4	13	1	-	2	8	-	-	-	-
ギシギシ属	*Rumex*	-	2	-	-	-	3	-	-	1	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	2	6	4	-	-	-	-	-	2	3
他のタデ属	other Polygonum	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
ソバ属	*Fagopyrum*	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	6	13	-	-	-	5	4	1	3	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	2	-	-	1	1	-	-	-	-
キンポウゲ科	Ranunculaceae	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	3	2	1	-	5	6	-	-	4	-
キジムシロ属近似種	cf. *Potentilla*	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-
ノアズキ属	*Dunbaria*	-	-	5	-	-	-	-	-	2	3
マメ科	Leguminosae	-	-	4	6	-	-	-	2	2	-
フウロソウ属	*Geranium*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	*Rotala*	-	6	1	-	5	3	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	2	8	-	-	5	19	-	-	-	-
オオバコ属	*Plantago*	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-
ヤエムグラ属－アカネ属	*Galium - Rubia*	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-
ゴキヅル属	*Actinostemma*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	10	41	38	7	13	25	15	13	34	37
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	5	9	1	-	4	4	-	2	10
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	15	6	1	4	2	-	-	2	-
シダ植物											
サンショウモ	*Salvinia natans* All.	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	3	4	15	5	1	-	17	2	8	2
三条型胞子	Trilete spore	6	5	10	1	3	17	24	1	9	-
樹木花粉	Arboreal pollen	213	209	260	294	251	219	203	262	212	199
草本花粉	Nonarboreal pollen	200	419	167	128	174	364	62	105	85	112
シダ植物胞子	Spores	9	9	25	6	4	19	41	3	17	2
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	422	637	452	428	429	602	306	370	314	313
不明花粉	Unknown pollen	21	20	35	20	25	22	30	18	39	38

A地点：A地点の花粉化石群集は、上位のA１、A２と下位のA３、A４とで大きく２つに分かれる。下位２試料は、樹木花粉の占める割合は約58～69%であるが、上位２試料は約33～50%と減少する。マツ属複維管束亜属、スギ属、アカガシ亜属が20%前後で最優占する傾向は、共通するが、下位２試料はシイノキ属が約10～22%と比較的高率であるのに対して、上位２試料は、約２～５%と急激に減少する。逆に、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科は下位２試料では、１%未満～約３%と低率であるのに対して、上位２試料は約５～10%と大幅に増加する。他に、ツガ属、コナラ亜属がいずれの試料からも比較的高率で出現する。なお、状態が悪くマツ属（不明）としたものは、大半がマツ属複維管束亜属と予想されるので、マツ属複維管束亜属の出現率はマツ属（不明）も考慮した上で検討し、以下も同様である。草本花粉では、下位２試料は、イネ科が最優占するものの、約12～15%とさほど高率ではないが、上位２試料は、約31～42%と急増する。カヤツリグサ科、ヨモギ属が比較的高率であることや、オモダカ属、キカシグサ属などの抽水植物が随伴する点は共通である。

B地点：B地点もA地点と同様、上位２試料（B１、B２）と下位２試料（B３、B４）とで大きく分かれ、組成の変化の仕方もA地点と同様である。他に、注目される点は、下位２試料のみでヒサカキ属近似種が出現し（A地点においても下位のA４のみで出現）、逆に上位２試料のみでユズリハ属が出現する（A地点においても上位のA１のみで出現）。草本花粉では、B２でソバ属が１%未満の低率であるが出現し、B４でガマ属－ミクリ属が約６%とやや突出する点が注目される。また、下位のB３では、抽水植物や湿地性草本が出現しない点も異なる。

C地点：A地点の下位２試料、B地点の下位２試料の組成と概ね類似する。しかし、ヨモギ属（約11～12%）の出現率が大きく異なり、C２でガマ属－ミクリ属が出現する以外は抽水植物が全く出現しない点も異なる。



（樹木花粉は樹木花粉総数，草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

図112　花粉化石分布図

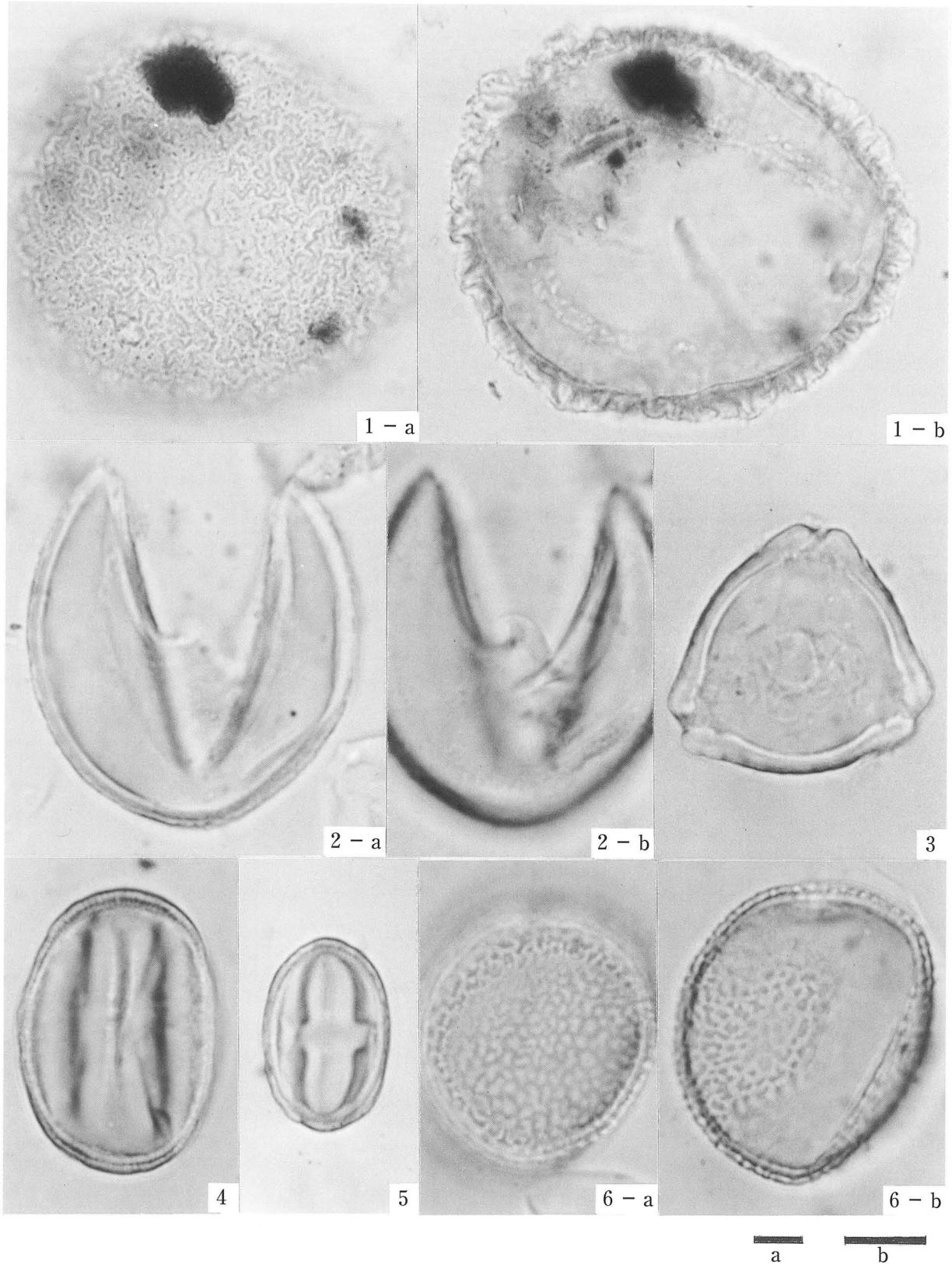
4．考察

[弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の古植生]

Ａ地点の下位２試料、Ｂ地点の下位２試料、Ｃ地点の２試料の花粉組成がこの時期の古植生を反映していると考えられる。遺跡周辺には、針葉樹のマツ属複維管束亜属、スギ属から成る林分とアカガシ亜属、シイノキ属を主体にヤマモモ属、ヒサカキ属近似種などを交えた照葉樹林が優勢であったと予想される。また、針葉樹のツガ属も比較的高率であり、普通に混じっていたと思われる。各地区の堆積環境については、２区は15層（Ａ３）、20層（Ａ４）の堆積期は、水位の低い湿地ないし水溜りであったことが予想される。そこには、ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、ツユクサ属、ワレモコウ属、キカシグサ属などが生育していたであろう。このうち、抽水植物のオモダカ属、キカシグサ属は、いわゆる水田雑草であるが、イネ科がさほど高率ではないので、おそらく水田ではないと思われる。５区は、14層（Ｂ４）の堆積期は、２区と同様、水位の低い湿地ないし水溜りであり、ガマ属－ミクリ属が多く生育していたと予想されるが、13層（Ｂ３）の堆積期は、抽水植物が出現しないので、幾分乾き気味になったと思われる。４区は、16層（Ｃ２）の堆積期は、水位の低い湿地ないし水溜まりであったが、15層（Ｃ１）の堆積期は、幾分乾き気味になったと思われる。

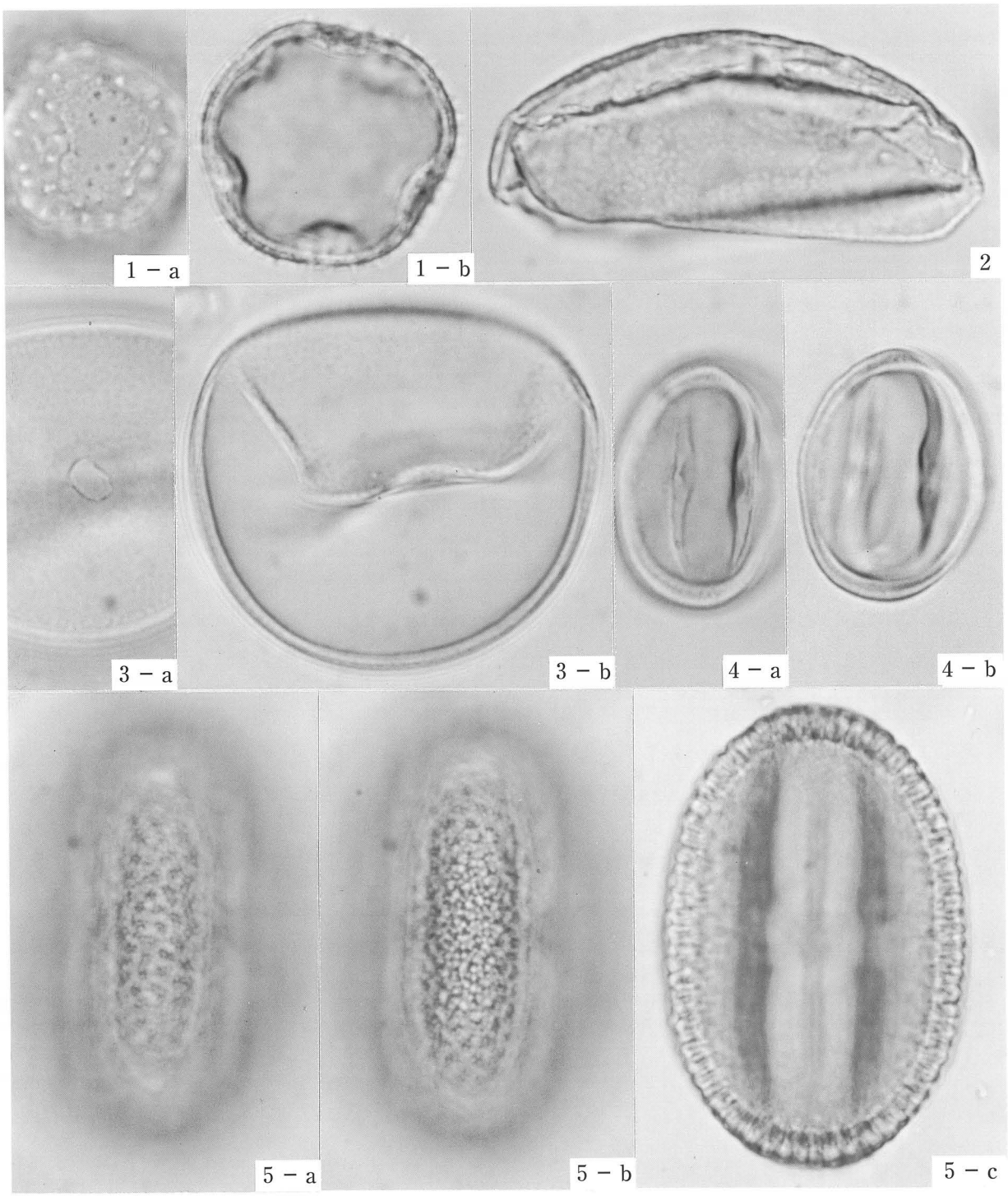
[奈良時代～平安時代後期の古植生]

Ａ地点の上位２試料およびＢ地点の上位２試料の花粉組成がこの時期の古植生を反映していると考えられる。Ａ１は平安時代後期であり、その他は奈良時代～平安時代である。マツ属複維管束亜属、スギ属、アカガシ亜属は依然として優勢であったが、シイノキ属は大幅に林分を縮小したと予想される。また、照葉樹林要素のヒサカキ属近似種もみられなくなった可能性が考えられる。この時期の照葉樹林は、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭と異なり、シイノキ属をあまり交えず、アカガシ亜属を主体にヤマモモ属、ユズリハ属などを交えたものであったことが予想される。他に、ツガ属は引き続き、普通に混じっており、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科も林分を拡大し、普通に混じっていたであろう。一方、試料採取地点付近は、イネ科が急増して高率となり、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属、サンショウモといったいわゆる水田雑草が随伴するので、水田であった可能性が考えられる。おそらく、２区、５区にみられた湿地が開墾されて水田になったのであろう。また、Ｂ２（９層）ではソバ属が出現するので、水田脇や隣接した場所で、あるいは水田の裏作としてソバ栽培が行われていたことが予想される。



挿図写真13　産出した花粉化石（scale　bar:10μm　a:1　b:2～6）

1．ツガ属、A4、PAL.MN　1525
2．スギ属、A4、PAL.MN　1515
3．ヤマモモ属、B1、PAL.MN　1523
4．コナラ属アカガシ亜属、A4、PAL.MN　1516
5．シイノキ属、A4、PAL.MN　1524
6．ガマ属－ミクリ属、B4、PAL.MN　1518



挿図写真14　産出した花粉化石（scale　bar:10μm）

1．オモダカ属、B1、PAL. MN　1521
2．ミズアオイ属、B2、PAL. MN　1520
3．イネ科、A2、PAL. MN　1517
4．キカシグサ属、B1、PAL. MN　1522
5．ソバ属、B4、PAL. MN　1519

（4）堆積物中の珪藻化石群集

藤根　久（株式会社パレオ・ラボ）

1．はじめに

珪藻は10～500μmほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉、1988；安藤、1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種（陸生珪藻）も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

深江北町遺跡は、東灘区深江北町１丁目地内に所在する砂堆上の遺跡である。調査では、平安時代後期および奈良時代から平安時代前期にかけての遺構面が検出され、掘立柱建物や柱穴あるいは溝などが確認された。

ここでは、自然流路内堆積物などに含まれる珪藻化石群集を調べ、堆積物の堆積環境について検討した。

2.試料の処理方法

試料は、２区の自然流路内堆積物など弥生時代後期末～平安時代後期の堆積物４試料（Ａ１～Ａ４）、５区の自然流路内堆積物など弥生時代後期末～平安時代の堆積物４試料（Ｂ１～Ｂ４）、４区の弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の堆積物２試料（Ｃ１およびＣ２）である。

２区堆積物では、試料Ａ１は５層の暗褐灰色細砂～粗砂質シルト、試料Ａ２が９層の暗灰褐色細砂質シルト、試料Ａ３が15層の暗灰褐色シルト質極細砂～細砂、試料Ａ４が20層の植物遺体を多く含む淡黒灰色極細砂混じりシルトである。

５区堆積物では、試料Ｂ１が8層の暗（褐）灰色シルト質細砂、試料Ｂ２が９層の暗褐灰色小礫混じりシルト質細砂、試料Ｂ３が13層の（淡）黒灰色シルト、試料Ｂ４が14層の黒灰色シルトである。

４区堆積物では、試料Ｃ１が15層の淡黒灰色シルト、試料Ｃ２が16層の黒色シルト混じり極細砂である。

これらの試料は、以下の方法で処理し、珪藻用プレパラートを作成した。

（１）湿潤重量約１ｇ程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し30％過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。

（２）反応終了後、水を加え１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を７回ほど繰り返した。

（３）残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥した。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作成した。

作成したプレパラートは顕微鏡下1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。なお、珪藻化石が少ない試料は、プレパラート全面について精査した。

3．珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として、海水～汽水種は不明種としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。以

下に、小杉（1988）が設定した汽水～海水域における環境指標種群と安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

［外洋指標種群（A)］：塩分濃度が35パーミル以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

［内湾指標種群（B)］：塩分濃度が26～35パーミルの内湾水中を浮遊生活する種群である。

［海水藻場指標種群（C1)］：塩分濃度が12～35パーミルの水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。

［海水砂質干潟指標種群（D１)］：塩分濃度が26～35パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

［海水泥質干潟指標種群（E１)］：塩分濃度が12～30パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

［汽水藻場指標種群（C2)］：塩分濃度が４～12パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

［汽水砂質干潟指標種群（D2)］：塩分濃度が５～26パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。

［汽水泥質干潟指標種群（E2)］：塩分濃度が2～12パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

［上流性河川指標種群（J)］：上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらにはAchnanthes属が多く含まれるが、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

［中～下流性河川指標種群（K)］：中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種は、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

［最下流性河川指標種群（L)］：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種は、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになる。

［湖沼浮遊生指標種群（M)］：水深が約1.5m以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼に出現する種群である。

［湖沼沼沢湿地指標種群（N)］：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地におれる付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい。

［沼沢湿地付着生指標種群（O)］：水深１m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地で、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

［高層湿原指標種群（P)］：尾瀬ケ原湿原や霧ケ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

［陸域指標種群（Q)］：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている)。

４．珪藻化石の特徴とその堆積環境

全試料から検出された珪藻化石は、海水種が９分類群９属６種、淡水種が99分類群23属82種２亜種それぞれ検出された。これらの珪藻化石は、海水種が１環境指標種群、淡水種が５環境指標種群に分類さ

れた（表34）。以下では、各地区の堆積物について、環境指標種群の出現傾向に基づいた珪藻分帯に従って、環境指標種群の特徴と推定される堆積環境について述べる。

［2区堆積物］

環境指標種群の出現傾向から3珪藻分帯が設定された。

DAⅠ帯（試料A4）

堆積物1g当りの殻数は約2.56×10^5個、完形殻の出現率は約31％である。珪藻化石は沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia viridis*などが特徴的である。なお、珪藻殻の保存が悪いが*Pinnularia*属も多く見られた。また、少ないものの内湾指標種群などの海水種や陸域指標種群も含まれていた。

こうしたことから、沼沢湿地が推定される。なお、海水種珪藻化石が含まれていたことから、海水の影響を受けたことが推定される。

DAⅡ帯（試料A3）

堆積物1g当りの殻数は約1.11×10^4個、完形殻の出現率は0％である。珪藻化石は非常に少なくかつ破片からなるため、環境を指標する珪藻種は少ない。

こうしたことから、堆積物は有機質砂であるが、乾いた陸域環境であったことが予想される。

DAⅢ帯（試料A1およびA2）

堆積物1g当りの殻数は約4.47×10^6および3.73×10^6個、完形殻の出現率はいずれも約47％である。珪藻化石は沼沢湿地付着生指標種群*Navicula elginensis*などや湖沼沼沢湿地指標種群の*Fragilaria construens*などが特徴的に多く含まれていた。また、中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*が含まれていた。

こうしたことから、流れを伴うやや水深のある沼沢湿地環境が推定される。

［5区堆積物］

環境指標種群の出現傾向から3珪藻分帯が設定された。

DBⅠ帯（試料B4）

堆積物1g当りの殻数は約3.42×10^6個、完形殻の出現率は約49％である。珪藻化石は沼沢湿地付着生指標種群の*Neidium iridis*などや湖沼沼沢湿地指標種群の*Melosira ambigua*などが特徴的に多く含まれていた。なお、少ないものの内湾指標種群などの海水種も含まれていた。

こうしたことから、沼沢湿地が推定される。なお、海水種珪藻化石が含まれていたことから、海水の影響を受けたことが推定される。

DBⅡ帯（試料B3）

堆積物1g当りの殻数は約4.21×10^4個、完形殻の出現率は約14％である。珪藻化石は、非常に少なく破片からなる。なお、陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*や海水種珪藻化石が含まれている。なお、少ないものの内湾指標種群などの海水種も含まれていた。

こうしたことから、堆積物は有機質シルトであるが、乾いた陸域環境であったことが予想される。なお、わずかに陸域指標種群が検出されていることから、ジメジメとした環境も推定される。

表34-1　堆積物中の珪藻化石算出表（種群は主に安藤（1990）による）

分類群	種群	A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3	B4	C1	C2
Actinocyclus spp.	?	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-
Biddulphia spp.	?	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-
Coscinodiscus spp.	?	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
Grammatophora macilenta	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Hyalodiscus scoticus	?	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Surirella fluminensis	?	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Trachyneis aspera	?	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Cyclotella stylorum	B	-	-	-	1	-	-	4	3	4	-
Nitzschia plana	?	-	-	-	3	-	-	-	2	-	-
Achnanthes exigua	W	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
A. inflata	W	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
A. lanceolata	K	4	3	-	-	6	4	-	1	-	-
A. marginulata	W	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
A. spp.	?	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amphora ovalis	W	5	8	-	-	11	12	1	11	-	-
A. spp.	?	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Bacillaria paradoxa	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis bacillum	W	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-
C. lauta	W	-	3	-	4	-	-	-	-	1	1
C. silicula	W	5	5	-	2	3	-	-	4	-	-
Cocconeis placentula	W	1	-	-	5	1	1	4	1	-	1
Cymbella aspera	O	1	-	-	1	1	-	-	-	-	8
C. cuspidata	W	-	-	-	1	3	3	-	2	-	-
C. gracilis	W	-	-	-	-	-	-	-	1	-	5
C. leptoceros	W	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
C. minuta	W	2	9	-	-	1	3	-	2	-	4
C. naviculiformis	O	6	2	-	1	2	4	-	4	-	-
C. tumida	W	3	-	1	3	2	-	5	6	8	-
C. turgidula	K	-	-	-	1	-	-	1	-	1	-
C. spp.	?	1	2	1	2	1	1	1	1	3	7
Diploneis finnica	W	-	-	-	1	-	-	-	1	-	7
D. ovalis	W	7	3	-	8	7	1	-	3	-	6
D. subovalis	W	-	-	-	4	-	-	-	-	-	3
D. yatukaensis	W	-	-	1	5	-	-	-	-	-	11
D. spp.	?	-	-	2	-	-	-	1	2	-	11
Epithemia spp.	?	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Eunotia formica	W	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
E. lunaris	W	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
E. pectinalis var.minor	O	-	-	-	1	-	-	-	2	-	-
E. pectinalis var.undulata	O	-	-	-	-	-	-	-	11	-	-
E. praerupta	W	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
E. spp.	?	1	1	-	5	1	-	-	5	3	4
Fragilaria brevistriata	N	1	4	-	-	4	5	-	3	-	-
F. construens	N	6	7	-	-	12	36	-	3	-	-
F. pinnata	N	16	20	-	-	24	38	-	2	-	-
F. virescens	N	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
F. spp.	?	2	4	-	-	-	-	-	-	-	-
Frustulia vulgaris	W	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Gomphonema acuminatum	O	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
G. gracile	O	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
G. olivaceum	W	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
G. parvulum	W	4	3	-	-	1	-	-	2	-	-
G. truncatum	W	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
G. spp.	?	2	-	-	1	4	1	3	-	-	-
Gyrosigma spp.	?	1	-	-	14	-	1	-	4	-	-
Hantzschia amphioxys	Q	-	5	-	3	1	3	4	1	-	11
Melosira ambigua	N	5	-	-	-	2	13	-	17	-	-
M. distans	N	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
M. granulata	M	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
M. pensacolae	N	-	-	-	1	-	-	-	3	-	-
M. undulata	W	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
M. varians	K	2	-	-	-	4	1	-	-	-	-
M. spp.	?	1	-	-	2	6	5	-	7	-	-
Navicula americana	W	2	1	-	1	-	1	-	1	-	-
N. bacillum	W	2	6	-	-	2	5	1	3	-	-
N. confervacea	W	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
N. contenta	Q	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
N. cuspidata	W	-	-	-	1	-	-	-	3	-	-
N. elginensis	O	14	52	-	-	10	8	-	7	-	-
N. mutica	Q	-	2	-	-	1	2	-	-	-	-
N. pupula	W	12	4	-	-	3	1	-	-	-	-
N. pusilla	W	-	1	-	6	-	-	-	-	-	-
N. radiosa	W	1	-	-	-	1	-	1	-	-	-
N. tokyoensis	W	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
N. viridula	W	7	3	-	-	6	3	-	1	-	2

表34-2　堆積物中の珪藻化石算出表（種群は主に安藤（1990）による）

分類群	種群	A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3	B4	C1	C2
Navicula spp.	?	2	-	-	-	1	1	-	-	-	-
Neidium hitchcokii	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
N. iridis	O	-	2	-	5	3	5	-	16	-	-
N. spp.	?	5	2	-	-	3	2	-	2	-	1
Nitzschia amphibia	W	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
N. parvula	W	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
N. tryblionella	W	1	1	-	1	-	-	-	1	-	-
N. spp.	?	-	-	-	3	1	-	-	1	-	-
Pinnularia acrosphaeria	O	4	3	-	-	6	-	-	5	-	-
P. borealis	Q	-	-	2	2	-	-	1	-	-	53
P. braunii	W	1	2	-	-	1	-	-	-	-	-
P. brandelii	W	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
P. cardinaliculus	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6
P. divergens	W	1	-	-	2	-	-	-	8	-	3
P. divergentissima	W	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
P. gibba	O	3	-	-	2	1	3	-	7	-	-
P. hemiptera	W	2	-	-	1	1	1	-	-	-	2
P. interrupta	W	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
P. maior	W	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
P. microstauron	W	9	3	-	4	1	-	-	1	-	1
P. subcapitata	O	-	6	-	1	-	-	-	-	-	-
P. viridis	O	3	2	-	10	6	-	-	3	-	4
P. spp.	?	27	24	8	42	31	21	9	27	-	58
Rhopalodia gibba	W	2	-	-	1	3	1	-	4	-	-
R. gibberula	W	-	3	-	9	1	-	-	3	-	10
R. quisumbirgiana	W	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Stauroneis acuta	W	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
S. phoenicenteron	O	10	4	-	5	9	6	2	7	-	-
S. smithii	W	1	1	-	-	1	1	-	-	-	-
Surirella ovata	W	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-
S. tenera	W	1	-	-	-	3	-	-	1	-	-
S. spp.	?	-	-	-	3	3	1	1	2	-	-
Synedra ulna	W	3	1	1	9	8	1	6	3	6	-
Unknown	?	3	4	2	8	4	7	-	-	-	1
内湾（B）		-	-	-	1	-	-	4	3	4	2
海水不定・不明種（？）		-	-	1	7	-	-	2	3	1	1
中～下流性河川（K）		6	3	-	1	10	5	1	1	1	-
湖沼浮遊生（M）		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
湖沼沼沢湿地（N）		30	31	-	1	43	92	-	28	-	-
沼沢湿地付着生（O）		42	71	-	26	38	26	2	63	-	12
陸域（Q）		-	8	2	5	2	5	5	1	-	64
広布（W）		84	62	3	81	62	36	20	66	16	62
淡水不定・不明種（？）		47	38	13	80	55	40	16	51	6	82
珪藻殻数		209	213	19	203	210	204	50	216	28	223

$D_{BⅢ}$帯（試料B１およびB２）

堆積物１g当りの殻数は約4.42×10^6および4.46×10^6個、完形殻の出現率は約42および47%である。珪藻化石は、湖沼沼沢湿地指標種群の*Fragilaria construens*などや沼沢湿地付着生指標種群*Navicula elginensis*などが特徴的に多く含まれていた。また、中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*mが含まれていた。

こうしたことから、流れを伴うやや水深のある沼沢湿地環境が推定される。

［４区堆積物］

環境指標種群の出現傾向から２珪藻分帯が設定される。

D_{C1}帯（試料C１）

堆積物１g当りの殻数は約9.54×10^4個、完形殻の出現率は約10%である。珪藻化石は、陸域指標種群の*Pinnularia borealis*が特徴的に多く含まれていた。また、沼沢湿地付着生指標種群の*Cymbella asperaが*含ま

れていた。なお、少ないものの内湾指標種群などの海水種も含まれていた。

こうしたことから、ジメジメとした陸域環境が推定される。

DcⅡ帯（試料C２）

堆積物１g当りの殻数は約2.72×10^4個、完形殻の出現率は約11%である。珪藻化石は、非常に少なく破片からなる。なお、海水種珪藻化石が含まれていた。なお、少ないものの内湾指標種群などの海水種も含まれていた。

こうしたことから、堆積物有機質シルトであるが、乾いた陸域環境であったことが予想される。

５．考察

ここでは、弥生時代後期末以降の自然流路など堆積物中の珪藻化石を調べた。

表35　堆積物の特徴とその堆積環境

遺　構	試料	層位	堆積物の特徴		珪藻帯	堆積環境	その他
			色および構成物	その他			
２区堆積物（自然流路）	Ａ１	５層	暗褐灰色細砂～粗砂質シルト		DAⅢ	やや水深のある沼沢湿地	流れを伴う
	Ａ２	９層	暗灰褐色細砂質シルト				
	Ａ３	15層	暗灰褐色シルト質極細砂～細砂		DAⅡ	陸域	
	Ａ４	20層	淡黒灰色極細砂混じりシルト	植物遺体を多く含む	DAⅠ	沼沢湿地	
５区堆積物（自然流路）	Ｂ１	８層	暗(褐)灰色シルト質細砂		DBⅢ	やや水深のある沼沢湿地	流れを伴う
	Ｂ２	９層	暗褐灰色シルト質細砂	小礫混じり			
	Ｂ３	13層	(淡)黒灰色シルト		DBⅡ	陸域	ジメジメとした陸域
	Ｂ４	14層	黒灰色シルト		DBⅠ	やや水深のある沼沢湿地	
４区堆積物	Ｃ１	15層	淡黒灰色シルト		DcⅡ	陸域	
	Ｃ２	16層	黒灰色極細砂	シルト混じり	DcⅠ	ジメジメとした陸域	

２区あるいは５区の自然流路内堆積物では、いずれも当初やや沼沢湿地あるいは水深のある沼沢湿地であったが、その後陸域あるいはジメジメとした陸域に変化したことが推定された。この変化は、遺物から古墳時代後期頃と考えられる。

その後の奈良～平安時代前期あるいは平安時代後期には、流れを伴うやや水深のある沼沢湿地へと変化している。

なお、４区の弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の堆積物では、当初ジメジメとした陸域であったが、その後は比較的乾いた陸域へと変化したことが考えられる。

なお、弥生時代後期末あるいは古墳時代前期初頭の堆積物中には、少ないものの海水種珪藻化石が含まれていることから、多少海水の影響を受けた可能性が考えられる。２区の自然流路内20層の標高が概ね１mであることから、この時代の海水準はさらに低いものと考えられる。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理，42，73-88.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究、27、１-20.

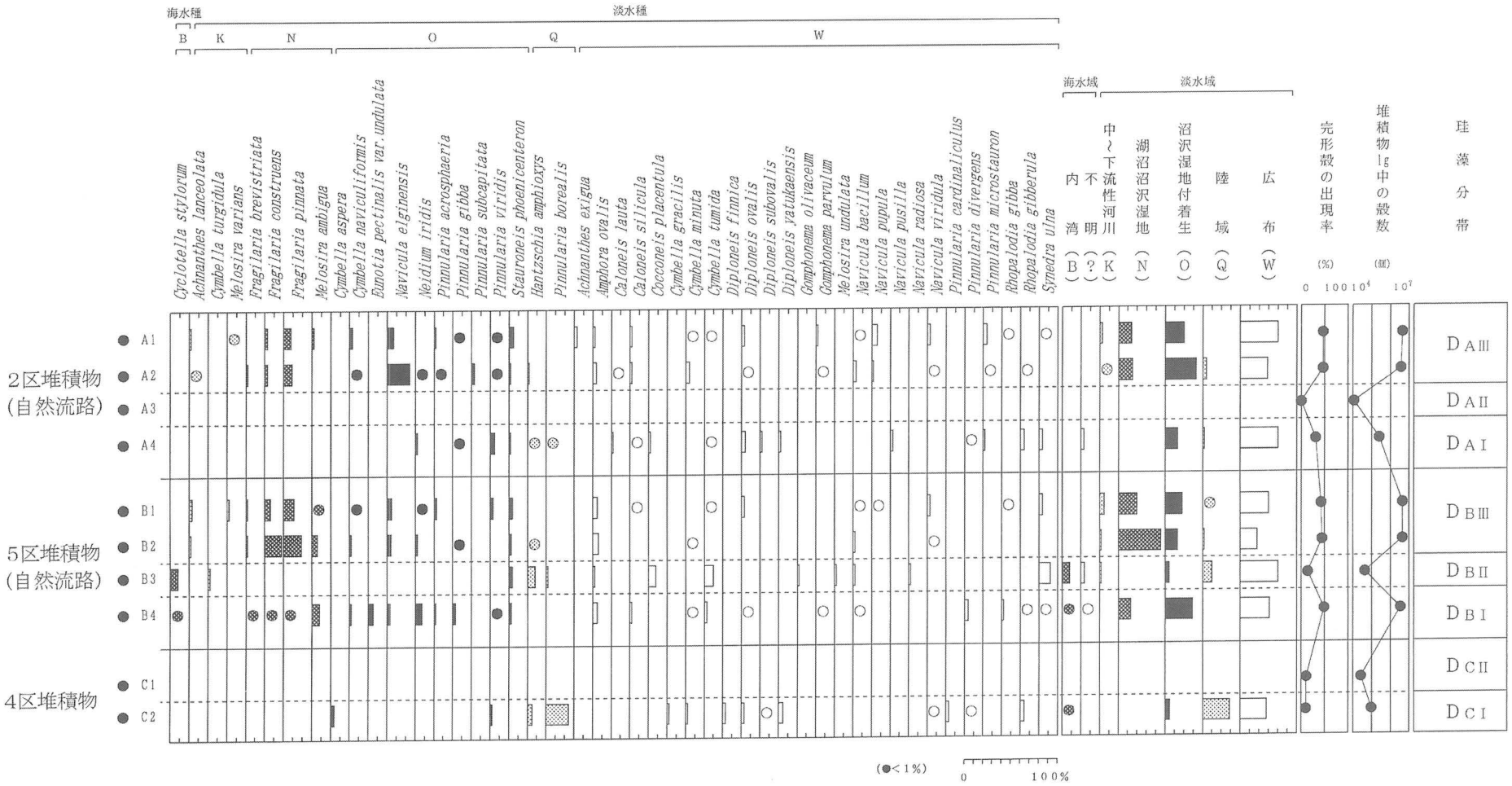
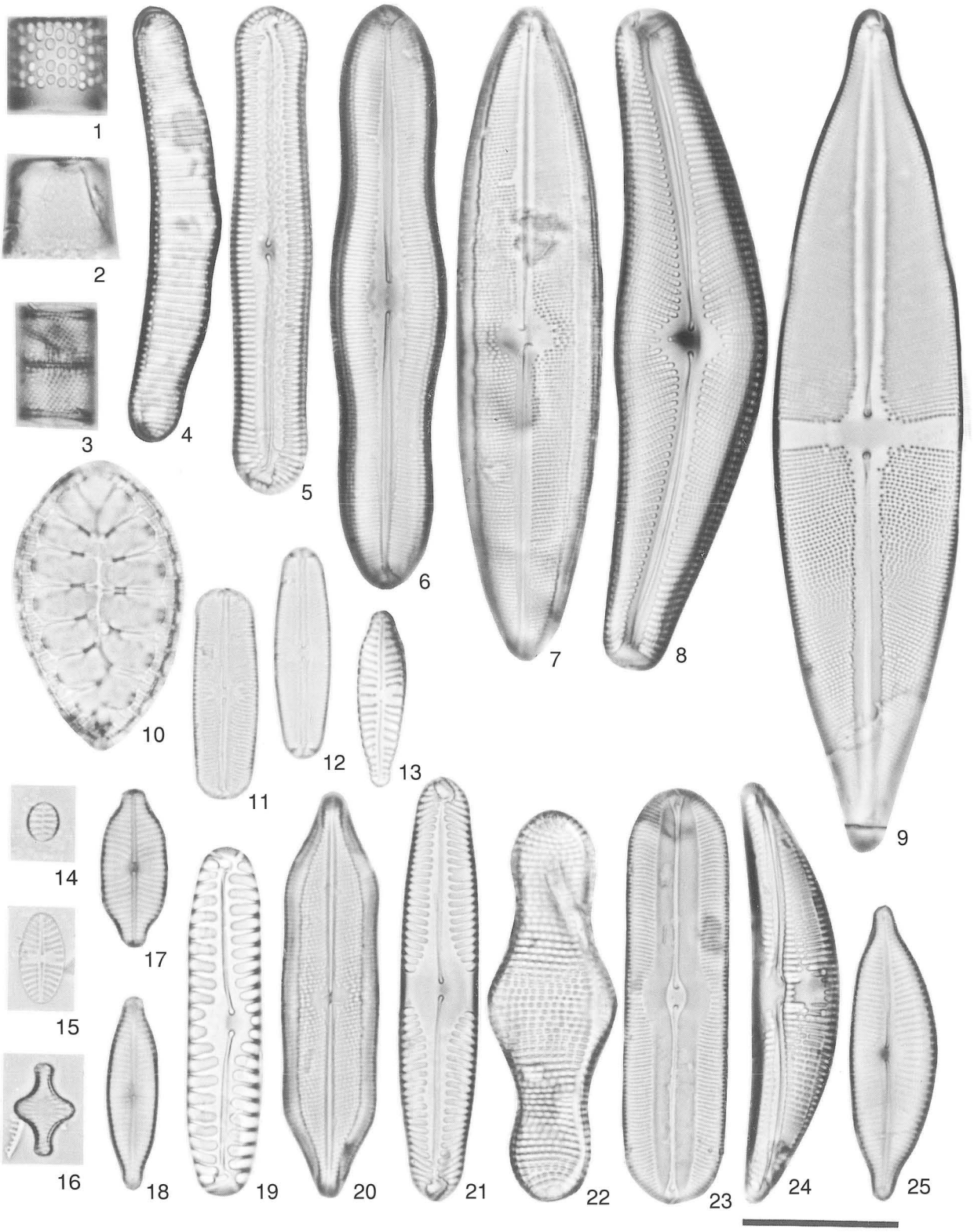


図113　堆積物中の珪藻化石分布図（2%以上の分類群を表示）



挿図写真15　堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真　（スケール；20μm）

1. *Melosira pensacolae* A 4
2. *Melosira varians* B 1
3. *Melosira ambigua* A 1
4. *Eunotia pectinalis var. undulata* B 4
5. Pinnularia acrosphaeria A 1
6. *Caloneis silicula* B 1
7. *Neidium iridis* B 4
8. *Cymbella tumida* A 1
9. *Stauroneis phoenicenteron* A 1
10. *Surirella fluminensis* A 4
11. *Navicula bacillum* B 1
12. *Navicula pupula* A 1
13. *Gomphonema parvulum* A 2
14. *Fragilaria pinnata* A 1
15. *Achnanthes lanceolata* A 2
16. *Fragilaria construens* A 1
17. *Navicula elginensis* A 1
18. *Gomphonema parvulum* B 1
19. *Pinnularia borealis* A 4
20. *Neidium hitchcokii* A 1
21. *Pinnularia gibba* A 1
22. *Achnanthes inflata* A 4
23. *Navicula americana* B 4
24. *Amphora ovalis* B 1
25. *Cymbella naviculiformis* A 1

Ⅳ. ま と め

（1）遺跡の形成と環境

深江北町遺跡の地形環境の復元にあたっては、高橋学氏の業績[1]がまず挙げられる。この微地形環境分析によると、第9次調査地点は中列砂堆1から後背湿地にかけての地点にあたることが判る。この中列砂堆1は海岸線に平行して形成される地形を構成するもので、現状では完全に埋没してしまっているが、この地域では最も早く形成された微高地と判断されている。

高橋氏の分析を裏づけるかのように、今回の調査区西半では遺構群が形成される安定した海成砂で構成される砂堆が微高地状を呈し、東半は砂堆が存在せず、流路となっていた。4区南西隅の断ち割り調査では、第3面（遺構面標高2.10～2.20m）以下には海成砂と考えられる淡黄色極細砂層が約1.10m堆積し、標高1.40m付近まで掘るとかなりの湧水も確認できている。なお、2区の断ち割り調査では標高0.76mまでは西半区で確認できるのと同様の海成砂は確認できておらず、砂堆背後の後背湿地にあたる沼沢湿地を形成していたことが珪藻分析からも裏づけられている。

自然科学分析　堆積土壌の珪藻分析や花粉分析の結果からみても、弥生時代後期末～古墳時代前期初めには、それまでややジメジメとした陸域あるいはやや沼沢湿地であったものが、当該期にはすでに陸域として安定していたことが判明している。なお、絶対量は少ないものの、海水種珪藻化石も確認されることから、少なからず海水の影響を受けた可能性も指摘されている。また、当該期には花粉分析の結果からは、遺跡周辺には針葉樹のマツ属複維管束亜属、スギ属からなる林分と、アカガシ亜属、シイノキ属を主体とする照葉樹林が優勢であったと予想されている。また一方で、奈良～平安時代にかけては同じく照葉樹林を構成していたが、シイノキ属をあまりまじえず、アカガシ亜属を主体とするものに環境変化していたとされる。さらに、調査区内では水田雑草の比率が高くなっていることから、水田土壌が存在する可能性も指摘され、あわせてソバ栽培の可能性も予測されている。

以上の成果を含めて第9次調査地点における遺跡の変遷とあわせて考えると、深江北町遺跡では弥生時代中期に集落の形成が始まり、弥生時代末～古墳時代初めに砂堆上が墓地として利用され、この周辺の後背湿地には水田域が広がっていた[2]。しかし、古墳時代後期前半には洪水砂によって、すっかり埋没してしまう。やがて、この洪水砂上面が安定した微高地上には、芦屋廃寺創建期には改めて集落が遷地し、掘立柱建物などが営まれていく。芦屋川西岸地域に官衙関連遺跡が濃密に分布する時期である。調査区東半で確認したＳＲ01も平安時代中期にはほぼ埋没し、細々と続いていた集落も平安時代後期以降には当地で続けて立地するのではなく、第3次調査地点同様にほぼ全域が水田域として土地利用されていくようである。なお、埋没したＳＲ01は谷地形を踏襲した流路の一部と推定でき、東川用水と呼ばれ、中世～近世まで用水路として利用されていたことが知られている[3]。平安時代後期以降の集落は第7次調査地点などのより高乾な安定した地域へと移動していったものと考えられる。

（2）遺構の変遷　（集落景観の復元に向けて）

まず、深江北町遺跡第9次調査の第2遺構面で確認できた掘立柱建物を中心とする遺構群の変遷について簡単にまとめる。第Ⅱ章で詳述したとおり、いずれの掘立柱建物でも出土遺物が少なく、時期比定が曖昧となっている点は否めない。各柱穴の切り合い関係を最優先にし、各建物の桁行方位もあわせて検討した結果、下記のような変遷を考えた。なお、ＳＢ03とＳＢ05は切り合い関係が認められないものの、同時併存はあり得ないため、桁行方向の違いから便宜的に上記のとおり若干の時期差を設定した。また、7世紀後半に比定できるＩ期を遡る時期の遺物も散見できるため、本来の集落の形成は奈良時代を遡るものと想定できるが、明確な遺構には恵まれていない。

Ⅰ期	奈良時代前半？	ＳＢ01→ＳＢ02	集落の形成期
Ⅱ期	奈良時代中頃	ＳＢ07・ＳＸ06・ＳＤ09→08	建物の中断・移設期？
Ⅲ期ａ	奈良時代後半	ＳＢ03・04・06	柵と道状遺構を伴う集落の発展期
Ⅲ期ｂ	奈良時代末	ＳＢ05	
Ⅳ期	平安時代前期	ＳＲ01の最終埋没期	集落の衰退期

柱材　確認された奈良時代を中心とする掘立柱建物7棟の特徴は、いずれも南北棟であり、その柱穴掘形の規模は0.5～1.1ｍで、柱材はＳＢ03－Ｐ１の直径28cmを最大として、概ね25cmまでの柱材が多いことが指摘できる。寺田遺跡第1地点[4]の柱材と比較すると、総体にやや細く、コウヤマキ材ではなく、深江北町遺跡ではヒノキ・クリ材が目立つ点が指摘でき、柱材の調達に差異が認められる。しかしながら、掘立柱建物そのものの機能を推定させるような遺物には恵まれていない。

桁行方位　また、上述した遺構の変遷から桁行方位がＮ20°Ｗ前後を示す建物がＩ期、Ｎ10°Ｗ前後がⅡ期、Ｎ５°Ｗ前後がⅢ期と考えて差し支えないものと考えており、時期が降るに従って桁行方位が座標北に徐々に近づいてくる傾向が見られる。

桁行方位で見る限り、Ⅲ期ａとしたＳＢ03・04・06の掘立柱建物は津知遺跡第2地点の掘立柱建物とほぼ同一の桁行方位を示すことが判る。若干の時期差は認められるが、両者の掘立柱建物は何らかの計画性をもって建てられた掘立柱建物群の一部と推定できよう。また、寺田遺跡第127地点[5]でもほぼ同一の桁行方位を採る3棟の大型掘立柱建物が確認されており、菟原郡東半では計画的な配置を目指した掘立柱建物の建設が実施された証とも考えられよう。

集落景観　ここでは、南北方向の道状遺構を伴い、柵列を隔てて掘立柱建物が形成されるⅢ期ａとした時期に、これらと同一方位を示すＳＲ01西岸の杭列の存在をも重視した上で、西側を柵列で画し、東側も区画としての自然の地形（ＳＲ01）を生かした東西約40ｍ（南北の範囲については不明）の範囲での整然と配置された建物群の景観を復元しておきたい。ＳＤ06から墨書土器「大ヵ垣」が確認された点も柵に囲まれた区画についての示唆に富む。d

道状遺構　さて、ＳＤ05・07は同時期の遺構とは重複しておらず、道状遺構を構成するものとして妥当であれば、この遺構の指向する方位はＮ10°Ｗ前後であり、溝間の平坦面の幅は約５ｍとなる。古代山陽道に直交する支道である可能性を指摘しておきたい。津知遺跡

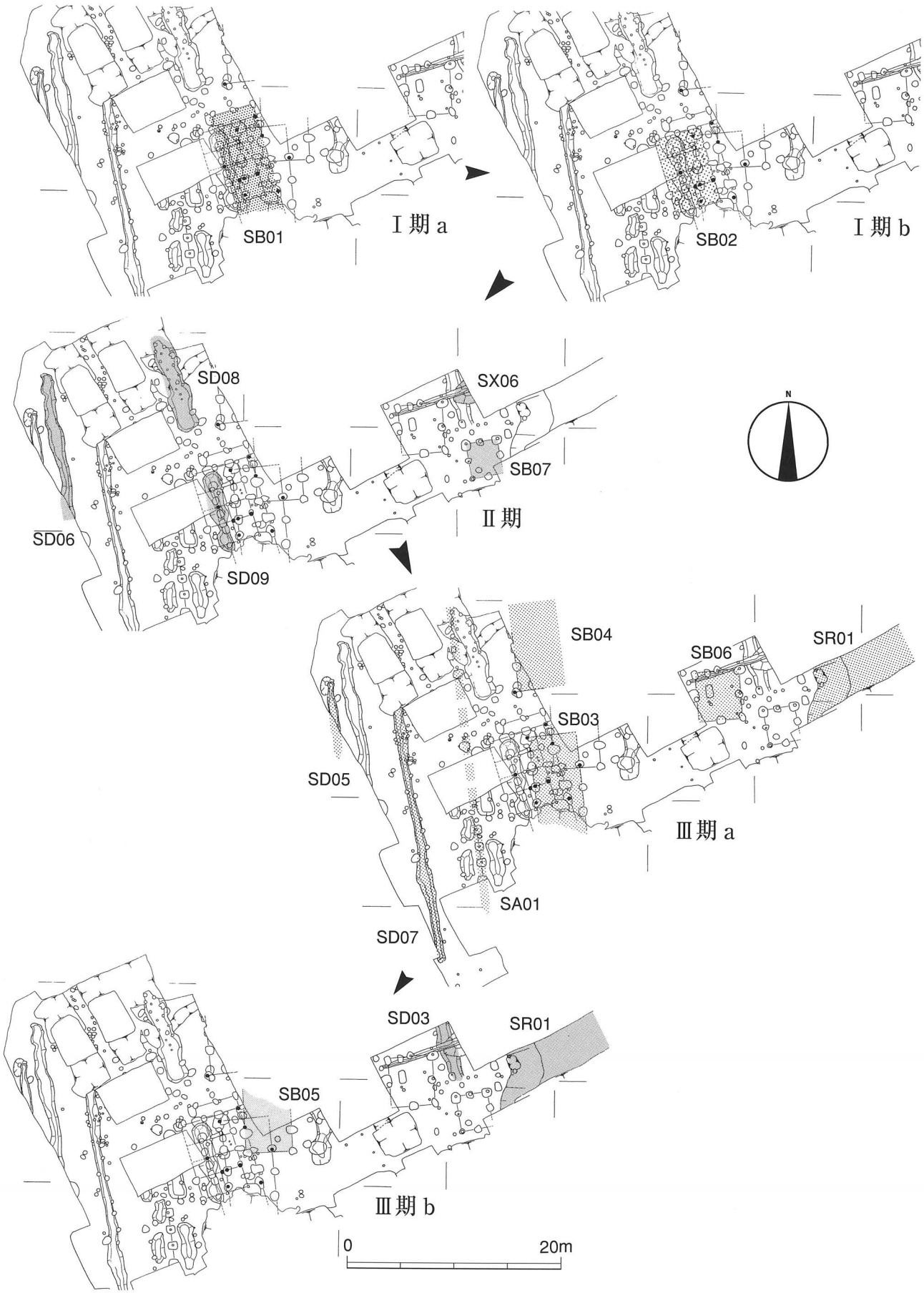

SB01
Ⅰ期a
SB02
Ⅰ期b
SD08
SX06
SB07
SD06
SD09
Ⅱ期
N
SB04
SB06
SR01
SB03
SD05
Ⅲ期a
SA01
SD07
SD03
SR01
SB05
Ⅲ期b
0
20m

図114　遺構の変遷

表36　奈良～平安時代前期の掘立柱建物　対照表

遺跡名	次数・地点	遺構名	間数	規模 東西m	規模 柱間m	規模 南北m	規模 柱間m	棟方位	面積 m²
深江北町	第９次	SB01	２×（４＋１）	4.2	1.9～2.1	7.30以上	1.2～2.3	N 19.5° W	(30.7)
		SB02	（１＋１）×４	4.2	1.9～2.3	7.4	1.6～2.1	N 18.5° W	31.1
		SB03	１×３以上	4.6	4.6	6.4以上	1.5～2.6	N 3.5° W	(29.4)
		SB04	？×２以上	—	—	4.2	1.8～2.3	N 3.5° W	—
		SB05	１×２以上	4.3	4.3	4.3以上	2.0～2.3	N 3° W	(18.5)
		SB06	２×２	4.3	2.1	4.7	2.3	N 5° W	20.2
		SB07	２×２	3.0	1.3～	3.4	1.7	N 8.5° W	11.2
		SA01	３	—	1.65	4.9以上	1.5～1.6	N 7° W	—
	第１次	建物１	２×４	3.8	—	8.9	2.3	N 10° W	33.8
	Ｃ１区	建物２	２×４	4.2	1.8	8.6	2.3	N 9.5° W	36.1
		建物３	２以上×２以上	3.8	2.3			?	
津知	第２地点	SB 1	４×３	9.5	1.9	7.5		N 85° E	71.3
		SB 2	１×２	2.5		3.5		N 5° W	8.8
		SB 3	３×３	4.8		5.0～5.2		N 5° W	25.0
		SB 4	５×２	7.9		4.5		N 85° E	35.6
寺田	第１地点	建物１	３×２	4.2		3.6	1.8～1.9	N 5° W	15.2
		建物２	２以上×２以上	3.70以上	1.3～1.5	3.60以上	1.7～1.9	N 6° W	—
		建物３	３×３	5.5	1.7～1.9	5.9	1.8～2.1	N 3° W	32.5
		柵１	—	—	1.8～1.9	8.3	1.9～2.2	N 7° W	—
	第127地点	SB101	３×５	5.4	—	10.0	2.0	N 4° W	54.0
		SB102	２×１以上	4.0	1.8	2.0	2.0	N 4° W	(8.0)
		SB103	３×５	6.0	2.0	11.0	2.2	N 4° W	66.0
		SB104	２×２以上	5.4	2.0	5.4	2.7	N 0° W	(29.1)
上沢	第８次	SB201	３×２	7.0	2.7	4.2		N 50° E	29.4
		SB202	２×３以上	4.0	2.2～2.5	4.5以上	1.5	N 28° W	(18.0)
		SB203	２×１以上	4.6	2.0	4.3以上	2.1	N 15.5° W	(19.8)
		SB204	３×１以上	4.8	2.3	2.9以上	2.0	N 26° W	(13.9)
		SB205	２？×２以上	4.4	1.6	5.8以上		N 24° W	(25.5)
		SB206	３以上×１以上	6.4以上	?	4.0以上	2.3	N 20° W	(25.6)
	第26次	SB201	１×２以上	4.0	2.2	6.2以上	2.4～2.6	N 42° W	(24.8)
御蔵	第９次	SB01	２×３	4..01	4.0	6.3	2.0～2.2	N 10° W	(25.8)
		SB02	１以上×２以上	1.7以上	2.0～2.2	4.3以上	2.1～2.2	N 24° W	
		SB03	１以上×２以上	2.3以上	1.7	3.8以上	1.9	N 20.5° W	
		SB04	１以上×１以上	2.0以上	2.3	2.0以上	2.0	N 26° W	
大田町	第１次	建物１	２？×２？		2.0			N 5° W	
		建物２	３×２	2.9		3.4		N 23° W	9.9
		建物３	２×２	3.6		3.6		N 20° W	13.0
		建物４	２×２	3.3		2.2		N 21° W	7.3
		建物５	１以上×１以上					N 24° W	
		建物６	２以上×２以上				1.5	N 36° W	
		建物７	２？×２？	3.5	1.7	3.5		N 33° W	(12.3)
		建物８	２×３	3.7		4.4	1.4～2.3	N 22° W	16.3
	第２次	SB301	２×３	3.3	1.2～1.6	4.4	1.5	N 1° E	14.5
		SB302	１×２	2.6	1.6	4.1	2.0	N 14° W	10.7
		SB303	１以上×２		2.6		1.9	N 68° E	
		SB304	１×２	2.6	1.9	3.8	2.0	N 3.5° E	9.9
		SB305	３×２	6.2	2.6	3.8	2.0	N 64° E	23.6
	第３次	建物１	４×３	7.7	2.4	5.1	1.2～1.8	N 65° E	39.3
		建物２	４×３	7.9	1.8～2.0	6.0	1.4～2.1	N 67° E	47.4
		建物３	３以上×３以上	5.50以上	2.1～2.4	6.70以上	1.2～2.9	N 13° W	—
		建物４	３×３？	4.8	1.7～1.9	4.8	1.6～1.8	N 11° W	23.0
		建物５	２×３	5.4	1.6～1.8	3.7	1.8～1.9	N 55° E	20.0
		建物６	３以上×２以上	5.20以上	1.8～1.9	3.70以上	1.8～1.9	N 78° W	—
	第５次	SB102	２×４以上	4.2	1.4～1.8	7.2以上		N 8° W	(30.2)
	Ａ・Ｂ区	SB103	３以上×１以上	4.0以上		1.8以上		N 10° W	—
		SB104	２×２以上	4.0		4.2以上		N 8° W	(16.8)
		SB105	２×３以上	4.4		6.7以上		N 8° W	(29.5)
		SB106	３以上×１以上	4.0以上		1.8以上		N 88° E	—
		SB107	３×３	6.8		6.8		N 22° W	46.2
		SB108	４×２	8.4		6.7		N 85° E	56.3
		SA101	４以上	—		8.2以上		N 9° W	—
	Ｃ区	SB103	２×４以上	3.4		8.2以上		N 30° W	(27.9)
		SB104	２×５	4.8		10.6		N 28° W	50.9
		SA101	４以上	—		6.8以上		N 13° W	—
		SB201	２×２以上	4.5		4.5以上		N 17° W	(20.2)

凡例）　1　方位はいずれも座標北からの方位、但し、寺田遺跡第１地点は磁北からの方位
　　2　面積の（数字）は現状値を示す

掘形の平面形態	掘形の規模	柱材・柱痕太さ（cm）	時期	その他の特徴	参考文献
隅円方	0.5～1.1	20～25	奈良時代前半?	側柱・南へ延びる?北面庇	本　書
円	0.6～0.7	15～20	奈良時代前半	総柱・南北棟、SB01より新	
隅円方	0.5～1.1	20～30	奈良時代後半	側柱・南北棟・SB02より新	
隅円方	0.5～1.1	20～25	奈良時代後半	側柱・南北棟・SB03と同時期	
楕円	0.5～1.1	（抜き取り）	奈良時代後半	側柱・南北棟	
楕円	0.5～1.1	15～25	奈良時代後半	側柱・南北棟・西側に延びる?	
不整	0.5～1.1	20～25	奈良時代後半?	側柱・南北棟	
隅円方	0.8～1.0	20		南へ延びる?	
円	0.5前後	20	?	南北棟・側柱	山下史朗編　兵庫県文化財調査報告第54冊『神戸市東灘区深江北町遺跡』兵庫県教育委員会　1988
円	0.5～0.9		建物1と前後する	南北棟・側柱	
円			奈良～平安初め		
不整楕円	0.5～1.1		奈良末～平安前期	側柱・東西棟	森岡秀人「津知遺跡第2地点の発掘調査の概要」芦屋市文化財調査報告第34集『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書　1999
楕円	0.2～0.6	16	奈良末～平安前期	側柱・南北棟、SB1と併存不可	
楕円	0.5～0.8	～34	奈良末～平安前期	総柱・南北棟、SB1と併存不可	
楕円	0.4～0.8		奈良末～平安前期	側柱・東西棟	
方	1.03～1.56	25～29	奈良～平安	南北棟・総柱、倉庫?	南博史編　『芦屋市寺田遺跡発掘調査報告書』財団法人古代学協会　1985
方	0.81～1.47	25?	奈良～平安?	側柱?	
方・円	0.63～0.90	?	奈良末～平安初め	L字形、和同開珎	
長方	0.7～1.2	30?	奈良末～平安初め		
方	約1.0	30	奈良前半ごろ	南北棟・側柱	芦屋市教育委員会『寺田遺跡(第127地点)発掘調査現地説明会資料』　2001
隅円方	0.8		奈良前半ごろ	南北棟・側柱	
方	約1.0	25～30	奈良前半ごろ	南北棟・側柱	
円～楕円	1.2～1.5	30	奈良?	南北棟・側柱	
円～楕円	0.7		奈良時代	東西棟・側柱	斎木巌・三輪晃三「上沢遺跡第8次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2000
円	0.65～0.7		〃	南北棟・側柱	
円	0.65～0.8		〃	南北棟・側柱、SB202より古	
円	0.45～0.5		〃	南北棟・側柱	
円	0.5～0.8		〃	南北棟・側柱	
円	0.4～0.6		〃	南北棟?・総柱	
隅円方	0.6～0.9		奈良時代前半	南北棟・側柱	参考文献6
隅円方形	0.8	18	奈良時代中頃	南北棟・側柱	山上雅弘「第9次調査」『御蔵遺跡―第8・9・10次調査―』神戸市教育委員会　2000
円・不整円	0.6～1.0	35	奈良時代後半	南北棟?・側柱?	
円	0.4～0.5	―			
不整円	0.8～0.9	25	奈良時代後半	総柱?	
				根石	吉川義彦『大田町遺跡発掘調査報告書　神戸市立須磨在宅福祉センター建設に伴う事前調査』大田町遺跡調査団関西文化財調査会　1994
円	0.3～0.4			側柱・南北棟、根石	
円	0.3		建物4より新	側柱・南北棟、根石	
不整円	0.4～0.65			総柱・東西棟	
隅円方?	0.65～0.85				
隅円方	0.8～1.0		奈良時代後半	大型・根石・抜き取り	
隅円方	1.1			側柱?・南北棟?	
円	0.5～0.6		建物4より古い	総柱・南北棟	
隅円方			8～9世紀	総柱・南北棟	口野博史・川上厚志「大田町遺跡」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1994
方			8～9世紀	側柱・南北棟	
不整円			8～9世紀	総柱・東西棟、西側へ延びる	
隅円方			8～9世紀	側柱・南北棟	
隅円方			8～9世紀	側柱・東西棟	
隅円方・	0.5～0.8	20	9～10世紀	総柱・東西棟	森内秀造・山上雅弘　兵庫県文化財調査報告第128冊『神戸市須磨区大田町遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会　1993
	0.45～0.8	20	9～10世紀	側柱?・東西棟	
	0.6～0.9	20	9～10世紀	総柱・南北棟	
	0.7～0.9	20	9～10世紀	側柱・南北棟?	
隅円方	0.5～0.6	20	9～10世紀	側柱・東西棟	
隅円方	0.75～1.0	20	奈良時代前半	総柱・東西棟	
方	0.8		9世紀後半?	側柱・南北棟	山口英正・東清代秀「大田町遺跡第5次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1997
円	0.6～0.7		9世紀後半?	側柱・南北棟	
円	0.4～0.5		9世紀後半?	側柱・南北棟	
円	0.4～0.5		9世紀後半?	側柱・南北棟	
円	0.2～0.4			側柱・東西棟	
円	0.3～0.4			側柱・南北棟	
円	0.2～0.4			総柱・東西棟	
円	0.4～0.5		9世紀後半?		
円	0.4～0.6		C―SB104より古	側柱・南北棟	
円			9世紀後半より新	側柱・南北棟・東西両庇	
円	0.4～0.5		9世紀後半?		
不整方	0.8～1.2		8世紀後半?	側柱・南北棟	

参考文献6　斎木巌・中居さやか「上沢遺跡第8次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2001

第17地点[6]の第2遺構面で確認された幅0.9～1.2mの道状遺構の指向方位はN10.5°Wで、その方向性が類似するものの、幅員の相異と10～12世紀（平安時代）とされる時期的な隔たりが認められる。少なくとも、奈良～平安時代にかけての当地域での条里型土地割の復元への一助となるものと考えている。なお、古代山陽道の駅路を推定された条里型土地割の余剰帯の幅員は石屋川～芦屋川間では約15mとされ、菟原郡域での条里型土地割の復元方位　はN20°Wとされている[7]。こうした条里型土地割あるいは古代山陽道が有機的に関連していたとすれば、遺構の示す方位のうちⅠ期とした奈良時代前半の方位が同方位を示し、当該期に施行されたとできるかもしれない。

他遺跡との比較　次に、深江北町遺跡の周辺地域に位置する菟原郡東半の官衙関連の遺跡、または八部郡西半にあって官衙関連遺跡とされる長田区御蔵遺跡あるいは「須磨驛家」と推定されている須磨区大田町遺跡で確認された掘立柱建物との比較（表36）を行いながら、さらに検討を加えていく。

さて、問題点としていずれの掘立柱建物も出土遺物が少なく、時期比定が曖昧な点は否めないことに加え、いずれの調査例でも面的なまとまりの把握できる事例が多いとは言えないのが現状である。そこで、各建物の規模が明確でないものも少なからず含まれており、今回の報告と同様に、提示された時期を参考としながら桁行方位によって分類しようと試みたものの、残念ながら単純には分類できないようである。奈良時代を主体とする時期に限ってみると、側柱建物が主流を占め、南北棟が目立つ点を指摘できる以外は、津知遺跡ＳＢ１が大規模かつ東西棟の建物であることで群を抜いて際立っている。つまり、東西棟の大型建物は各遺跡内での特別の意味をもつ建物である可能性を指摘できるに過ぎない。さらに、菟原郡東半の掘立柱建物は比較的桁行方位にまとまりが認められるものの、桁行方位による時期的な変遷をうまく説明できるまでには至らない。

八部郡西半　一方、八部郡西半の各遺跡についてみていくと、上沢遺跡では奈良時代の掘立柱建物はいずれも柱穴が小規模で、桁行方向での統一的な配置は認められない。また、大田町遺跡では奈良時代後半とされた第１次調査の建物６の礎石建物の存在が驛家を想定していく上で魅力的ではあるが、総体的に９世紀後半代以降に降る掘立柱建物が多く確認され、時期的な比較材料は乏しい。御蔵遺跡第９次調査では時期を追って桁行方位が西に偏していく傾向が認められ、深江北町遺跡とは全く逆の現象が認められる。なお、吉本昌弘氏が条里型土地割の復元[8]にあたって、八部郡西半域ではN38°Wの数値を提示されているが、この数値に合致する明確な資料は提示できない。資料の増加と再考できる機会を待ちたい。

しかし、提示された時期が同一であっても、桁行方位が調査例毎に異なり、方位を同じくする建物が同時期の所産とはできない状況が把握できよう。無理に方位によって括ろうとすると、各報告で指摘される時期とはまま齟齬をきたす結果となってしまうという問題点が浮上してくる。この問題点を克服する術は現状では持ち合わせていないが、各遺跡内あるいは各遺跡間でこれほどにも方位が揃っていない点を換言すれば、官衙関連の遺跡とは認定できず、整然と配置されていない建物の集合としてのいわゆる一般の集落跡とも考えられよう。

（3）遺物の検討

今回の調査では、第Ⅱ章でもみてきたように多岐にわたる遺物が出土している。以下、種類毎に簡潔にまとめていく。

a）　土器類

これまで当地域での当該期のまとまった資料に恵まれているとは決して言えないのが現状であり、今回の調査で確認された多種多用な土器について端的に述べることは困難である。

こうした中で、時期的には概ね7世紀末～9世紀代の時期幅の中に収まるもので、種類別にみると、土師器・須恵器が大部分を構成し、黒色土器や施釉陶器などがこれに混じる。しかしながら、今回の資料群も個々には目を見張るものが存在するものの、一括資料として扱えるものはほとんどない。

土師器

土師器では比較対象とできる資料がほとんどない現状では、その傾向を指摘することすらできない。具体的には数量で示せないが、煮沸形態を採る資料の比率が低いことが窺える。

ＳＸ06出土例は皿Ａでの暗文の消失の一方で、坏Ｂ・坏Ｂ蓋には丁寧な暗文の手法が残るという組み合わせが奈良時代中頃の一括資料として評価できるものと考えられる。さらに、ＳＸ06を切るＳＤ03の資料も、蓋を伴わないやや粗製の土師器坏Ｂがまとまって確認された上、土師器椀Ｂが共伴する資料として編年的にも有効と考えられ、今後の更なる類例の増加を待って再検討できる機会を待ちたい。

須恵器

一方、須恵器では肉眼観察によると、いわゆる優品が少なく、やや粗雑な印象を与えるものが多い傾向が指摘できる。また、寺田遺跡の須恵器でも相対的に粗雑なつくりのものが目立つ[9]状況で、深江北町遺跡と似たような傾向を示すようである。さらに、器種別にみると、供膳形態を採る器種が圧倒的に多く、大型の貯蔵形態を採る器種の比率が低い印象を受ける。

さて、当該期の西摂津国内での須恵器生産は宝塚市勅使川窯跡[10]・平井窯跡や三田市末古窯跡群[11]などが知られているが、胎土や焼成から後者に類似する資料が少なからず存在すると考えられる。また、壷Ｅには播磨の加古川市札馬窯跡群の製品と考えられる資料も含まれている。芦屋廃寺遺跡での検討[12]では鉄鉢形態の資料について大阪陶邑古窯跡群からの供給を推定され、かつ播磨産と考えられる製品の存在をも含めて、複数の生産地からの調達であったことを示唆されている。深江北町遺跡でも少なくとも同様の傾向を示すものと想定できるが、さらに検討の必要があろう。なお、具体的な流通の復元までにはとても至らないものの、ＳＸ06で土師器と共伴した内面アテ具痕が車輪文である須恵器甕などはその産地の追求において注意を要する資料であろう。

次に、個々の資料をみていく。高台内面に「驛」の墨書のある稜椀（209）は小川分類Ｂタイプ[13]に相当し、8世紀第2四半期から9世紀前半に盛行する器種[14]で、官衙関連遺跡での出土が指摘されてきた器種である。高台がこれまでに類例を見ない形態のものとなっており、底部外面の調整も回転ヘラ削りが明瞭ではないものの、体部外

面下半に施された回転ヘラ削り調整は丁寧なもので、比較的古相を示すものと考えられ、「驛」の墨書が認められることからも、官衙関連の遺物として重要であろう。また、圏脚円面硯（409）は砂粒を多く含む点でやや胎土が悪く、その発色から陶邑産を想起させる資料である。また、施釉陶器あるいは越州窯系青磁（658）が破片ながら少なからず存在する。最後に、ＳＤ08出土の甕（211）は以前に「硬質土師器」と呼んだもので[15]、加古川市西ノ池窯跡[16]では甕Ｇとして分類されたものである。西ノ池窯跡では工人集団内での使用の可能性が指摘されるものの、今回の出土例は煮沸形態としての甕の形態を採る須恵器として流通していたことが明らかとなった。

以上のように、遺物総体としては官衙関連遺跡を想定できる遺物が比較的高い比率で含まれていることも今回の調査成果の中では重要である。

墨書土器　さて、文字資料としての多数の墨書土器が確認されたことも重要である。第９次調査出土資料は表36のとおりで、合計39点を数える。時期的には概ね奈良時代後半期のものがほとんどである。墨書の施された部位について個別にみると、土師器・須恵器にかかわらず、いずれもが供膳形態の器種で、坏・皿では底部外面を基本とし、坏Ｂ蓋では天井部内面を基本とする。なお、（393）のみは天井部外面でつまみを取り囲むように墨書が施され、用途が相異していたものと考えられる。

これらの墨書土器のうち、約３割を占め、最も「驛」の墨書土器が多い点は注目に値する。また、ＳＤ08・09に集中して確認されている点から、俄かには決し難いが、今回の調査地点の近隣に、やはり驛家の存在を想定せざるを得ない。また、「大領」「小領」の墨書土器が確認された寺田遺跡第90地点[17]の存在から考えても、やはり芦屋川西岸地域に菟原郡衙をはじめとする官衙関連施設が集中し、この中に葦屋驛家の駅館院も含まれているものと推定できる。圏脚円面硯や稜椀の出土もあわせて考えると、芦屋廃寺遺跡・寺田遺跡・津知遺跡・深江北町遺跡と主要官衙とその関連遺跡が南北に連なって分布している姿が想起できる。

表37　墨書土器一覧表

遺物No.	墨書	種類	器種	部位	出土遺構
135	大ヵ垣	須恵器	坏A	底部外面	SD06
	大ヵ			口縁部外面	
205	□	須恵器	坏B蓋	底部外面	SD08
206	□	須恵器	坏B	底部外面	SD08
207	少ヵ	須恵器	坏B	底部外面	SD08
209	驛	須恵器	稜椀	底部外面	SD08
261	驛	須恵器	坏B蓋	天井部内面	SD09
262	驛	須恵器	坏B蓋	天井部内面	SD09
269	大ヵ垣	須恵器	坏B	底部外面	SD09
383	里ヵ	土師器	?	底部外面	SR01
384	北ヵ	土師器	?	底部外面	SR01
385	□	土師器	?	底部外面	SR01
386	大ヵ西	土師器	?	底部外面	SR01
387	東ヵ	土師器	?	底部外面	SR01
388	□	土師器	?	底部外面	SR01
389	馬戸	土師器	?	底部外面	SR01
390	所ヵ	土師器	?	底部外面	SR01
391	東	土師器	?	底部外面	SR01
392	驛	土師器	?	底部外面	SR01
393	皆□	須恵器	坏B蓋	天井部外面	SR01
394	驛ヵ	須恵器	坏B蓋	天井部内面	SR01
395	驛ヵ	須恵器	坏B蓋	天井部内面	SR01
396	驛ヵ	須恵器	坏B蓋	天井部内面	SR01
397	□	須恵器	坏B蓋	天井部内面	SR01
398	□	須恵器	坏B蓋	天井部内面	SR01
399	□	須恵器	坏B蓋	天井部内面	SR01
400	□	須恵器	?	底部外面	SR01
401	□	須恵器	?	底部外面	SR01
402	東ヵ	須恵器	?	底部外面	SR01
403	驛ヵ	須恵器	?	底部外面	SR01
404	百	須恵器	坏B	底部外面	SR01
405	□□	須恵器	坏B	底部外面	SR01
406	□	須恵器	坏A	底部外面	SR01
407	□	須恵器	皿A	底部外面	SR01
408	□百ヵ	須恵器	坏B	底部外面	SR01
669	驛ヵ新	土師器	坏A?	底部外面	遺物包含層
670	驛	須恵器	坏B蓋	天井部内面	遺物包含層
671	驛ヵ	須恵器	坏A?	底部外面	遺物包含層
672	驛ヵ	須恵器	皿A?	底部外面	遺物包含層
673	卅一	須恵器	坏B	底部外面	遺物包含層

b）　瓦

芦屋廃寺遺跡と同笵の軒瓦の出土は、森岡氏の説かれるネットワーク[18]の存在を裏づける資料のひとつとして注意を要する。しかしながら、これまでの出土地点の立地について見ると、芦屋廃寺遺跡が最も標高が高い位置を占め、順次寺田遺跡、（前田遺跡）、津知遺跡、深江北町遺跡と旧東川用水の東側に沿って舌状に南に延びる微高地上に立地しており[19]、各遺跡そのものでの出土状況を踏まえた使用状況の復元が今後は求められるのである。

むしろ、今回の瓦類の出土は出土量からみても、第９次調査地点での建物上屋での使用、すなわち「瓦葺粉壁」の建物の存在を物語るものではなく、先の旧東川によって上流の遺跡から運ばれてきたものと考えている。但し、約１km離れた芦屋廃寺遺跡から直接流下してきたものとは考え難いものの、軒瓦に限らず、丸瓦・平瓦にも被熱の資料が多いことは、芦屋廃寺での平安時代前期の火災をこれまでの資料と同様に裏づけるものと考えられる。

c）　木製品 - 特に木簡を中心に - [20]

第９次調査で確認できた木簡は、第Ⅱ章でみたように合計４点を数える。中でも木簡１とした支給伝票木簡は、当地域の古代の歴史を考えていく上で、極めて有効な資料である。

この支給伝票木簡に見える「椋人」は、９世紀前半の『新撰姓氏録』「摂津国諸番」の条に「石占忌寸同祖　阿知王之後也」とみえ、同族の帰化人系の氏族であったと推定されている「蔵人」「葦屋漢人」との関連性が窺われる。「蔵人」と「椋人」は同族と考えられることから、木簡にみえる「椋人」は「葦屋椋人」と解釈して大過なかろう。そして、「椋人安道」が「戸主」との記述から、菟原郡葦屋郷を本貫とし、郷内に在住した人物であったと推定できる。

さて、平城宮では「葦屋椋人」と記された木簡が２点確認されている。うち１点は第44次調査ＳＤ5785出土の和銅６年（713）６月５日の召文木簡[21]で、葦屋椋人大田が使者として食料と馬を与えられて、大和国内に在住する９名の官人を召喚するという内容のものである。また、もう１点は第32次補足調査のＳＤ4100で出土の7425木簡[22]で、728～770年頃のものとみられる。「□位下葦屋椋□」と記され、「□位」は「初ｶ位」と読まれ、葦屋椋人が下級官人であったことが推定される。また、正倉院文書の天平神護元年（765）には「従八位上勲七等葦屋倉人嶋麿」とあり、『続日本紀』の神護景雲３年（769）条には摂津国菟原郡人正八位下倉人水守等に対しての大和連の賜姓記事もみられる。

以上のような木簡や『史料』からみて、「椋人稲継」は菟原郡葦屋郷に在住し、郡衙あるいは驛家の職務に従事する下級官人であったことも推定できる。

さらに、「国儲」の記載がみえるのは、郡衙に設置された正倉に保管された官稲を割いて運用・支給していたことの証明としても重要で、菟原郡衙の存在と郡衙正倉内での正税の動きをも窺える資料としても位置付けられる。

また、木簡以外の木製品では、個々には時期比定が困難で、それぞれに用途の特定

できないものも含まれる。そのほとんどが概ね奈良時代後半～平安時代前期の資料として把握でき、保存条件にも恵まれたため、これまでにない量の資料となっている。遺跡の性格を端的に語るものは多くはないが、農耕具・紡織具・食事具などの日常に関わる製品や祭祀具のほか、加工部材やその残片あるいは杭材など多種に及び、総量として貴重な資料であることは言うまでもない。

（4）遺跡の性格　－古代山陽道と葦屋驛家に関連して－

以上のように、第9次調査地点では官衙関連遺跡としての重要性がさらに増す調査成果が得られた。上述したとおり、「驛」の墨書土器がまとまって確認できたことは、葦屋驛家の存在を積極的に肯定できる資料と言え、間接的には馬歯が多数出土していることも傍証とできるかもしれない（第Ⅱ章－（7）参照）。以下、遺構の変遷を古代山陽道の驛家に関する史料[23]と合わせながら、掘立柱建物で構成された遺跡の性格の機能を類推していこう。

全国的な規模での驛家の設置は、駅制を規定した『大宝律令』が初見とされ、8世紀初めには国家の威信をかけて整備され、山陽道は「大路」として国家の最重要幹線道路として位置づけられ、原則として30里（約16km）ごとに廿疋の馬を備え驛家が設置されていた。因みに、深江北町遺跡と須磨驛家と推定される大田町遺跡とは直線距離にして約18kmで、これが30里に近いことも判る。そして、山陽道諸国の驛家を整備充実させようとした記事も『続日本紀』天平元年（729）四月条に見えるのが、深江北町遺跡での集落形成期としたⅠ期に合致するのではなかろうか。設置当初の葦屋驛家には『厩牧令』第廿三にみえる「大路廿疋」の規定を超える35疋の馬が備えられていたことが『類聚三代格』巻十八　大同二年（807）十月廿五日の太政官符の記載によって窺われる。

やがて、深江北町遺跡第9次調査地点の遺構が盛期を迎える奈良時代後半期に当たる驛家についての直接的な史料は存在しない。山陽道の各驛家が蕃客に備えて礎石瓦葺建物に整備されていった時期と想定される。古代山陽道の驛家のひとつとして礎石瓦葺建物で構成される駅館の建物群が復元された布勢駅家[24]では、築地塀に囲まれた駅館院が8世紀後半～末には成立したとされ、その規模は東西60m弱、南北70m弱の平面方形のものとされる。古代山陽道の驛家は「瓦葺粉壁」と『日本後紀』大同元年（806）五月条にみえるのはよく知られているが、深江北町遺跡で今回確認できた建物群には瓦葺礎石建物は含まれておらず、今回の調査ではこれを裏付けるような資料は全く提示できない。

一方で、9世紀初めには各驛家での馬数を減らすという施策がすでに講じられた時期でもあり、律令体制の弛緩とともに驛家は衰退に向かう。前掲した大同二年（807）大政官符の記載では、「十五疋」までに馬数の縮小が施行されている。さらに、『延喜式』兵部省諸国驛伝馬条での「摂津国驛葦屋十二疋」の記述から、10世紀前半の段階までは驛家を含めて古代山陽道が機能していたことも窺われる。急速に整備された駅制も衰退期を迎え、国を挙げて駅制の維持に努めたことが想像される時期である。葦屋驛家に関連したと考えられる深江北町遺跡も例に漏れず、当該期には衰退し始めて

いたものと考えられる。

以上のように、驛家に関する文献史料からみた変遷とあわせて考えると、深江北町遺跡での掘立柱建物の機能が自ずと見えてくるのではなかろうか。駅館院そのものが確認できたとはとても言えないが、驛家に積極的に関連した施設、換言すれば駅戸の一部あるいは駅子などの日常に関わる集落を構成していたと言えよう。

一方、歴史地理学の立場からは、古代山陽道についてはその路線の復元案が提示されてきている[25]。高橋美久二氏も今回の調査成果を高く評価され、摂津国の古代山陽道驛家研究の原点とまで言及されている[26]。これらの地理学からのアプローチを検証する術を持たないが、状況証拠的には津知遺跡～深江北町遺跡を囲む範囲を通過していた可能性が俄然高まったとしても過言ではなかろう。すなわち、古代山陽道の路線復元に当たっては、現状では吉本昌弘氏の復元案[27]が妥当性を帯びているとできよう。森岡氏も新たな復元案[28]を提示されており、さらに今後議論が高まることであろう。ともあれ、将来にわたって考古学的な発掘調査による検証が望まれるところである。

（5）おわりに

以上は調査担当者でまとめた今回の調査成果についての見解である。冗長となり、拙い部分は多々あろうかとは存じますが、大方の叱正をいただければ幸いです。

芦屋市域での発掘調査例も日毎に蓄積され、芦屋廃寺遺跡あるいは寺田遺跡を含めて、芦屋川西岸地域はホットな歴史的な話題を続々と提供しつつある。残念ながら、それぞれの遺跡内容を総合的にまとめるにはとても力量不足である。

今回の調査成果は、古代の地域計画の追及という観点からも重要な位置を占めることは他言を要しない。今回の調査成果が少しでも当地域の歴史解明のために寄与できれば幸いです。（山本）

註　（1）　高橋学「芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅲ―深江北町遺跡の地形環境分析―」兵庫県文化財調査報告第54冊『神戸市東灘区　深江北町遺跡　―県営神戸深江団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』兵庫県教育委員会　1988

（2）　山下史朗編　兵庫県文化財調査報告第54冊『神戸市東灘区　深江北町遺跡　―県営神戸深江団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』　兵庫県教育委員会　1988

（3）　森岡秀人・竹村忠洋・古川久雄　芦屋市文化財調査報告第35集『芦屋廃寺遺跡（第53地点）・寺田遺跡(第104地点)震災復興埋蔵文化財確認調査概要報告書』芦屋市教育委員会　1999

（4）　南博史編『芦屋市　寺田遺跡発掘調査報告書』財団法人古代学協会　1985

（5）　前田佳久・平田朋子・中居さやか　芦屋市文化財調査報告第43集『寺田遺跡発掘調査報告書　第127・130・132・133地点―都市計画道路山手幹線街路築造事業に伴う発掘調査―』芦屋市教育委員会　2002
神戸市埋蔵文化財センターでの遺物整理作業中に一部を実見した。

（6）　竹村忠洋　芦屋市文化財調査報告第34集『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書』芦屋市教育委員会　1999

（7）　吉本昌弘「摂津国八部・菟原両郡の古代山陽道と条里制」『人文地理』第33巻第４号　1981

（8）　註７に同じ

（9）　註５に同じ

（10）　高井悌三郎「勅使川窯跡発掘調査概要」『兵庫県埋蔵文化財集報』第１集　兵庫県教育委員会　1971

（11）　ａ)櫃本誠一編　兵庫県文化財調査報告書第50冊『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（１）』兵庫県教育委員会　1987

b)吉田昇・岸本一宏　兵庫県文化財調査報告書第62冊『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（2）』兵庫県教育委員会　1988

(12)　芦屋市教育委員会『「寺」字刻印土器と芦屋廃寺跡―第75地点発掘調査の成果から―』公開展示説明会資料　2001

(13)　小川真理子「稜椀の研究―播磨を中心として―」『今里幾次先生古稀記念　播磨考古学論叢』　1990

(14)　小川真理子「稜椀研究の再検討―播磨志方窯跡群にみる稜椀の様相―」『瓦衣千年―森郁夫先生還暦記念論文集―』　1999

(15)　山田清朝・山本雅和　「落合１・２号窯」　兵庫県文化財調査報告書第50冊『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（１）』兵庫県教育委員会　1987

(16)　西ノ池古窯址群発掘調査団『兵庫県印南郡志方町　西ノ池古窯址群調査報告書』　1979

(17)　森岡秀人・竹村忠洋「芦屋廃寺―芦屋廃寺中枢部の発掘調査」『平成12年度兵庫県下埋蔵文化財発掘調査連絡会資料』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　2000

(18)　森岡秀人「摂津国菟原郡葦屋郷・賀美郷考証覚書」『考古学論集』第５集　2001

(19)　山田清朝編　芦屋市文化財調査報告第39集『寺田遺跡（第117～124地点）発掘調査概要報告書』芦屋市教育委員会　2001

(20)　文献の探索にあたっては黒田恭正氏に何かと御尽力いただきました。ここに記して深謝いたします。

(21)　ＳＤ5785－（２）木簡　鬼頭清明「奈良・平城宮跡（第44次）」『木簡研究』第10号　木簡学会　1988
133木簡　木簡学会編『日本古代木簡選』岩波書店　1990

(22)　奈良国立文化財研究所史料第42冊別冊『平城宮木簡　五　解説』奈良国立文化財研究所　1997

(23)　高橋美久二「古代の山陽道」『古代を考える第17号　古代山陽道の検討』　古代を考える会　1978

(24)　a)岸本道昭「布勢駅家駅館院の復元」龍野市文化財調査報告８『布勢驛家―小犬丸遺跡1990・1991年度発掘調査概報―』龍野市教育委員会　1992
b)岸本道昭「再び布勢駅家駅館院の復元について」龍野市文化財調査報告11『布勢驛家Ⅱ―小犬丸遺跡1992・1993年度発掘調査概報―』龍野市教育委員会　1994

(25)　a）註７に同じ
b)足利健亮「山陽道の歴史地理的考察」歴史の道調査報告書第２集『山陽道（西国街道）』兵庫県教育委員会1992

(26)　2001，7，21，に開催された、神戸市埋蔵文化財センター企画展示『古代のメインロード　山陽道沿線物語』の講演会「古代の山陽道と芦屋駅家」での口頭発表

(27)　註７に同じ

(28)　註18に同じ

写真図版

調査地遠景（芦屋市寺田遺跡上空から）

写真図版１

1　2区断ち割りトレンチ全景（南西から）

2　土師器検出状況（南東から）

3　2区北壁の土層断面（南から）

1　4区東部断ち割りトレンチ近景（南東から）

2　弥生土器検出状況

1　4区西部断ち割りトレンチ近景（南西から）

2　5区断ち割りトレンチ西壁の土層断面

5区断ち割りトレンチ全景（北から）

写真図版５

調査区西部全景（南から）

調査区西部全景（東から）

SB01～SB05　近景（南東から）